



\* 0057706000 \*

0057706-000

424-50

仰武帖

海軍兵学校・編

海軍兵学校

昭和3

AJG



424

50

帙  
入

師

武

怡





師  
武  
怡

發行所寄贈本





表題ノ文字ハ聖德太子御自筆草稿本  
御物法華經義疏中ノ文字ヲ擴大シタ  
ルモノナリ  
出典ハ「唐柳宗元武」(水心子刀之銘)ニ  
採レリ

### 序

今春三月本校卒業式ニ際シ古兵書ノ展觀ヲ企劃シタルニ幸ニシテ諸方面ヨ  
リノ多大ノ後援ニ依リ兵學及戰爭ニ關スル數多ノ貴重ナル資料ヲ展觀スル  
コトヲ得タリ惟フニ斯ノ如ク多數ノ貴重ナル古兵書ヲ一堂ニ蒐集シテ展觀  
シタルカ如キハ正ニ前代未聞ナルヘク又今後ト雖モ容易ニ希冀スヘカラサ  
ルカ如シ加之兵學ノ研究ハ科學ノ隆昌ト共ニ其ノ面目ヲ一新シタルカ如キ  
モ其ノ精神ニ至リテハ我邦古來ノ武士道的精神ニ貢ウヘキモノ多キハ今更  
贅言ヲ要セス乃チ茲ニ原本所藏者ノ許可ヲ得主要ナルモノヲ撮影印行シテ  
之ヲ記念シ其ノ好意ニ酬ユルト共ニ古兵書研究ノ一助タラシメント欲ス庶  
クハ異日ノ考覈ニ資スルモノアラシク

昭和三年十月

海軍兵學校長

鳥

巢

玉

樹



仰武帖目次

一	後三年合戰繪詞	摹本 三卷ノ内	東京帝國博物館藏
二	同	摹本	同
三	平治物語繪詞	(三條殿打之卷) 摹本一卷	同
四	同	摹本	同
五	壇ノ浦海戰圖	(掛軸八幅ノ内)	下ノ關市 赤間宮藏
六	應仁亂合戰圖	繪卷 一卷ノ内	京都市 眞正極樂寺藏
七	諸所合戰圖	一卷ノ内	廣島市 淺野圖書館藏
八	關ヶ原陣圖屏風	一雙 寫真	東京帝國大學史料編纂掛藏
九	關ヶ原地形並陣立之事	寫本六枚ノ内	廣島市 淺野圖書館藏
一〇	關ヶ原合戰繪圖	繪卷二軸二十圖ノ内	同
一一	大阪夏陣圖	摹本 一幀	東京帝國大學史料編纂掛藏
一二	大阪落城之時讀賣	元和泥板 一卷	内 關文庫藏

一三	肥前島原之圖	着色寫本 一折	廣島市 淺野圖書館藏
一四	文久二年鹿兒島港戰爭之圖	一幀	東京帝國大學附屬南英文庫藏
一五	甲子兵燹之圖	繪卷 二卷ノ内	京都帝國大學藏
一六	黃海々戰之圖	繪卷 一卷	東京帝國大學附屬南英文庫藏
一七	北清事變錦繪	支那版畫 二葉	京都市 木村浩吉氏藏
一八	倭寇圖卷	(海防明治十洲空海委員會圖) 一卷	東京帝國大學藏
一九	同		同
二〇	船軍備圖	摹本 一幀	東京帝國大學史料編纂掛藏
二一	九鬼嘉隆畫像	摹本 一幀	同
二二	久留島通總畫像	摹本 一幀	同
二三	中嶋新六渡唐交趾圖	摹本 一卷	同
二四	元和航海記	寫本 一册	京都帝國大學藏



二五	角倉船圖	摹本一冊	京都繪畫專門學校藏
二六	末吉船圖	摹本一冊	同
二七	末吉孫左衛門畫像	摹本一冊	東京帝國大學史料編纂掛藏
二八	御朱印船旗	復寫四幀ノ内	同
二九	阿蘭陀船圖說	版畫一冊	京都帝國大學藏
三〇	海國兵談	寫本五册	山形縣石垣吉六郎氏藏
三一	三國通覽圖說	寫本一冊	同
三二	南蠻阿蘭陀之敵船乘捕行法	寫本一冊	京都市新村出氏藏
三三	海國兵要	刊本一冊	同
三四	海防集義	寫本一冊	内閣文庫藏
三五	各國旗圖	寫本一冊	東京帝國大學附屬南英文庫藏
三六	安宅御船之圖	一幀	同
三七	川船御成之圖	一幀	東京市帝國圖書館藏
三八	水軍書	六册	同

三九	水軍書	十册	廣島市淺野圖書館藏
四〇	御前本鐵砲書	寫本十一帖	内閣文庫藏
四一	同		同
四二	稻富流砲術傳授書	寫本十九册	京都帝國大學藏
四三	同		同
四四	同		同
四五	德丸原火技練習圖	摹本一冊	東京帝國大學史料編纂掛藏
四六	米艦載砲陸揚ノ景		静岡市英文庫藏書所藏
四七	津田流鐵砲口決記	寫本五册	内閣文庫藏
四八	海上砲術全書及附圖	寫本十六册	同
四九	中島流砲術稽古之卷	寫本一巻二十二册	同
五〇	紅毛火術錄	寫本二册	同
五一	水軍操砲鑑	寫本三册	同
五二	東西火攻辨	寫本五册	同

五三	大筒鑄之圖	寫本一冊	東京市帝國圖書館藏
五四	東京灣内砲臺設計圖	一幀	山形縣石垣吉六郎氏藏
五五	薩琉軍鑑	寫本四册	内閣文庫藏
五六	能島家傳法	寫本一册	同
五七	御關船御建物雛形	寫本一册	同
五八	海軍御用留	寫本一冊	同
五九	御軍艦操練所伺等之留	寫本一冊	同
六〇	神戸海軍操練所地割圖	摹本一幀	東京帝國大學史料編纂掛藏
六一	木村攝津守及威臨丸圖	一幀	東京市木村浩吉氏藏
六二	亞行日記	横帳一册	尾道市野田茂作氏藏
六三	築地海軍兵學寮圖	版畫一葉	東京市石井研堂氏藏
六四	風船御試之圖	版畫一葉	同
六五	築地海軍省圖	一圖	同
六六	慶應頃ノ錦繪帖	版畫一帖	東京市帝國圖書館藏

六七	武教全書	寫本一冊	長崎縣山鹿高三氏藏
六八	兵法雄鑑抄	寫本五册	同
六九	諸葛孔明八陣圖	寫本一巻	内閣文庫藏
七〇	佃田軍歌	寫本一册	同
七一	軍書題說	林道春自筆本一册	同
七二	孫吳摘語	林道春記版本一册	同
七三	倭漢軍談	寫本二册	同
七四	百戰奇法	寫本一册	同
七五	兵法一家言	寫本七册	同
七六	水戰秘訣	寫本三册	同
七七	武器圖考	寫本七册	東京市帝國圖書館藏
七八	軍器考畫圖	寫本一册	東京帝國大學附屬南英文庫藏
七九	兵書	二十四册	同
八〇	荷蘭馬具圖	寫本一巻	内閣文庫藏







一 後三年合戦繪詞 摹本 三卷ノ内

東京帝室博物館蔵

八幡太郎繪詞トモ云フ、陸奥國奥六郡ノ豪族清原武衡、家衡等一族ノ争ヨリ合戦ヲ起セシヲ、源義家陸奥守トシテ之ヲ鎮定シタル事蹟ヲ畫キ、之ニ詞書ヲ添ヘタルモノナリ。原本ハ因州池田侯爵家ノ秘藏ニ係ル。畫家ハ飛騨守惟久、詞書ハ僧玄惠ノ作ト稱セラル。惟久ニ就テハ後醍醐天皇ノ元享年間迄生存セシコトハ分明セルモ、其他ノ事ニ關シテハ一切不明ナリ。鎌倉後期ノ作品ニシテ、蒙古襲來繪詞及ビ別出ノ平治物語畫卷ト相並ビテ最モ代表的ナル戰爭繪卷ナリ。

本圖版ニ示スハ、「將軍のいくさ、すでに金澤の棚にいたりつきぬ。雲霞の如くして野山をかくせり。一行の斜雁雲上をわたるあり。雁陣忽にやぶれて四方にちりてどぶ將軍遙にこれを見て、惟み驚きて、兵をして野邊をよましむ。あんのごとく草むらの中より三十餘騎のつはものを尋ねえたり。是かくしをけるなり。將軍のつはものはれを射るに敵を盡して得られぬ」ト云ヘル一條ヲ描ク。飛雁行ヲ亂ル、トコロ、騎馬武者ノ馳セ違ヒテ鋭ク伏兵ヲ射ルトコロ、伏兵ノ草叢中ニ射ラル、トコロ、將軍義家ノ仰ギ見ルトコロ生氣滿幅ノ趣アリ。







二 後二年合戦繪詞 (摹本)

東京帝室博物館藏

前掲繪詞ノ一部ニシテ三段ノ場面ヲ含ム。右端ノ一段ハ源義光ガ兄義家ノ軍戦ニ不利ナルヲ聞キテ兵衛尉ヲ辭シ遙々應援ニ來リ、軍營ニ於テ兄ト對面セルトコロナリ。櫻幕ノ蔭ニテ魚島ヲ料理セルハ義光ノ來援ヲ喜ビテ饗應セントスルノ意ナルベシ。中央上方ニハ鎌倉權五郎ノ逸話ヲ描ク。相模國住人鎌倉權五郎景正ハ年餘僅カニ十六歳ニシテ從軍シ頗ル豪膽ノ聞ヘアリ。偶々敵ノ征矢右眼ニ當リ後方ニ貫キタルモ意トセズシテ奮戦シ、後退キテ仰向ケニ倒レタルトコロヲ三浦平太郎爲次ガ足ヲ以テ彼ノ顔ヲ踏マヘテ矢ヲ抜カントシタルヲ、權五郎怒リテ刀ヲ拔キ爲次ヲ突カントセリ。爲次驚キテ問フニ權五郎答ヘテ曰ク、「弓箭に當りて死は兵の望む所なり。いかでか生きながら足にてつらをもよめる、事はあらん。しかし汝をかたきとして我に死なん」と云フ。茲ニ於テ爲次彼ノ言ニ感シ顔ヲ仰ヘ膝ヲ曲ゲテ矢ヲ抜キ取りタリ。權五郎ガ右手ニ刀ヲ以テ突カントスル所、爲次ガ手ニテ矢ヲ抜カントスル表情ナド眞ニ迫レルモノアリ。

左端ハ敵ノ陣營ニシテ屹立スル岩壁上ニアリ。容易ニ近寄り難シ。之ヲ隔テ、兩軍對陣セルトコロヲ寫ス。ソノ中央ナル武士ハ伴次郎助兼ニシテ、彼ハ戰ニ際シテ勇敢先頭ニ立チテ進ムヲ當トシタルベシ義家ノ信任厚シ。今ヤ拜領ノ薄金ノ鏡ヲ着用シテ岩壁近ク進ミタルニ、敵ノ石矢飛來シテ將ニ當ラントスルヲ首ヲ垂レ身ヲ躡シテ避ケタルニ矢ハ甲ニ當リテ地上ニ落チタリ。甲ハヤガテ失ハレ助兼深ク之ヲ惜ミタリト云フ。







三 平治物語繪詞 (三條殿燒打之卷) 奉本一卷

東京帝室博物館藏

二條天皇ノ平治元年、藤原信賴源義朝ノ京都ニ於テ反亂ヲ起シタル所謂平治ノ亂ヲ描キタルモノニシテ、モト保元物語繪詞ト共ニ作ラレタルモノナリト傳ヘラル、モ、現存スルハ平治物語ノ中僅カニ三卷ニ過ギズ。一ハ本卷ニシテ「院御所夜討、附信西ガ宿所燒拂フ事」ノ段ヲ圖ス。原本ハ米岡ボストン博物館ニ所藏セラル。他ノ一巻ハ信西獄門ノ段ニシテ、現ニ岩崎男爵家之ヲ藏シ、殘餘ノ一巻ハ六波羅行幸ノ卷ニシテ伯爵松平直亮氏ノ襲藏ニ係ル。是等三卷共ニ住吉慶恩ノ筆ト稱セラル、モ後世ノ能淵ニ過ギズ。製作期ハ鎌倉中期ノモノナルベク、我國ニ於ケル合戦繪卷トシテ最も喧傳セラル、モノナリ。構圖卓拔、描寫精到ニシテ公卿武士ノ風體、動靜ノ微、人馬活躍ノ狀寫シ得テ精妙ナリ。

本卷ハ平清盛ガ熊野ニ詣テタル不在ニ乘ジ、信賴ガ數百騎ノ軍兵ヲ率キテ後白河上皇ノ御所三條殿ヲ襲ヒテ目指ス敵ナル藤原通憲ヲ求ムレドモ獲ズ。上皇ヲ御車ニ乘セ奉リ信賴義朝以下守護シテ大内へ渡シ奉ルトコロ、軍兵等三條殿ニ火ヲ放チタレバ上下驚愕狼狽セシコト、並ビニ姉小路西洞院ナル信西ノ宿所ヲ襲撃シテ火ヲ放チタル光景ヲ描キタルモノナリ。本圖ハ三條殿燒打ノ光景ニシテ不意打ニ遭ヒテ周章狼狽セル趣遺域ナク描寫セラル。古來合戦畫ノ遺存セルモノ、中最モ傑出セルモノト云フベシ。









四 平治物語繪詞

摹本

東京帝室博物館藏

前掲繪詞ノ一場面ニシテ上皇ヲ御車ニ載セ奉リ、信賴、義朝以下之ヲ守護シテ大内へ渡シ奉ルトコロヲ描キタルモノナリ。人馬活躍ノ狀最モ精緻ヲ極メ戦乱ヲ目ノアタリ見ルガ如キ心地ス。



五 壇ノ浦海戦圖

惣全極彩色掛軸八幅ノ内

下關市

赤

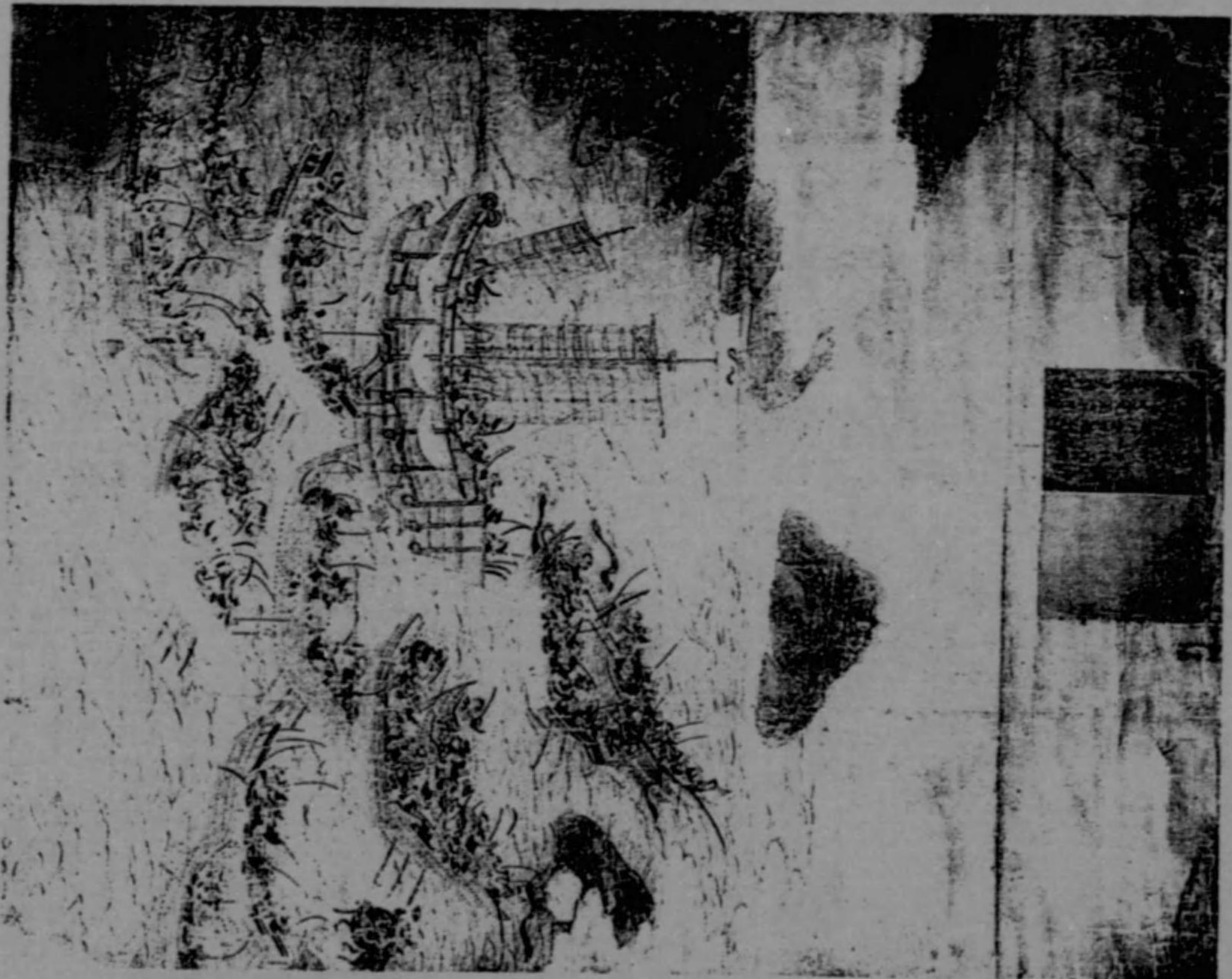
間

宮

藏

壽永四年二月平宗盛等ハ讃岐ノ屋島ニ敗レ、安徳天皇ヲ奉シテ壇ノ浦ノ海上ニ退キ  
タレバ、三月義経舟師ヲ以テ四國ヨリ之ヲ追ヒテ至ル。同月二十四日平氏ノ兵船唐船  
ヲ初メトシテ五百余艘、源氏ノ兵船三千艘、壇ノ浦海上ニ最後ノ一戦ヲ交ヘタリ。最  
初ハ平家方潮ニ乘リテ優勢ナリシモ、潮流一度逆流スルニ至ルヤ源氏次第ニ之ヲ壓迫  
シ、既ニシテ平氏ハ背後モ閉塞セラレ、前方ノ形勢モ漸ク迫リタレバ、唐船ト兵船ト  
ノ乗組ヲ交換シ、敵ヲシテ御座船ヲ知ル能ハザラシメントヤシモ、内應スルモノアリ  
テ敵ニ洩レ、源氏方唐船ニ向ハズシテ御座船ニ迫ル。知盛等奮戦努メタルモ形勢益非  
ニシテ遂ニ二位尼天皇ヲ抱キ奉リ海中ニ投ジ茲ニ平家ハ全ク没落スルニ至レリ。本圖  
ハ此ノ形勢ヲ描キタルモノニシテ、左方中央ノ船ニ安徳天皇二位尼ノ側ニ坐シ給フ。  
ソノ彼方ニハ女院ガ海中ニ投ジタマヒシヲ東兵拘シテ引上グントスル所ヲ描キ、又下  
方ニハ知盛等ノ奮戦ヲ寫シ激戦ノ光景ヲ眼前ニ彷彿セシム。右方中央ナル大船ハ唐船  
ナリ。圖中ニ散戦ノ前兆タルいろかノ群ヲ見ルモ興趣深シ。本圖ハ安徳天皇御一代ノ  
御事蹟ヲ描キタル八幅ノ畫ノ一部ニシテ、其第七及第八幅ニ當ル。土佐光信筆ト稱セ  
ラル、モ、恐ラク後人ノ假托ニ過ギザルベシ。









六 應仁亂合戰圖

繪卷一巻ノ内

京都市 眞正極樂寺藏

東京帝國大學史料編纂掛藏摹本ヨリ撮影

本圖ハ京都眞如堂縁起所載ノ應仁亂合戰圖ヲ抄出シタルモノナリ。同縁起ハ、大永四年眞如堂本尊阿彌陀佛ノ由來ヲ記セルモノニシテ、書工ハ掃部助久國、詞書ハ後柏原天皇ノ宸筆及ビ青蓮院尊嶺入道親王ノ御筆等ナリ。茲ニ掲出セル東西兩軍激戰ノ狀ハ實況ニ近ク、殊ニ橋ヲ列ネ幕ヲ繞ラセル大將ノ陣所ノ如キハ當時ノ軍營ノ有様ヲ徹スルニ足ルモノナリ。



七 諸所合戦圖

一巻ノ内

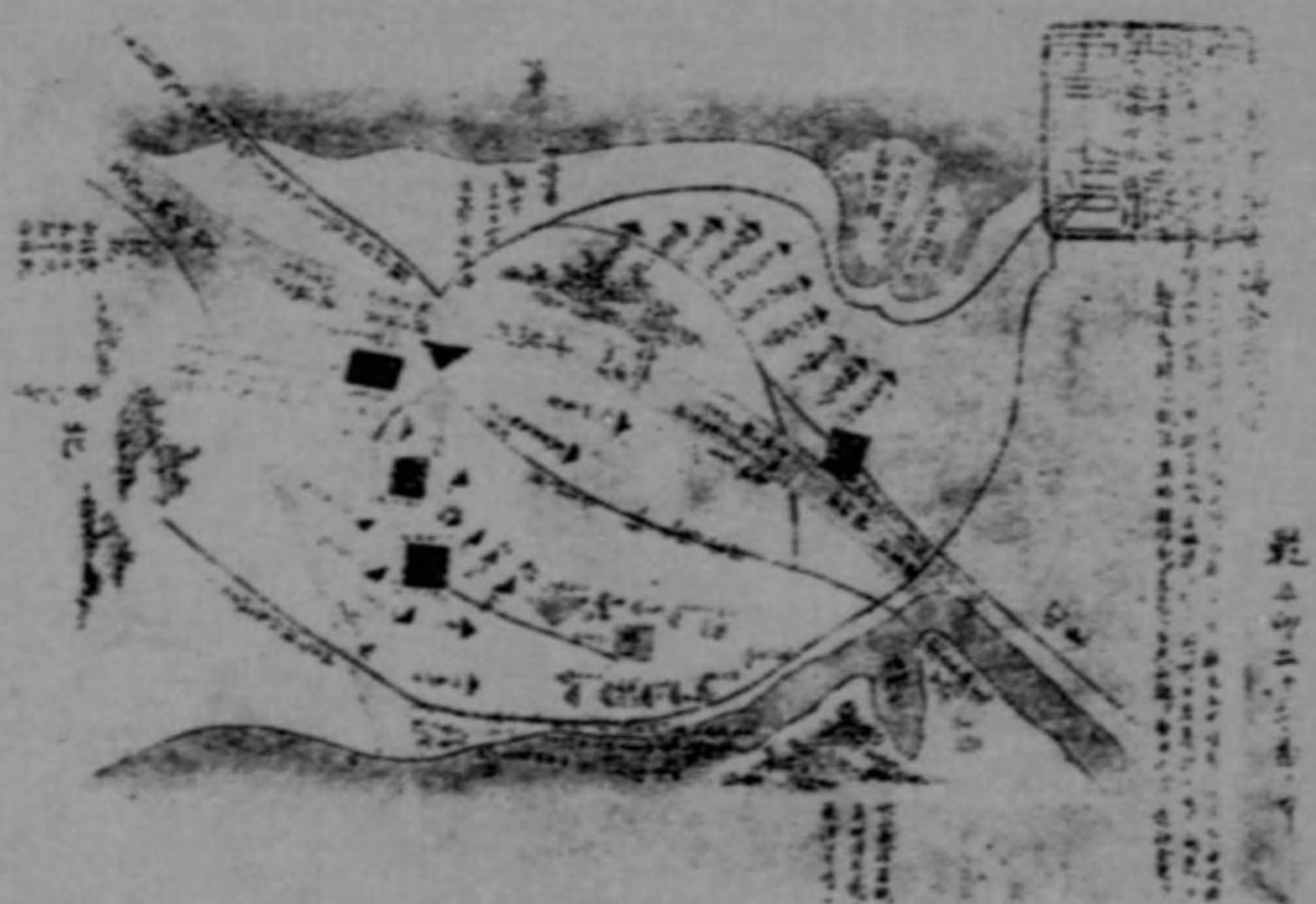
廣島市 淺野圖書館藏

原圖ハ何ノ記録ニ據リタルカ不明ナルモ、戰國時代ニ於ケル大小戰役ノ陳列圖二十圖ヲ收メ一巻トシタルモノナリ。就中尾州盤江合戦、攝津鼻籠合戦、加州小松合戦、甲州福泉寺城取合ノ諸圖ノ如キハ普通ノ合戦圖ニ見ザル所ナレバ珍トスベキカ、茲ニハ最モ代表的ナルモノ六圖ヲ掲出ス。(筆者不詳)

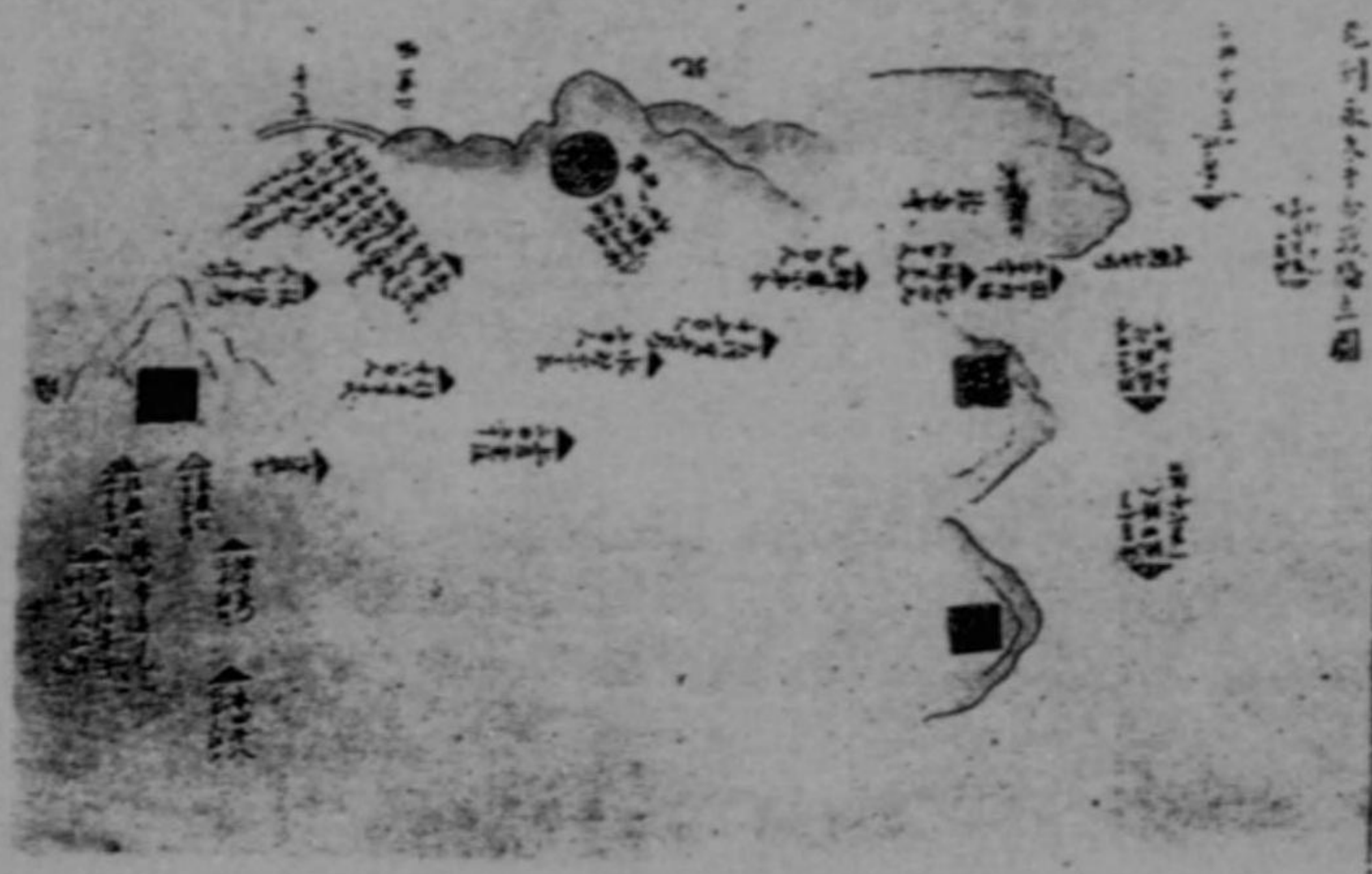




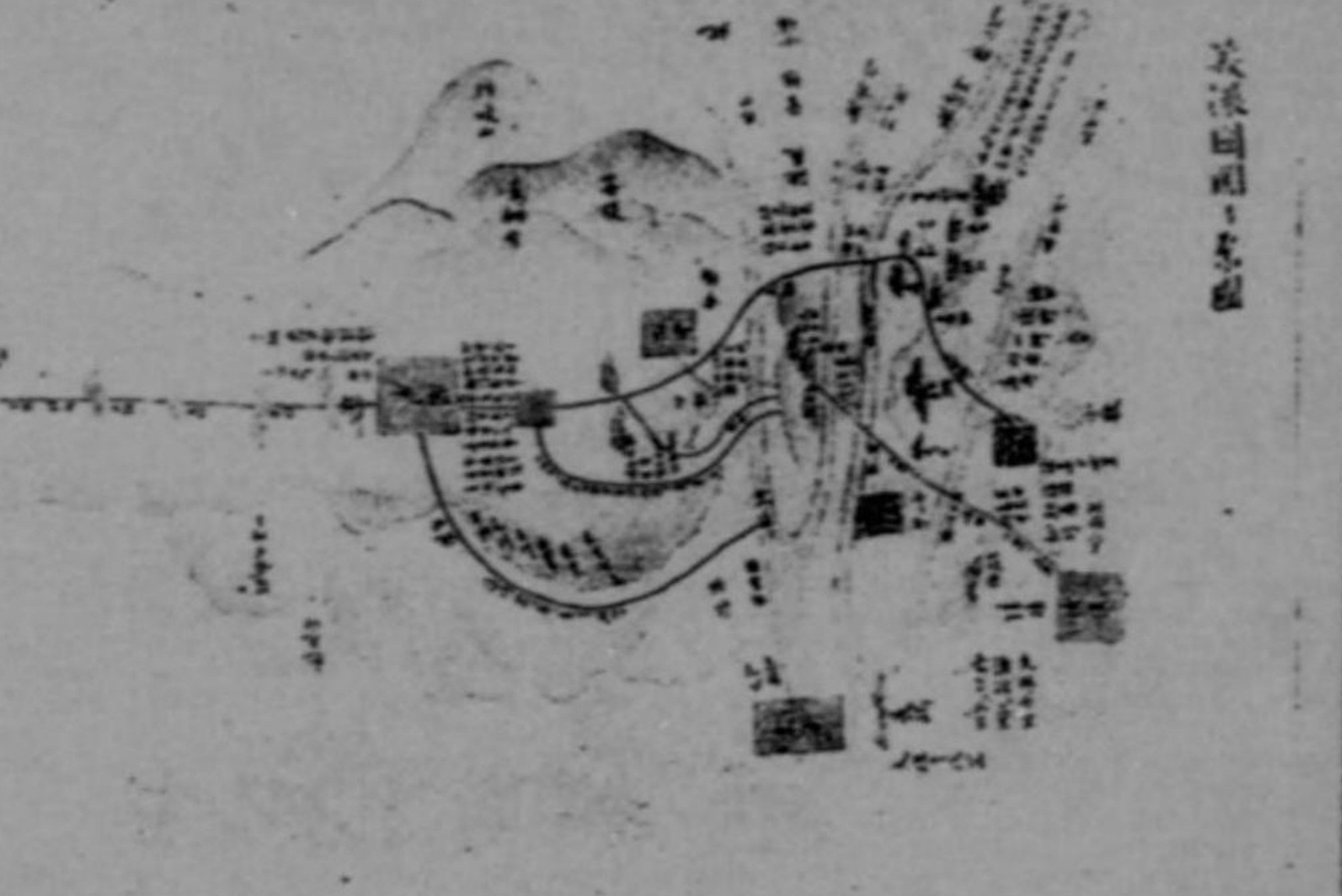
山城國山崎合戦



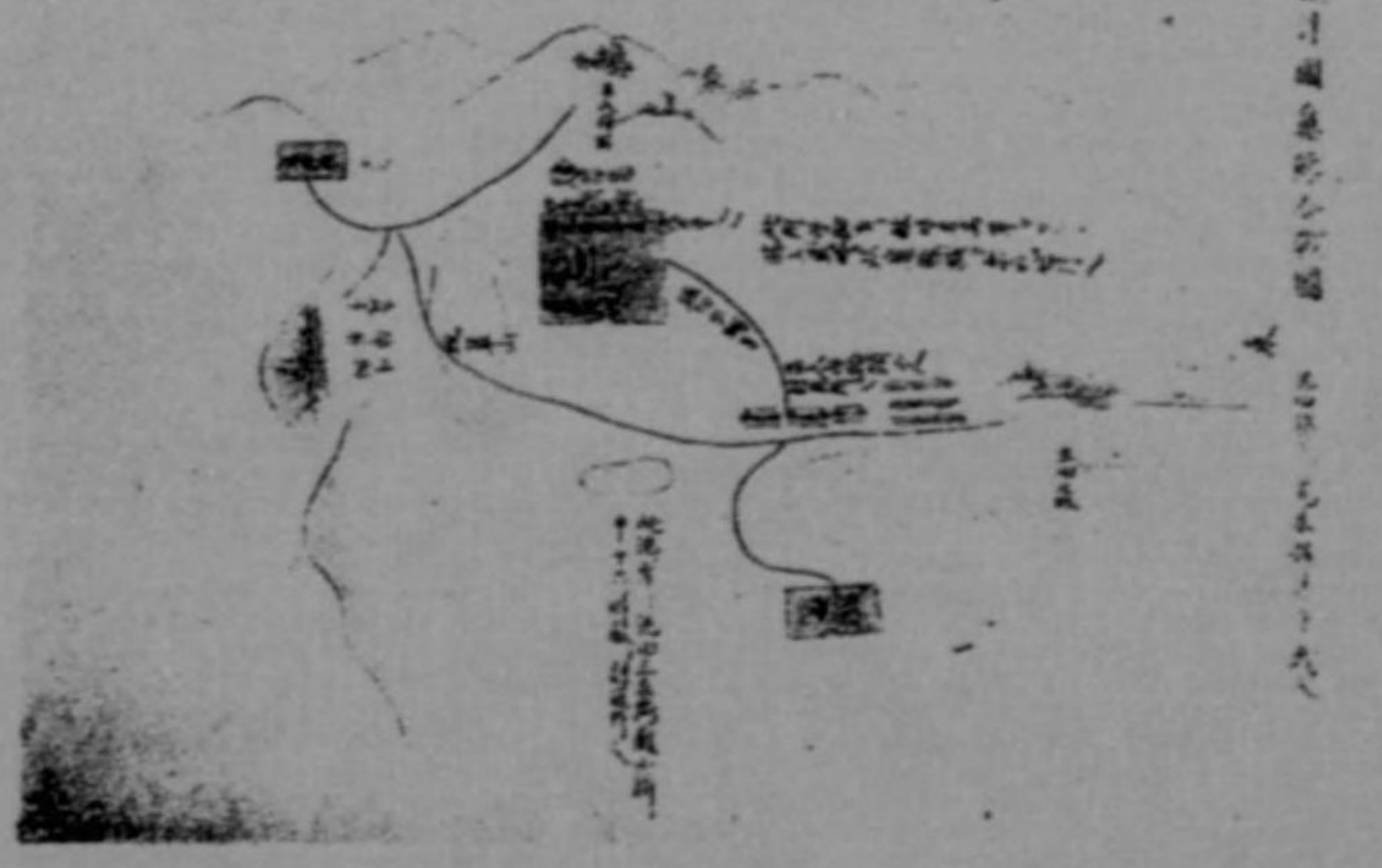
美濃國



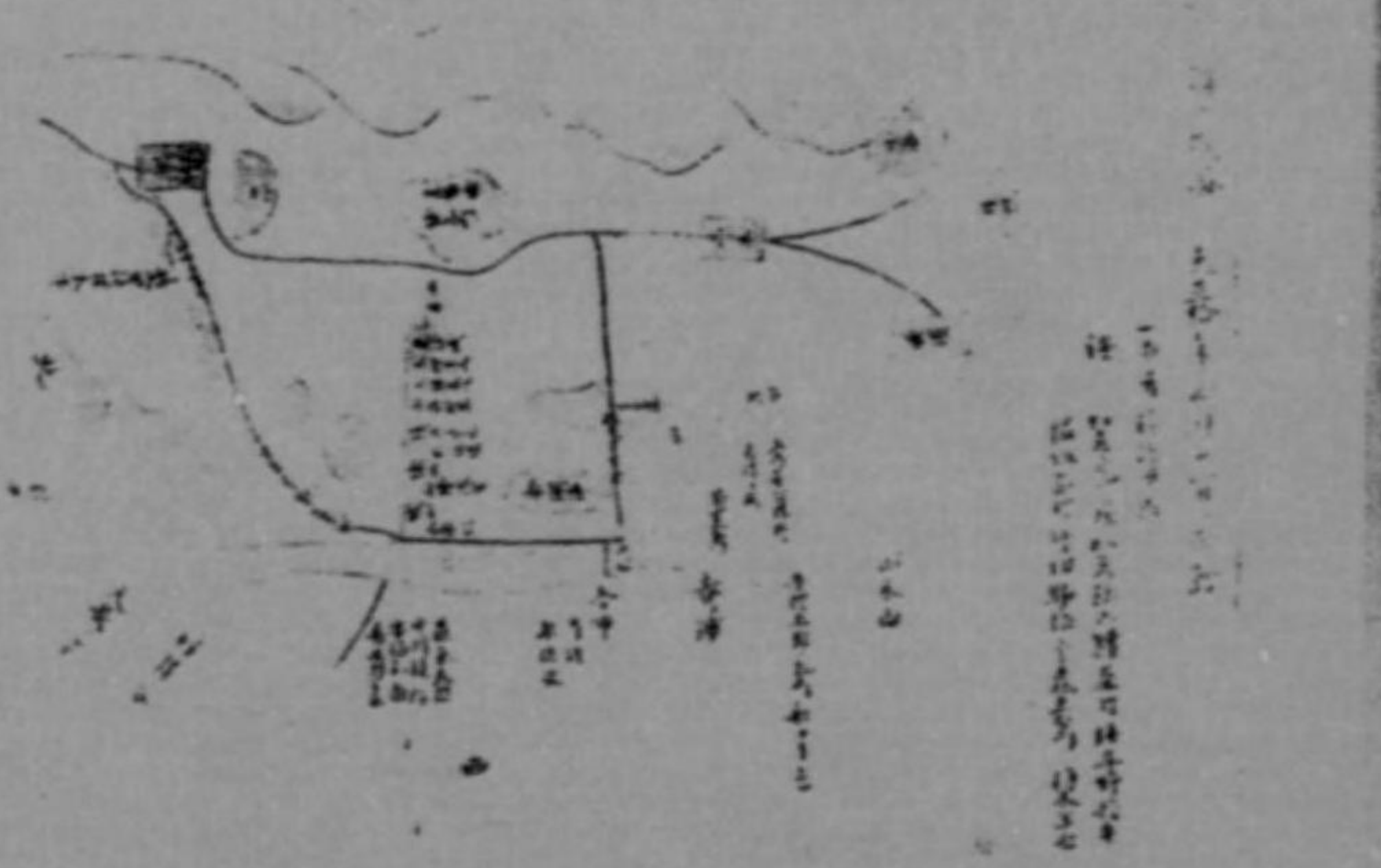
尾張國



大津國



越前國



加賀國



八 關ヶ原陣圖屏風 一 双

原本 伯爵津輕義孝氏藏  
東京帝國大學史料編纂部藏本ヨリ撮影

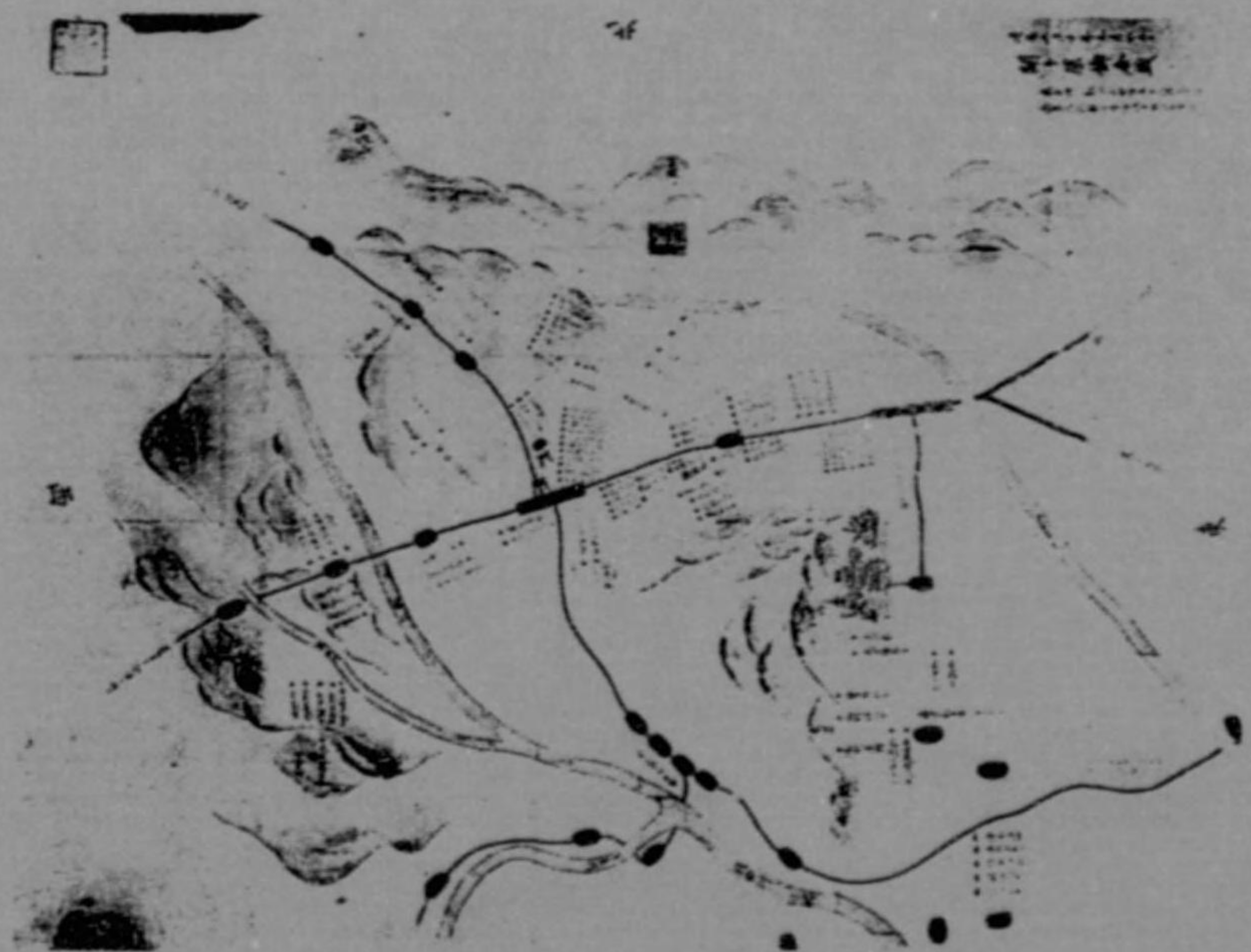
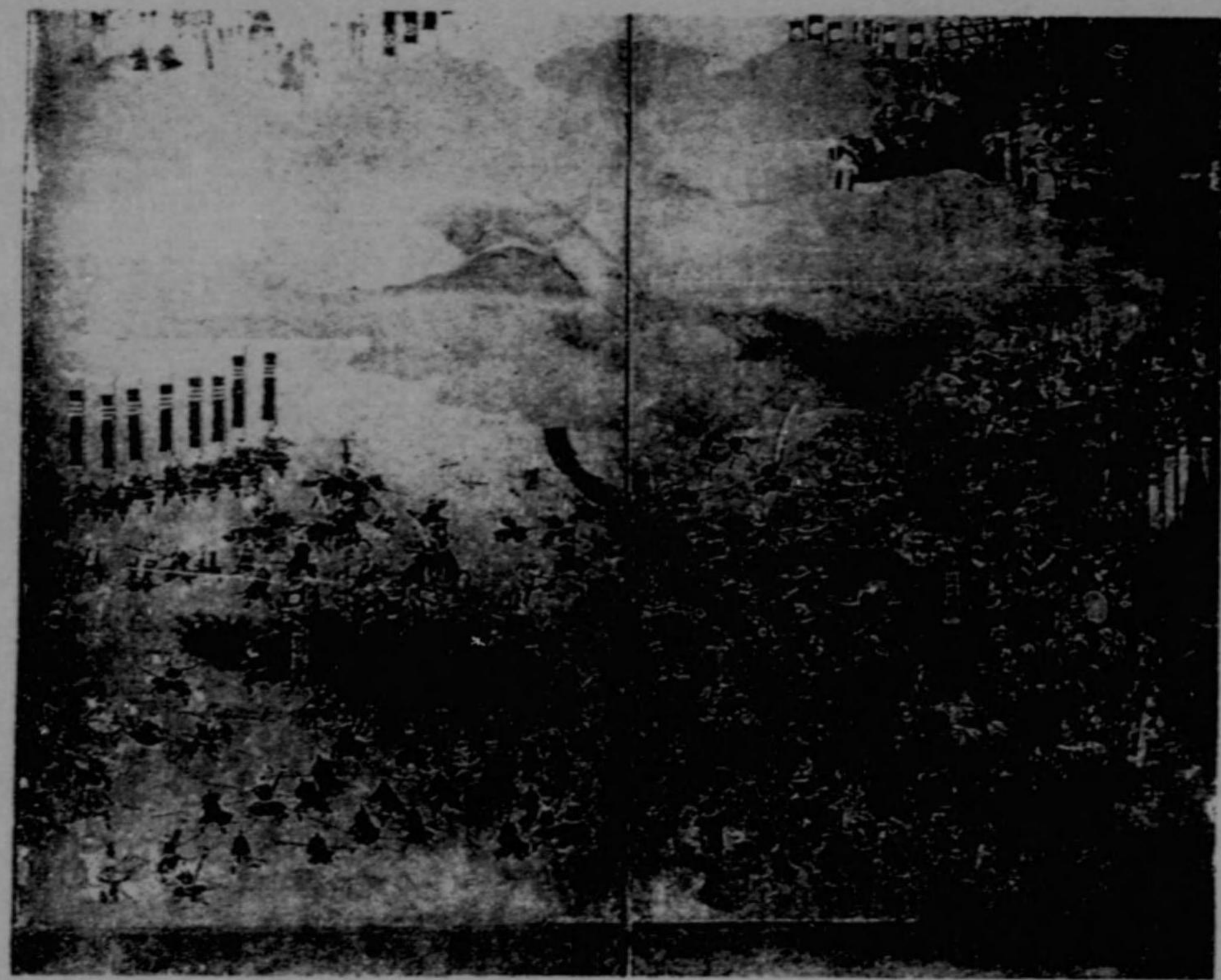
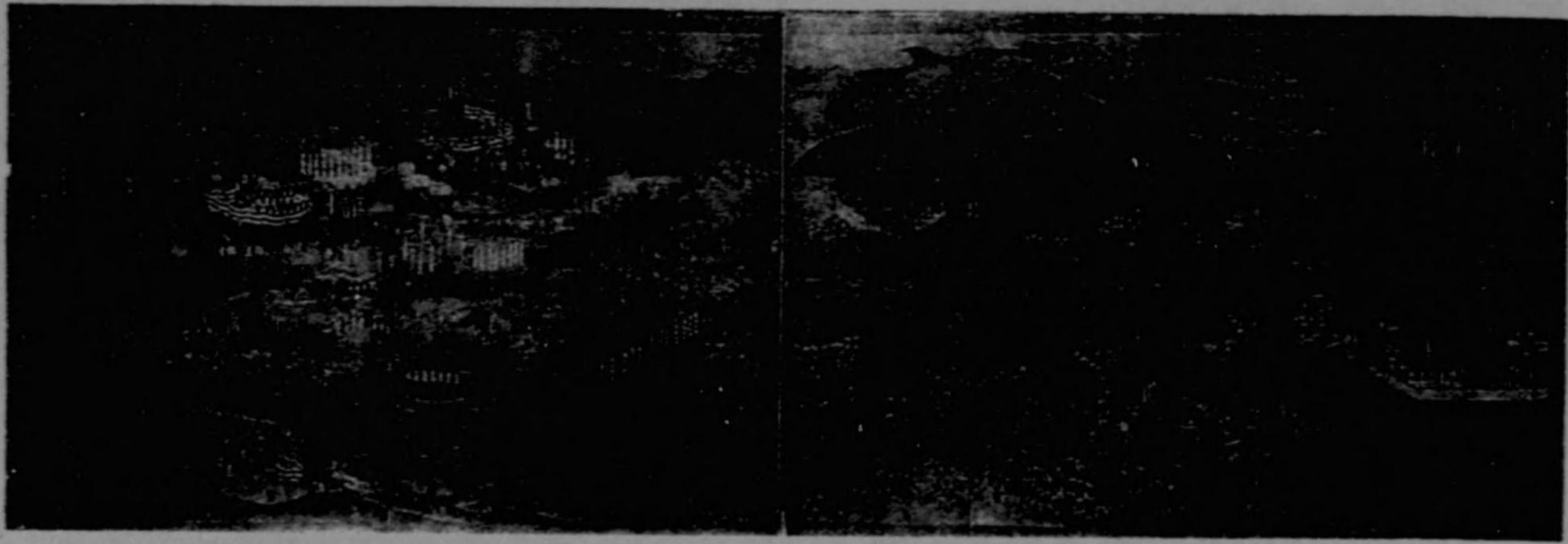
關ヶ原役ニ於テ決戦ノ行ハレタルハ慶長五年九月十五日ノコトナリ。本圖ハ其ノ決  
戦當日ノ狀ヲ描出セルモノニシテ、兩軍ガ大崩トナリテ、アル時ノ東西兩軍ノ配  
置等ヲ示ス。石田、島津、小西等兩軍ノ諸陣營ニ盛ンニ火災ノ起レルヲ脇ニ見ツ、東  
軍ガ頻リニ追撃セルナドヨリ當日ノ狀ヲ彷彿セシム。上圖ハ全放ニシテ中國ハソノ中  
央ノ部分ヲ擴大セルモノナリ。下圖ノ地形圖ト比較スレバ興味深シ。

九 關ヶ原地形並陣立之事

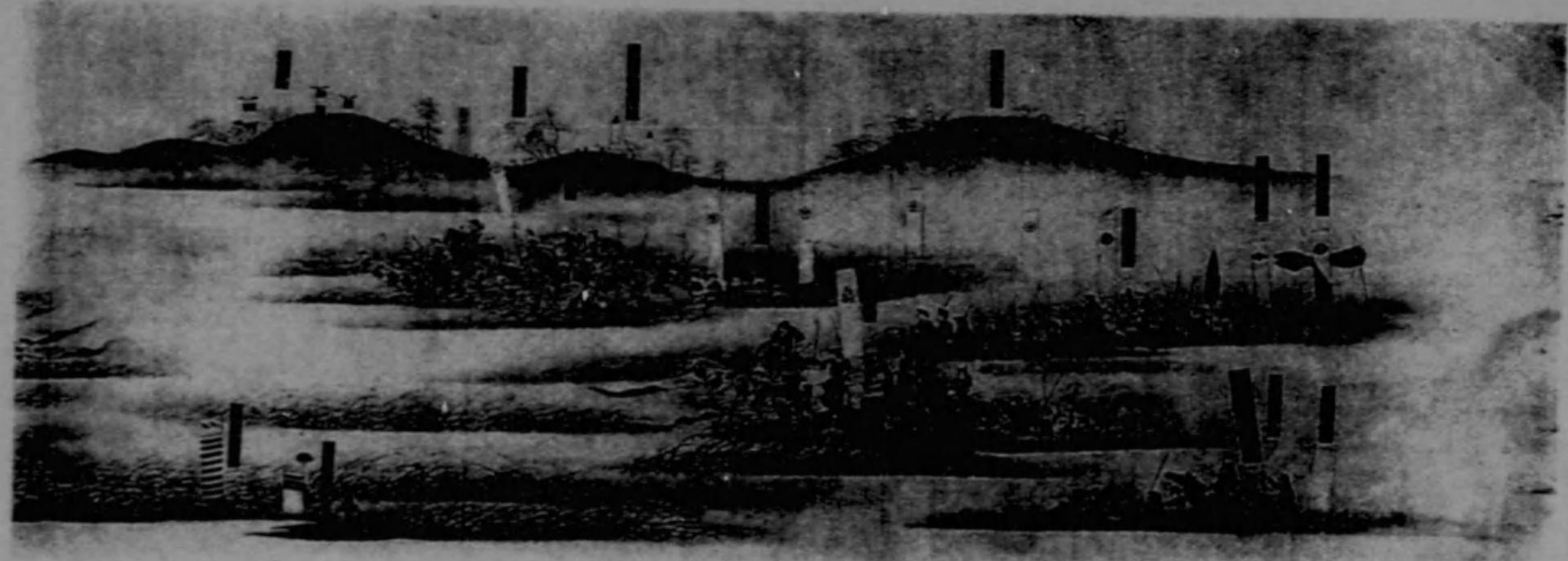
寫本 六枚ノ内  
廣島市 淺野圖書館藏

本圖ハ關ヶ原決戦當日ニ於ケル朝七時頃ヨリ夕五時頃ニ至ルマデノ東西兩軍陣立ノ  
實況及ビ關ヶ原驛ヲ中心トシテノ地形ヲ描キタルモノナリ。圖ハ東ハ垂井驛、西ハ山  
中村、南ハ牧田川、北ハ岩手村ニ互リ、今須峠、松尾山、桃配山、小關山等ヲ以テ其  
ノ四地ヲ包ミ縱横各里餘ノ間ニ展開セル所謂青野原ノ一部ナリ。何人ノ手ニ成レルカ  
不明ナルハ惜ムベシ。









一〇 關ヶ原合戦繪圖

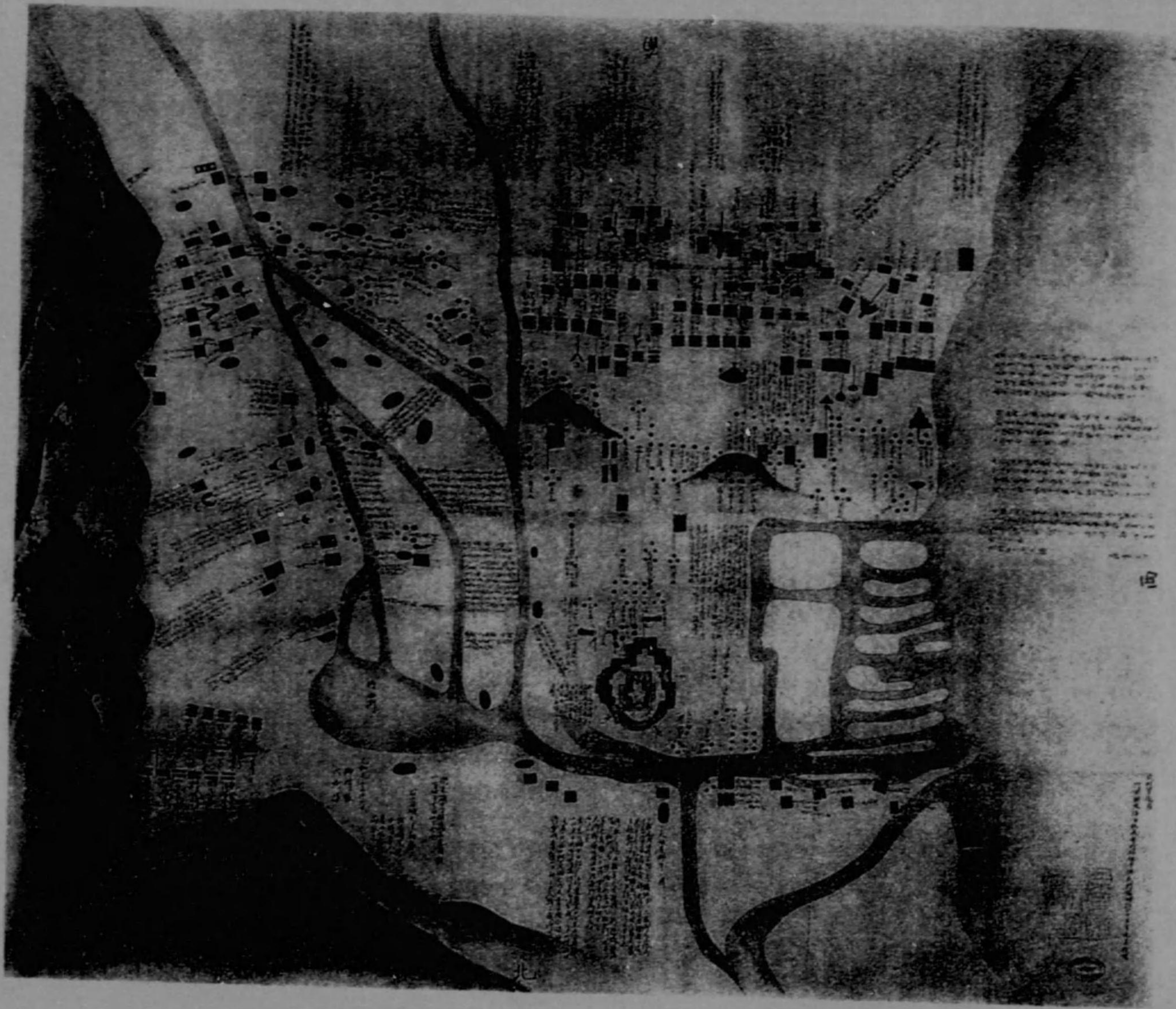
繪卷二軸(二十圖)ノ内

廣島市 淺野圖書館藏

原圖ハ天明五年榮川法印ガ徳川家治ノ命ヲ受ケテ描キシモノニシテ、寛政二年藤澤ノ侍士岡峯山之ヲ臨寫シ更ニ天保二年確乎ト言ヘル書師ガ峯山ノ描キシモノヲ臨寫シタルモノ即チ本圖ナリ。原圖ハ關ヶ原合戦ノ起因ヨリ結末ニ至ル迄ノ史實ヲ順次ニ描キ、卷頭ニハ豊太閤薨後ノ善後策ニ就キ五大老、五奉行等ガ評議スル狀況ヲ寫シ、卷尾ニハ戦後即チ慶長五年九月十五日午後大雨降下シ車軸ヲ流ス如キ凄慘タル狀況ヲ示セリ。

(附記) 榮川法印ハ狩野家第五世ニシテ法印ニ叙セラレ榮川院ト稱ス。徳川家治ノ寵遇ヲ受ケ寛政二年歿ス。岡峯山ハ藤澤主淺野重景ニ仕ヘ近侍ニ進ム。名ハ煥書ヲ善クスルヲ以テ著ナル。文化三年ニ歿セリ。本繪圖ノ臨寫者確乎ノ傳詳カナラズ。





二 大阪夏陣圖

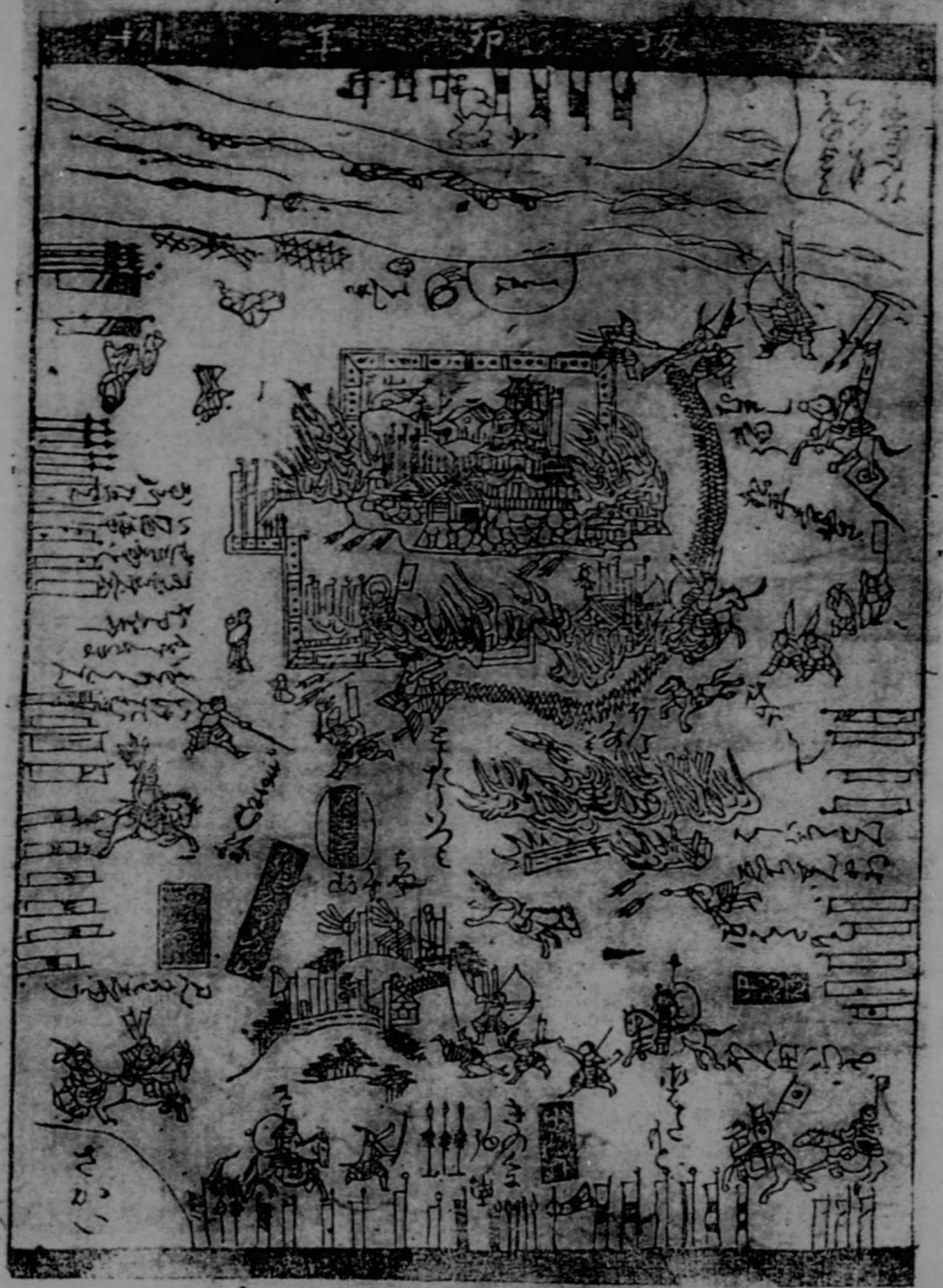
一幀

美澤市 伊佐早謙氏藏

東京帝國大學史料編纂部藏本ヨリ撮影

大阪夏陣ハ元和元年ノコトニシテ、同年五月徳川家康父子ハ大阪ニ向ヒ同月六日道明寺及ヒ八尾若江ノ戦、七日天王寺岡山ノ戦ニ於テ大阪方全ク敗レ、八日城陥リ豊臣秀頼母子等自及セリ。天正十一年秀吉此ニ治セシヨリ廿七年ニシテ豊臣氏滅ブ。本圖ハ此夏ノ陣ニ於ケル東西兩軍ノ配置ヲ示シタルモノナリ。





三 大阪落城之時讀賣

元和泥板 一卷

内閣文庫藏

昌平坂學問所ノ舊藏ニシテ題シテ大阪卯年圖トセラル。泥板ナレド大阪城ヲ中心トシテ攻防ノ陣容ヲ現ハシ、人馬火槍ノ狀ヲ輕妙ニ描出シ粗畧ナリト雖モ時勢ノ縮圖トシテ頗ル要ヲ得タルモノナリ。元和卯年五月夏ノ役ニ豊臣氏没落ノ非速ニ會ス。ココニ附記ス。當時板行セラレタルモノニ二種アリト言フ。未ダ閱セザレバ首肯スル能ハズ。



一三 肥前島原之圖

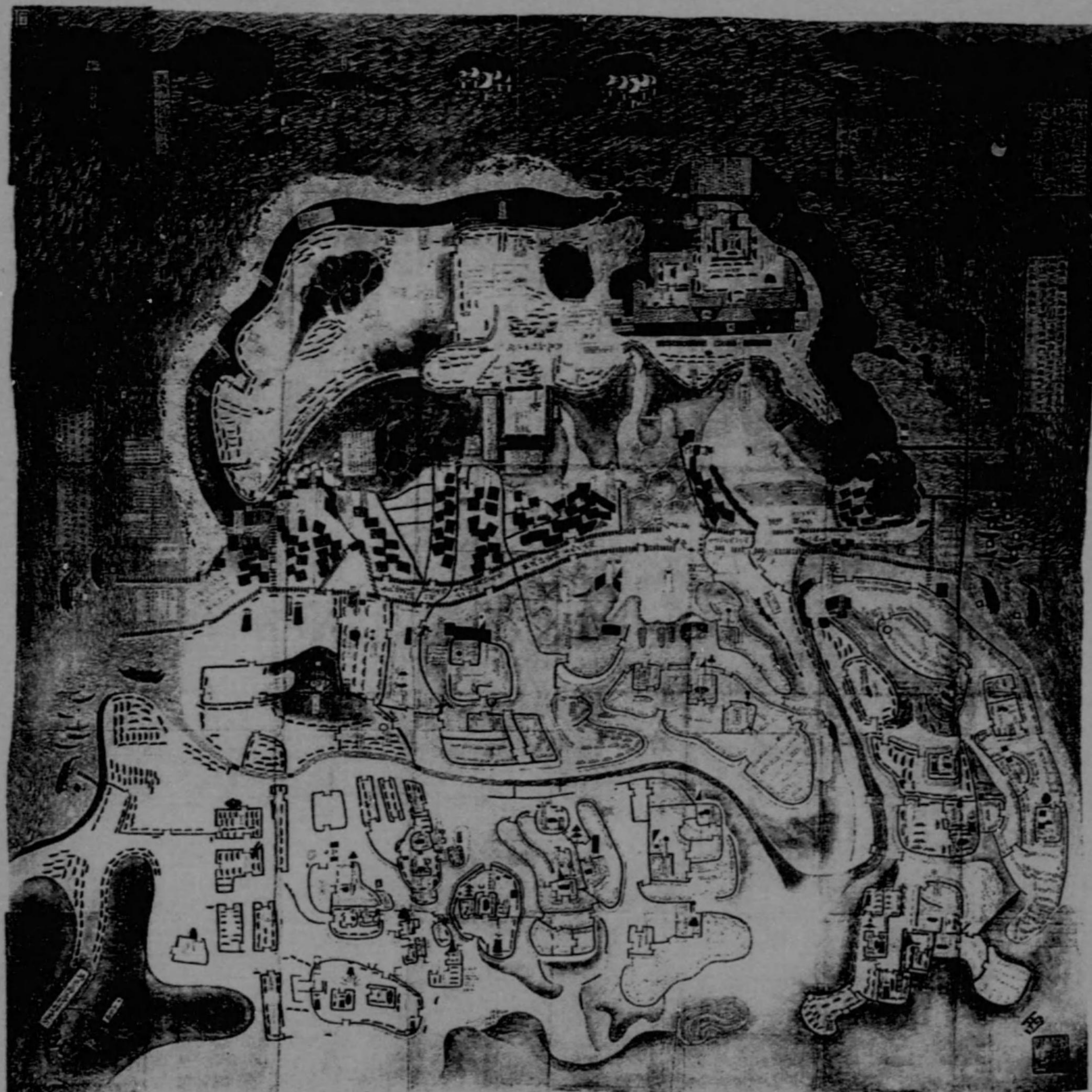
着色寫本 一折

廣島市

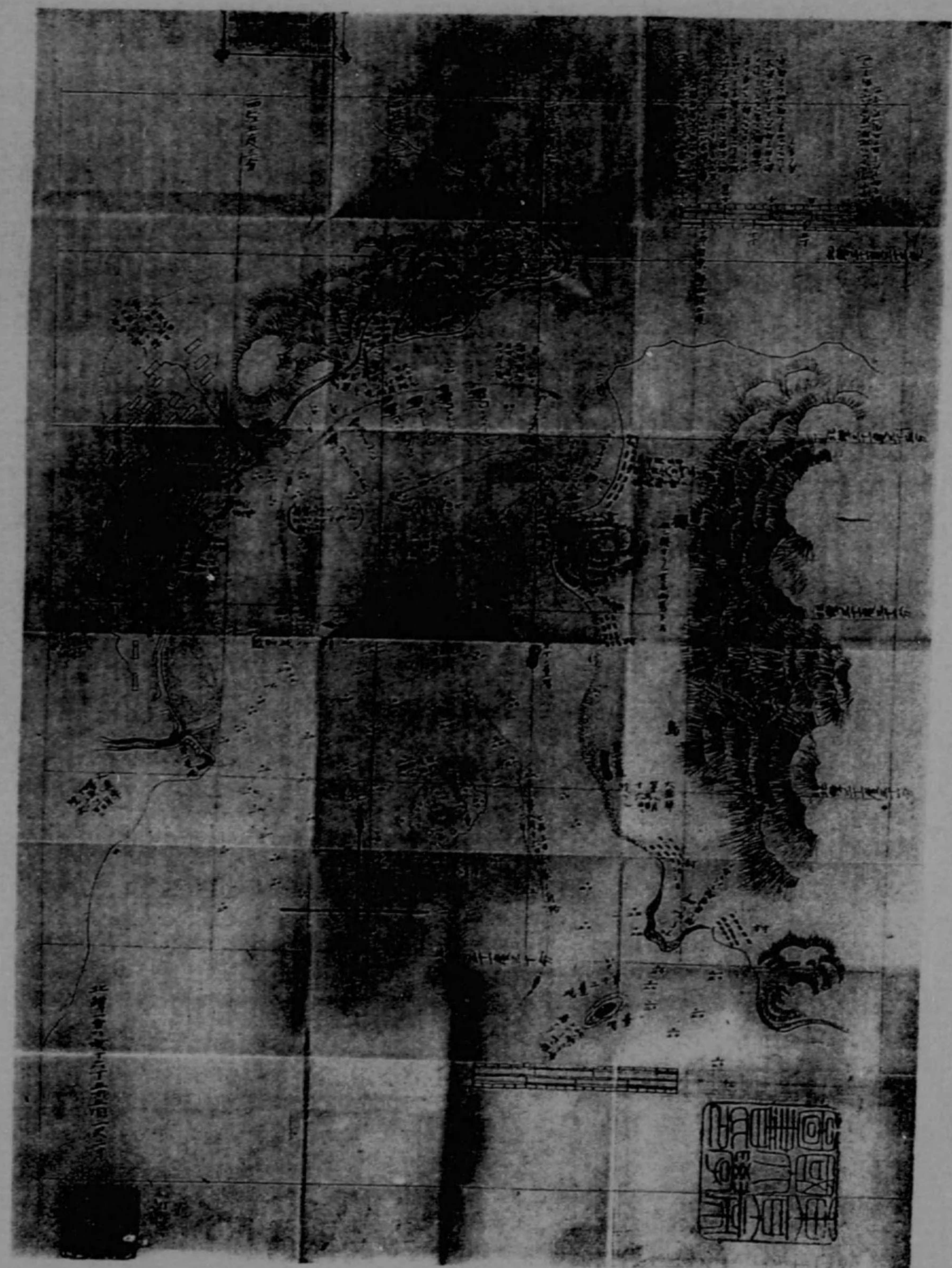
淺野圖書館藏

筆者ハ不詳ナルモ寛政三年十一月平戸藩主松浦肥前守ヨリ藩主淺野家へ贈リタル由ヲ附記シアリ。本圖ハ寛永年中、島原役ノ戦況ヲ描キタルモノニシテ圖中海上ノ二大黒船ハ當時長崎在港ノ和蘭船ガ來役ノ狀ヲ示セルモノナリ。極メテ精密ニ當時ノ狀況ヲ描寫ス。本邦基督教史研究ノ好資料ナランカ。









一四 文久二年鹿兒島港戰爭之圖 一幀

東京帝國大學附屬南葵文庫藏

文久二年英艦ノ鹿兒島砲撃ノ時ニ於ケル彼我ノ形勢ヲ示セルモノニシテ、羽生政雄之ヲ寫ス。



一五 甲子兵燹之圖

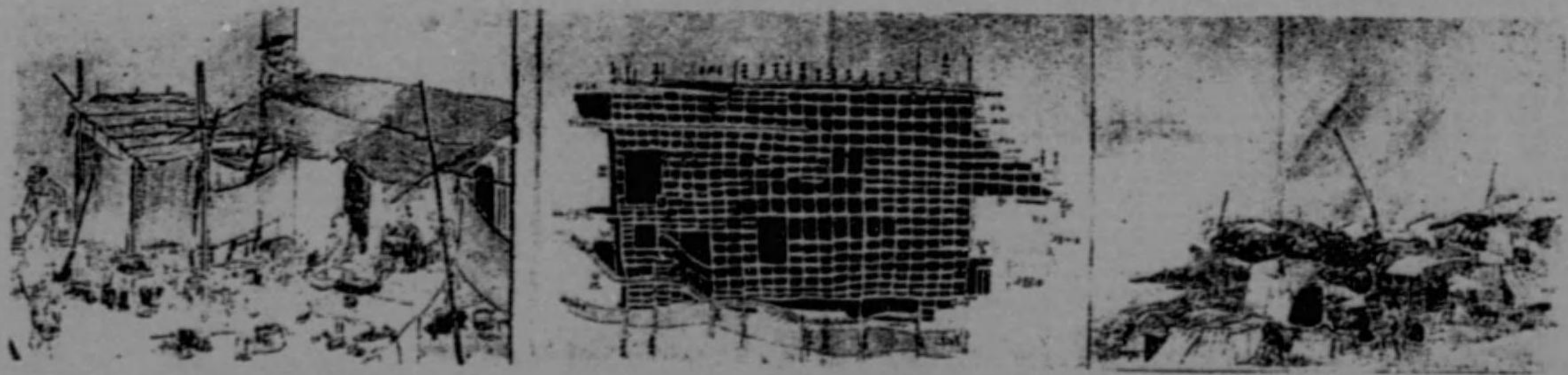
繪卷 二卷

京都帝國大學藏

元治元年七月長州藩兵京都ニ侵入シ幕府ハ諸藩ニ命ジテ之ニ防戦セシメ、市街隨所ニ銃聲ヲ聞キ兵火ヲ發シ禁煙ノ下戰亂ノ巻ト化セリ。偶々同月十九日河原町三條ノ長州藩邸ヨリ火ヲ失シ延燒數日ニ亘リ洛中ノ大半ヲ燒盡セリ。本圖ハ京都ノ舊家前川五嶺ノ插ケル原書ヲ寛齋ノ門人森雄山ノ模寫セシモノニテ、モト尊攘堂ノ舊藏ニ係ル。上下二卷アリテ詞書ノ間ニ挿繪ヲ加ヘ當時戰禍ノ悲惨ナル狀況ヲ繪卷物風ニ描寫セシモノナリ。



昔像堂之切









一七 北清事變錦繪

支那版畫 二葉

東京市

木村浩吉氏藏

明治三十三年ノ北清事變ニ於ケル彼ノ暴狀ヲ支那人自身ノ手ニヨリテ圖寫板行シタルモノニシテ、珍奇ナル資料ト云フベシ。



天津城埋伏地雷董軍大勝西兵圖



楊村大戰





一八 倭寇圖卷

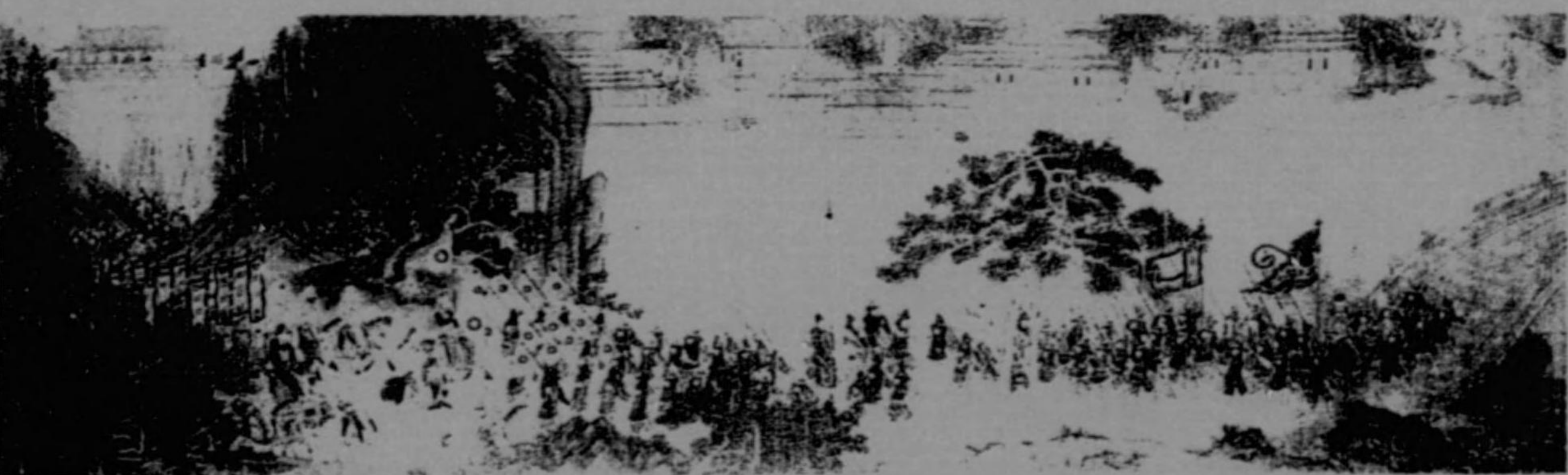
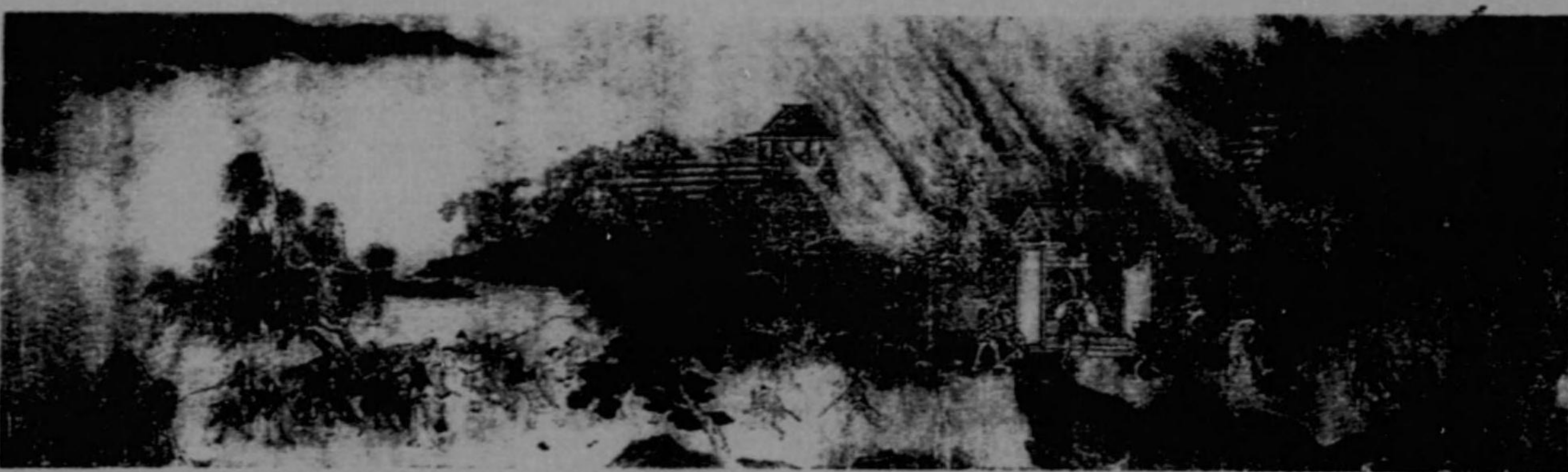
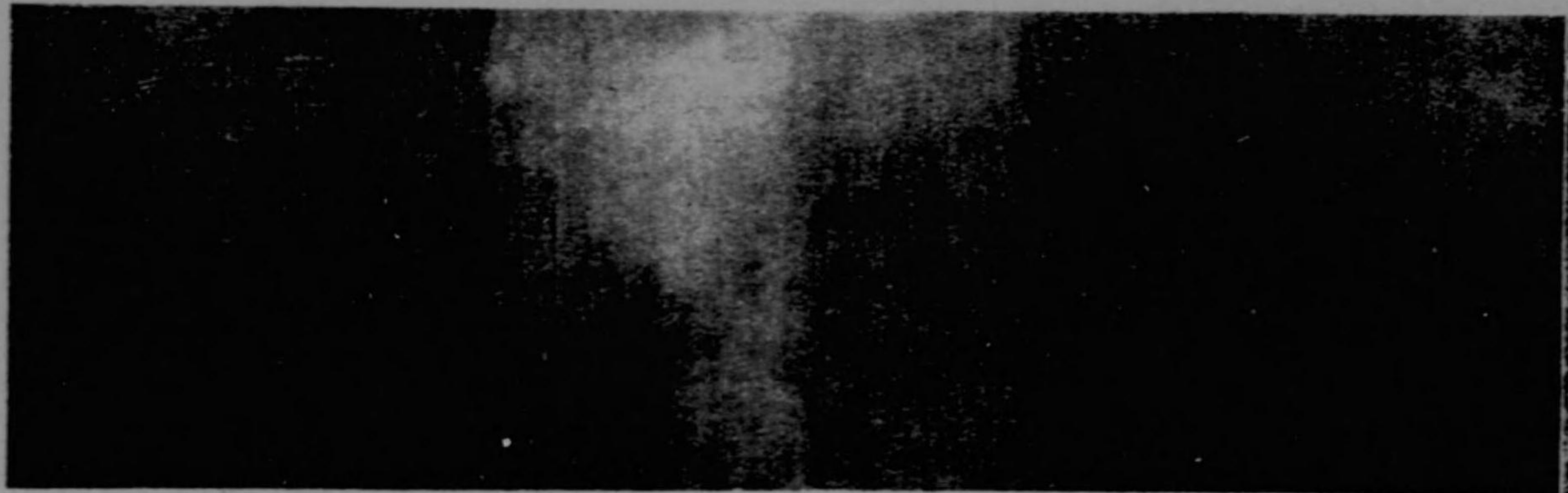
(舊題、「明仇十洲臺灣夷圖」)

東京帝國大學藏

本圖卷ハ明人ガ倭寇ノ慘害ヲ描寫シタルモノニシテ、國中島銃ヲ手ニセル日本人ハ唯一人ノミナルコトヨリ推シテ、我室町朝末期即チ明ノ嘉靖年間頃ノ狀況ヲ描キタルモノナルベシ。明ノ兵士及人民ノ服裝武器ハ概キ寫生ナリト考ヘラル、モ、日本人ノソレハ半バ想像ニテ描カレタルガ如ク見ユ。ソレ故ニ船及服裝等モ純日本式ニアラズ。史籍ニ現ハレタル當代ノ倭寇ハ多ク日明兩國人ノ聯合ナルモ、本圖卷ニ於テハ全然ナル形跡ヲ認ムルコト能ハズ。倭寇史料トシテ正ニ無比ノ逸品タルノミナラズ、明代ノ美術的作品トシテモ優ニ代表的ノモノタルヲ失ハズ。

最モ上ナルハ倭寇ガ彼國ニ上陸シ、形勢ヲ觀望スルモノ、既ニ掠奪品ヲ擔ギテ持テ歸リテ、アルモノ等ヲ寫ス。次頁ノ擴大圖ハコレニ接續スベキモノ。第三圖ハ上部ニハ避難民、下部ニハ彼官兵トノ交戦中ヲ表ハシ、最下端ハ城門内ヨリ陸續官兵ガ討伐ニ向ハントスルトコロヲ描寫ス。







一九 倭寇圖卷

(略原寸大)

東京帝國大學藏

前掲圖卷ノ一部ニシテ倭寇ガ彼ノ官兵ト交戦中ノ光景ナリ。彼國人ノ描キタルモノナルヲ以テ戦ハ彼ニ有利ニシテ、倭寇中ニハ既ニ傷キテ水中ニ溺レフ、アル者、口又ハ耳ニ矢ノ當リテ倒レントスル者等アリ。然レドモ何處トモナク氣散ノ横溢セルモノアルハ否ムベカラズ。上部ニハ田島ノ畔ニ彼國人ノ家財道具ヲ持チ出シテ避難セル光景ヲ寫セリ。







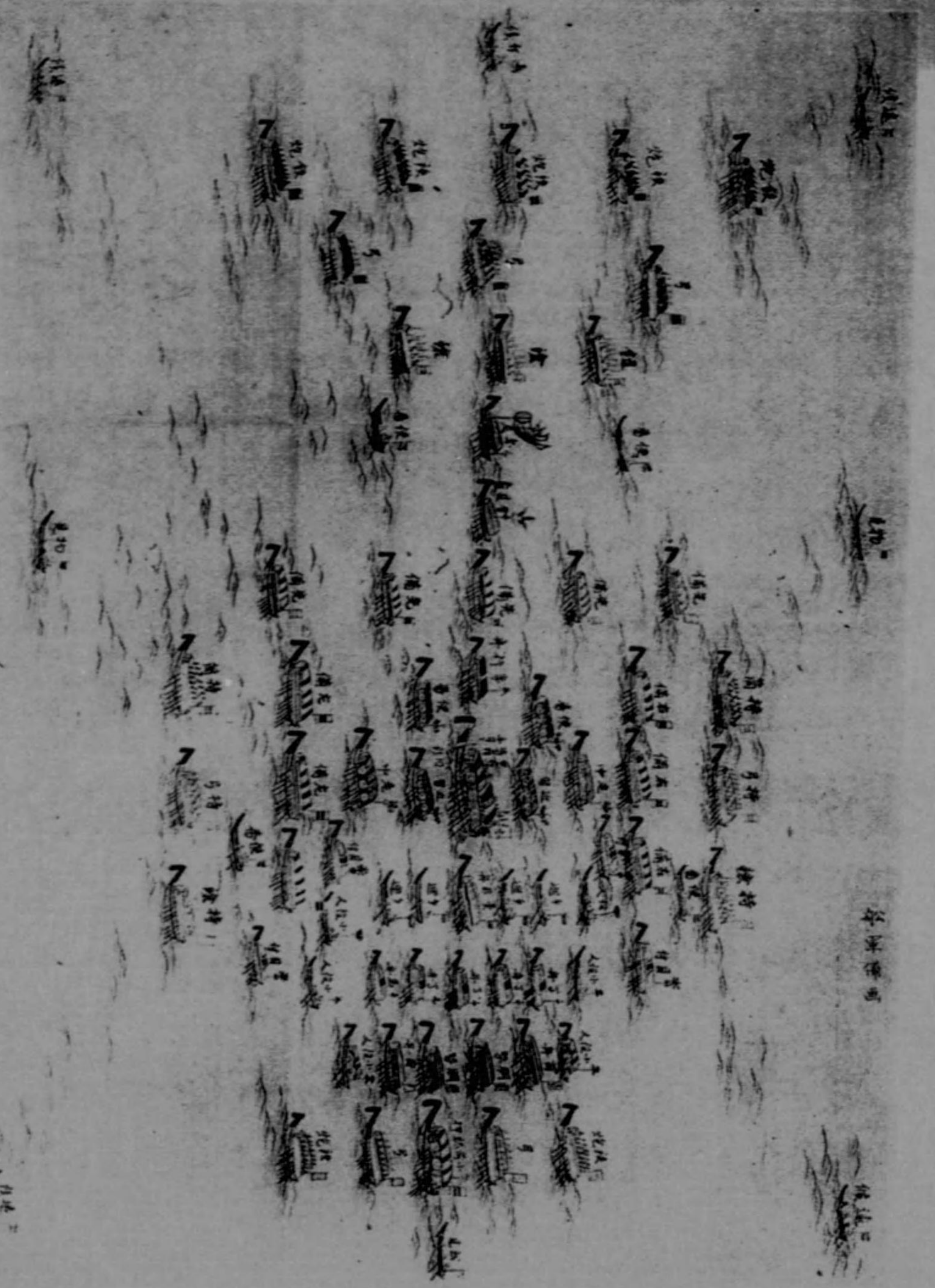
二〇 船軍備圖 一 帆

神戸市 桃木武平氏 藏

東京帝國大學史料編纂部藏本ヨリ撮影

本圖ハ徳川時代ノ船軍ノ備ヘ方ヲ示シタルモノニシテ、演習ノ實狀ヲ寫シタルモノト云フヨリハ寧ロ兵學者ノ理想ヲ現ハシタルモノト見ルベキナリ。作者ハ明カナラザルモ恐ラク本國ノ所藏者桃木氏ノ祖先ノ手ニナリシモノナラン。桃木氏ハ代々海運業ニ關係アリシ家柄ニシテ其ノ所藏ニ依ル文書中ニハカノ貞應年間ノ「船之作法」其他海事ニ關スル資料多シ。

一 津金平海軍ノ故有具念得之軍一 經親達見 乃其定得之軍一 登陸軍其軍之軍  
 一 船軍之創法一 遂後世其法得之軍  
 一 會取具個船得之軍  
 一 船軍之創法一 遂後世其法得之軍  
 一 會取具個船得之軍  
 一 船軍之創法一 遂後世其法得之軍  
 一 會取具個船得之軍





二 九鬼嘉隆畫像

一軸

伊勢國 金剛證寺 藏  
東京帝國大學史料編纂部藏本ヨリ撮影

此肖像ハ嘉隆ノ子守隆ガ慶長十年即チ父ノ七週年ヲ期シテ書カシメタルモノ  
ニシテ上ノ贊ハ清韓長老ノ筆ニ係ル。九鬼氏ハ水軍ヲ以テ顯ハレタル家柄ニシ  
テ嘉隆ハ征韓ノ役ニ水軍ノ將トシテ從軍シ、後慶長五年關ヶ原役ニ西軍方トシ  
テ志摩國島羽城ニ據リ、西軍敗ル、ニ及ビ同國桃取ニ潛ミ居タルガ途ニ十月十  
二日五十九歳ニテ自及セリ。

三 久留島通總畫像

一軸

安藝國 永井敬介氏 藏  
東京帝國大學史料編纂部藏本ヨリ撮影

久留島氏ハ伊豫ノ豪族ニシテ世々水軍ヲ以テ顯ハル。通總ニ至リ豊臣秀吉ニ  
附シ來島一萬四千石ヲ領シ、文祿ノ役ノ功ニヨリ同四年敘爵セラレテ出雲守ト  
稱シタリ。慶長二年再び征韓軍ニ加ハリシモ同年九月十六日朝鮮ノ番船ノ水管  
浦ニ屯セルヲ毀ヒ克クズシテ戰死ス。時年三十六。本肖像ハ其ノ後幾モナクシ  
テ書カレタルモノナルベシ。



此肖像ハ嘉隆ノ子守隆ガ慶長十年即チ父ノ七週年ヲ期シテ書カシメタルモノニシテ上ノ贊ハ清韓長老ノ筆ニ係ル。九鬼氏ハ水軍ヲ以テ顯ハレタル家柄ニシテ嘉隆ハ征韓ノ役ニ水軍ノ將トシテ從軍シ、後慶長五年關ヶ原役ニ西軍方トシテ志摩國島羽城ニ據リ、西軍敗ル、ニ及ビ同國桃取ニ潛ミ居タルガ途ニ十月十二日五十九歳ニテ自及セリ。



此肖像ハ嘉隆ノ子守隆ガ慶長十年即チ父ノ七週年ヲ期シテ書カシメタルモノニシテ上ノ贊ハ清韓長老ノ筆ニ係ル。九鬼氏ハ水軍ヲ以テ顯ハレタル家柄ニシテ嘉隆ハ征韓ノ役ニ水軍ノ將トシテ從軍シ、後慶長五年關ヶ原役ニ西軍方トシテ志摩國島羽城ニ據リ、西軍敗ル、ニ及ビ同國桃取ニ潛ミ居タルガ途ニ十月十二日五十九歳ニテ自及セリ。

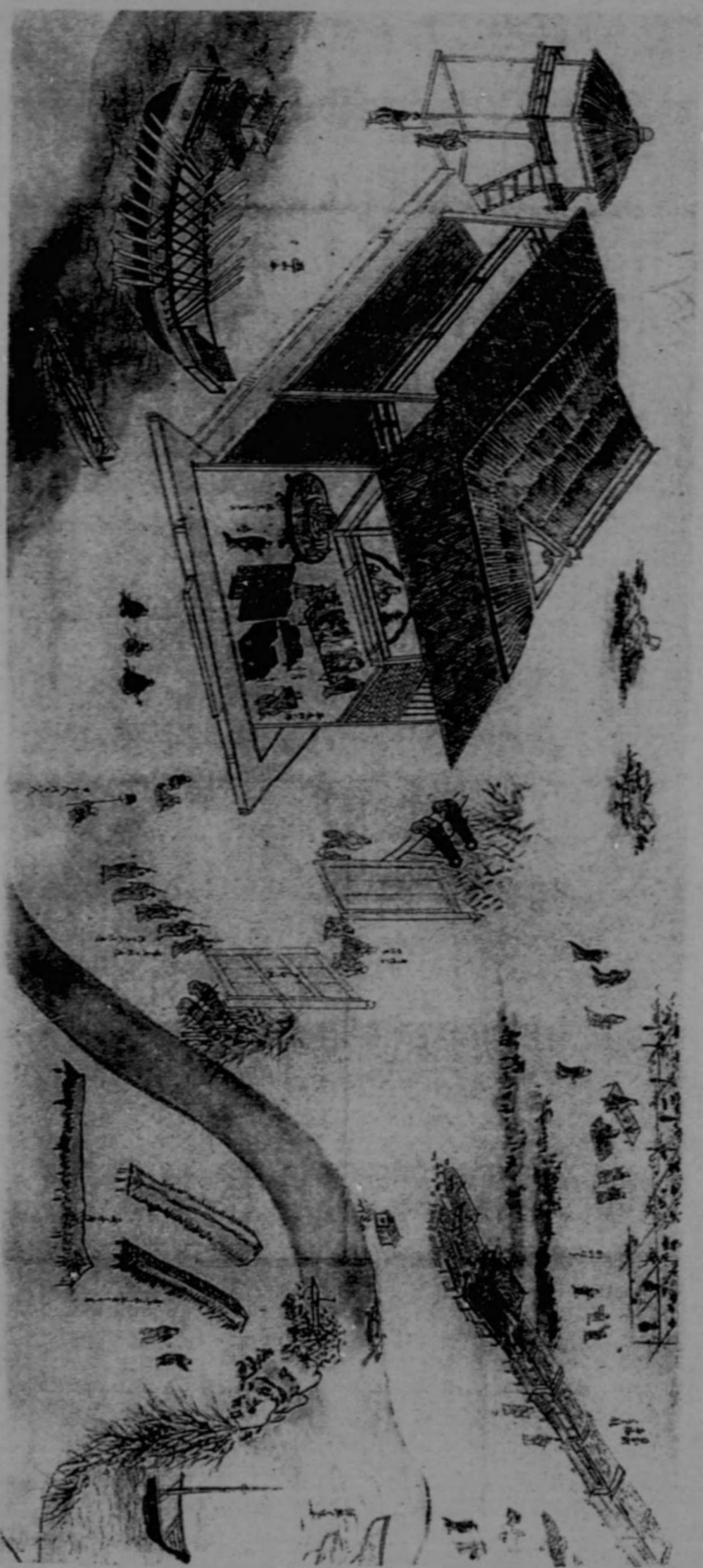


二三 中嶋新六渡唐交趾圖

一卷

名古屋市 中嶋環子氏藏  
東京帝國大學史料編纂掛蔵本ヨリ撮影

近世ノ初期ハ我が國民ノ勢力ガ著シク海外ニ發展セシ時代ナリ。殊ニ南洋方面ニハ我が商船ノ往來シテ貿易ヲ營ムモノ多ク、所々ニ居留地ヲ作りテ之ヲ日本町ト稱シタリ。本國卷ハ慶長、寛永ノ間南洋貿易ニ從事セル京都ノ商人茶屋四郎次郎時次持船ノ船長中嶋新六ガ交趾即チ今ノ安南ニ着船セル狀ヲ描ケルモノナリ。商船ニ搭乗セル人数ハ總テ三百人、大ナク横四間半、長ナク二十五間程アリ。茲ニ掲出セルハ彼ガ王宮ニ至リテ屏風、漆器等ヲ献上スル光景ヲ描ケル部分ナリ。門側左右ニ大砲四門据付ケタルモ興趣アリト言フベシ。船ノ前ニ書ケル「トロン岩島」ハ今ノ Cap Touraine ノ半島附近ヲ表ハシタルモノニシテ對岸ニ家屋ノ櫛比セルハ日本町ナリ。寫實ト云フヨリハ寧ロ見聞事項ヲ概念的ニ描キタル想像圖ナリ。





二四 元和航海記

寫本一冊

京都帝國大學藏

本書ハ美濃紙半切ノ横本ニシテ紙數約九十葉アリ。元和四年八月長崎ノ住人池田與右衛門入道好運ノ編述セシモノナリ。彼ノ經歷ハ不明ナルモ本邦在留ノ葡萄牙人マヌエル・ゴンザロト云ヘル貿易航海家ニ從ヒ本邦ト天川、呂宋及ビ暹羅等ノ間ニ航行シ、其間觀シテ葡萄牙人ヨリ傳習セシ航海ノ技術及ビ道程ニ就キ記述セシモノニシテ緯度ノ測定、氣象ノ觀測、海深ノ測量ヲハジメ、曆日、星辰、風位、海潮等凡ソ航海ニ關スル種々ナル心得ヲ筆録セシモノトス。舊說者北洋正誡ハ自ラ本書ニ標記シテ「天下一本ノ珍書ナリ」ト註セリ。蓋シ徳川初期邦人ノ海外雄飛時代ニ於ケル航海書トシテ稀書ナルノミナラズ、東西ノ學術移入史上ノ資料トシテ貴重ナルモノト謂フベシ。

因ニ本書ニ就キテハ川島元次郎氏ノ「元和航海記ノ研究」(「續史的研究」ニ収ム)ヲ參考スベク、又新村博士監修ノ「海表叢書」第三卷ニモンノ抄略本ヲ收載セリ。

元和航海記  
 卷之四  
 後人之流削再併日本人入

後人之流削再併日本人入  
 此の戸之道半附四之呢記保  
 那等 四年日誌并禮待時度  
 十八日 等有則草之無別加勉  
 以翻譯俵詞於今書記如左

昔元和四年八月長崎住人池田與右衛門入道

好運編輯

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

本記ノ分條  
 一 舟子ノ撰 志中 是相文ノ一  
 二 志方人ノ撰 志中 是相文ノ一  
 三 人雖同撰 志中 是相文ノ一  
 四 方雖同撰 志中 是相文ノ一  
 五 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 六 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 七 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 八 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 九 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 十 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 十一 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 十二 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 十三 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 十四 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 十五 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 十六 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 十七 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 十八 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 十九 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 二十 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 二十一 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 二十二 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 二十三 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 二十四 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 二十五 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 二十六 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 二十七 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 二十八 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 二十九 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 三十 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 三十一 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 三十二 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 三十三 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 三十四 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 三十五 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 三十六 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 三十七 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 三十八 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 三十九 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 四十 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 四十一 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 四十二 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 四十三 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 四十四 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 四十五 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 四十六 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 四十七 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 四十八 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 四十九 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 五十 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 五十一 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 五十二 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 五十三 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 五十四 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 五十五 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 五十六 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 五十七 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 五十八 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 五十九 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 六十 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 六十一 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 六十二 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 六十三 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 六十四 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 六十五 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 六十六 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 六十七 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 六十八 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 六十九 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 七十 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 七十一 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 七十二 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 七十三 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 七十四 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 七十五 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 七十六 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 七十七 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 七十八 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 七十九 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 八十 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 八十一 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 八十二 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 八十三 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 八十四 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 八十五 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 八十六 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 八十七 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 八十八 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 八十九 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 九十 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 九十一 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 九十二 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 九十三 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 九十四 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 九十五 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 九十六 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 九十七 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 九十八 一國下之撰 志中 是相文ノ一  
 九十九 一國上之撰 志中 是相文ノ一  
 一百 一國下之撰 志中 是相文ノ一

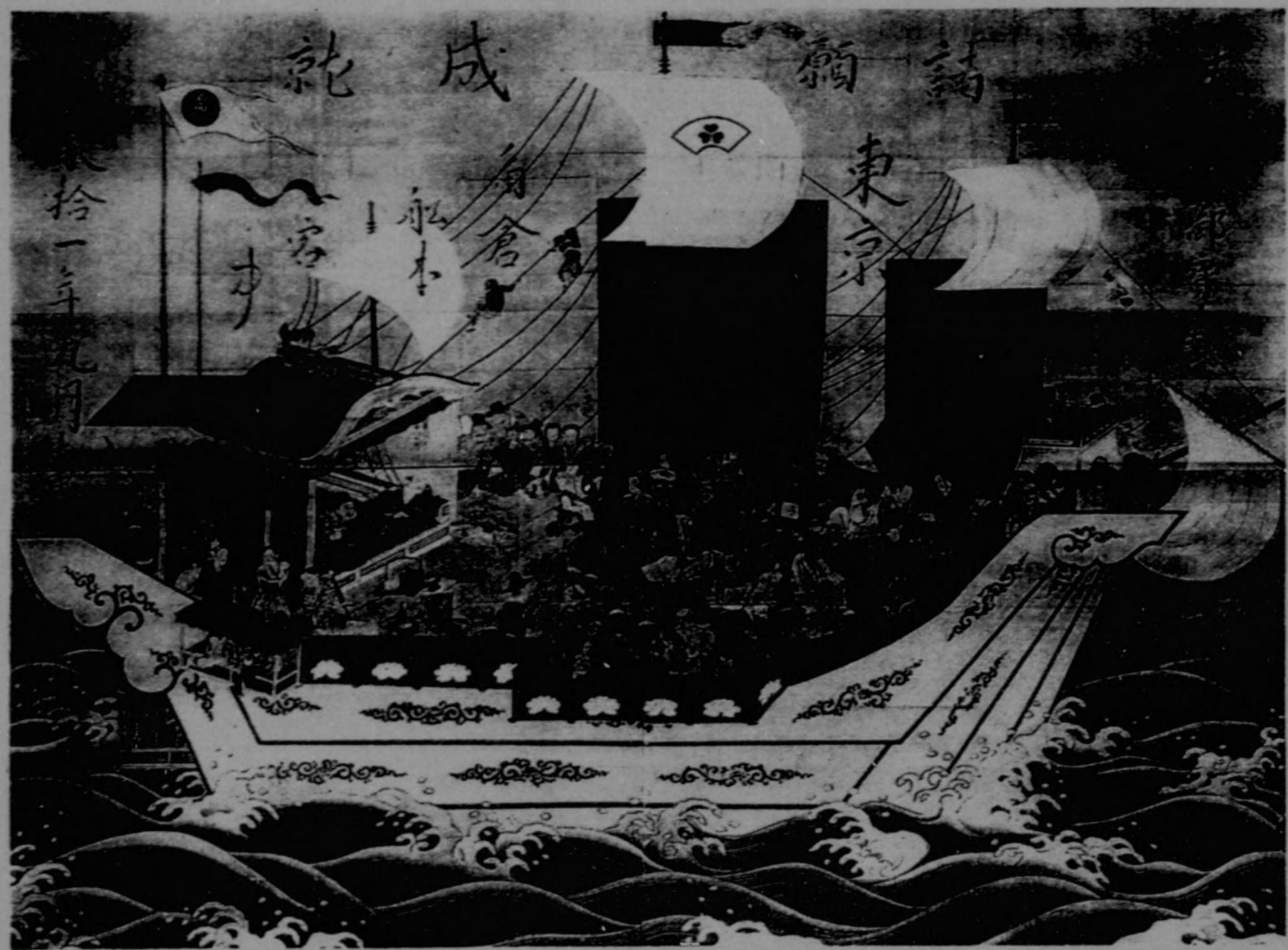


二五 角倉船圖 一軸

京都市 清水寺藏  
京都繪畫專門學校藏本ヨリ撮影

此ノ圖ハ京都ノ商人角倉嚴昭ガ寛永十一年九月其ノ持船ガ東京カラ無事歸港シタル  
ニツキ報賽ノタメ渡航船ヲ畫カシメテ扁額トナシ、是レヲ京都清水寺ニ奉納シタルモ  
ノナリ。角倉氏ハ了以、與一、嚴昭ノ三代ニ亘リ、慶長ヨリ寛永年間ニ互リ東京安南  
等南洋貿易ニ從事セリ。







二七 末吉孫左衛門畫像

一軸

攝津國 末吉勘四郎氏藏  
東京帝國大學史料編纂部藏本ヨリ撮影

二六 末吉船圖

一軸

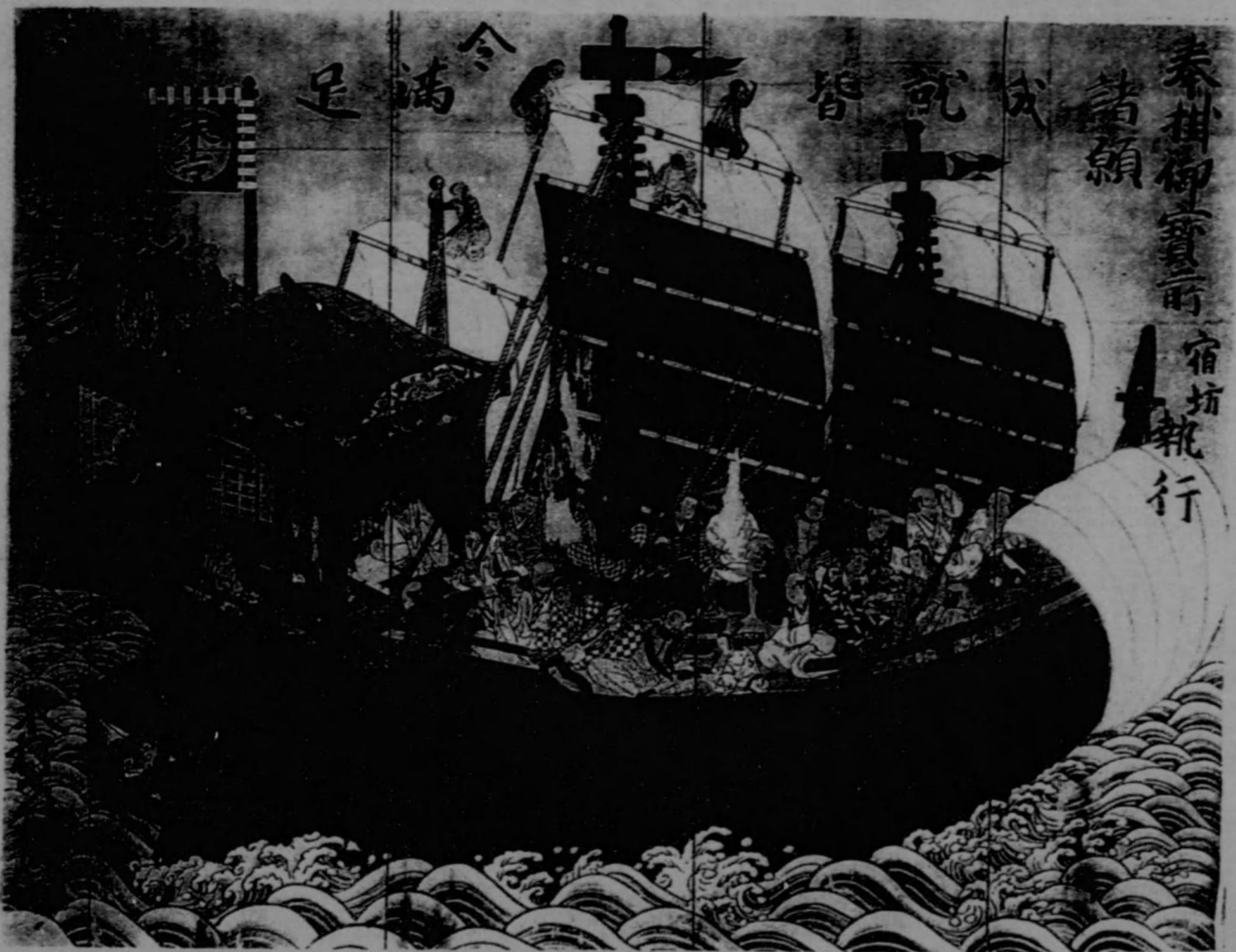
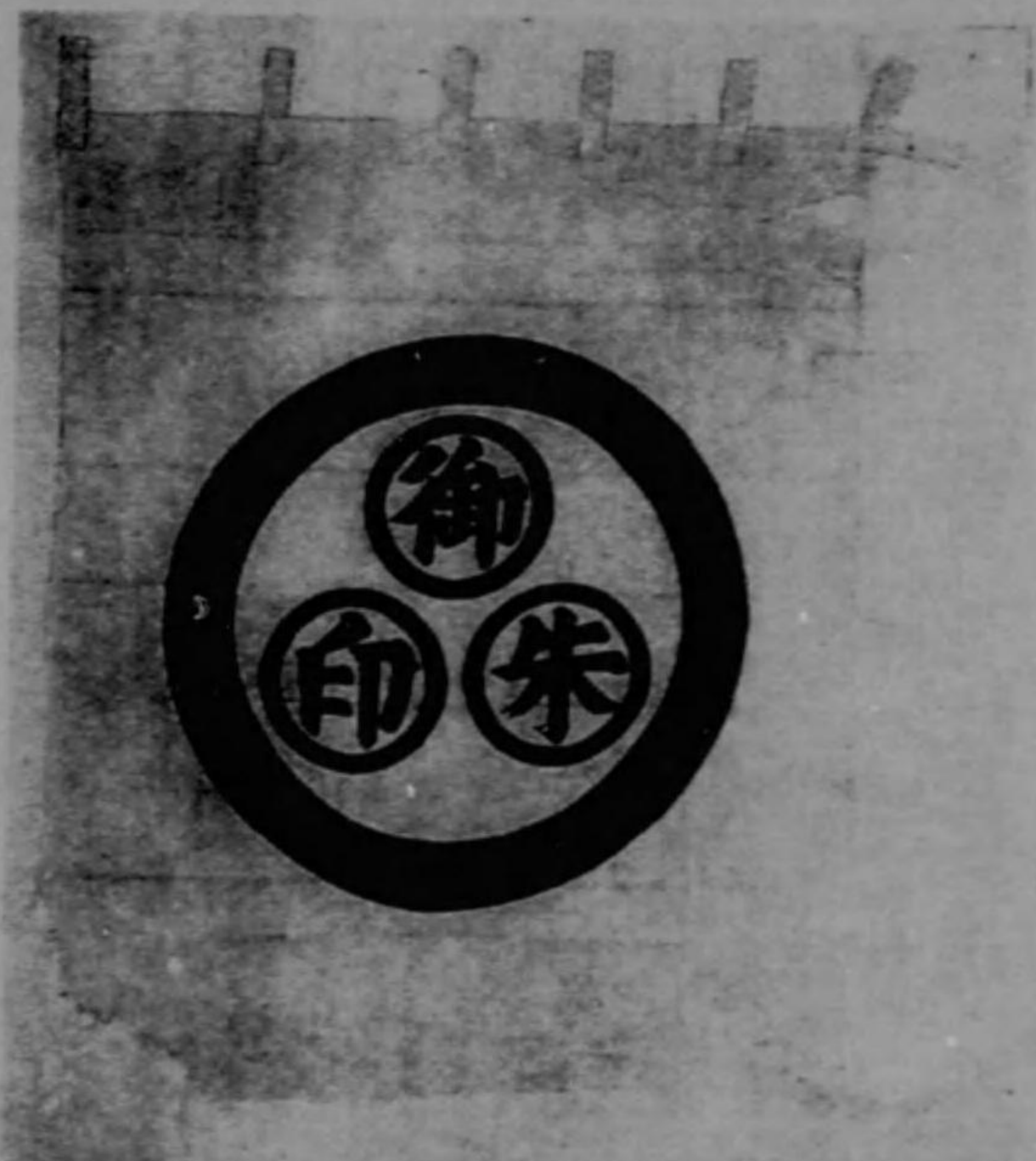
京都市 清水寺藏  
京都繪畫專門學校藏本ヨリ撮影

二八 御朱印船旗

四幀ノ内

伊勢國 角屋七郎次郎氏藏  
東京帝國大學史料編纂部藏本ヨリ撮影

本國ハ江戸時代初期ノ大阪商人末吉孫左衛門ノ南洋貿易船ヲ畫キタルモノニシテ孫左衛門ガ其ノ航海安全ノ祈願報賽ノ爲メニ京都清水寺ニ奉納セル扁額三面中ノ一ナリ。孫左衛門ハ慶長、元和、寛永頃屢々呂宋、東京等ニ渡航シ貿易ニ従事セル人。圖ハ御朱印船ノ構造等ヲ示スノミナラズ、三味線、骨牌、雙六、煙草盆、煙管等、當時ノ風俗ノ參考資料ナルモノ多シ、南洋土人が勞役ニ服セルモ亦注意スベシ。文字中ニ宿坊執行トアルハ清水寺ノ執行即チ寺務所ヲ以テ取次トスル意ナリ。





二九 阿蘭陀船圖說

版畫 一幅

京都帝國大學藏

幕末ノ開國論者林子平ノ出版セシモノニ係ル。本圖ニ二種アリ。一ハ天明二年ノ開板ニテ、他ハ寛政二年ニ成ル。而シテ本書所收ノ原圖ハ寛政二年ノ印行ニシテ、堅九、五センチ横五、三、五センチノ木版唐紙摺ノ圖幅ナリ。圖面ノ下部ニ阿蘭陀船ヲ示シ、上部ニ阿蘭陀ノ地勢及ビ國情、兩船ノ構造、又同國ヨリ日本ニ到ル航程等ニ就キ略説セリ。天明版ト寛政版トハ大差アルニ非ザルモ、船圖並ニ國説共ニ多少ノ相違アリ。又別ニ仙臺林子平戲述及ビ長崎富島傳吉梓トノ歎識アル異版モアリト云フ。「六無齋遺墨考證」ニ由レバ「林子平ノ此圖ヲ作リタルハ漫然タル戲作ニアラズ實ニ海國兵談ヲ上木スベキノ資料ヲ求メシガ爲メコレヲ知友間ニ頒ケテ販賣シタルモノナリ」ト云ヘリ。







三〇 海國兵談 寫本四冊

山形縣 石垣吉六郎氏藏

本書ハ云フ迄モナク林子平ノ著述スルトコロニシテ、外國ニ對シテ兵備ノ急務ヲ論究シタルモノナリ。天明六年ニ完成セラレ寛政三年之ヲ刊行シタルモ、幕府ノ忌憚ヲ受ケ板ヲ毀タル。石垣氏ニ據レバ本書ハソノ板下トナリタル自筆本ナリト云フ。

三一 二國通覽圖說 寫本一冊

山形縣 石垣吉六郎氏藏

三國通覽圖說モ同ジク林子平ノ著述ニシテ、朝鮮、琉球、蝦夷、無人島等ニツキ海陸ノ行程ヲ矢ノ分野ニ當テ度ヲ計リ、山川人物風土等ヲ解説セルモノナリ。本寫本ハ元山形縣鶴岡市ノ歴史家進藤家ノ所藏ナリシガ、後酒田ノ白崎家ニ轉ジ、最近石垣氏ガ入手シタルモノニシテ、林子平自筆本ナリト云フ。

三二

南蠻阿蘭陀之敵船乗捕行法 寫本一冊

京都市 新村出氏藏

本書ハ美濃判唐紙約二十葉ノ寫本ニシテ内容ハ圍守十五箇條續仕立十三箇條役船六箇條掛引之時節四箇條責破乗捕七箇條大船數艘責二箇條ニ分チ、外船ノ襲來ニ對シ心得ヘキ行法ヲ記述セシモノナリ。著者年代等詳ナラサルモ、書紙紙質ヨリ見テ元祿以前ノ傳寫本ニシテ、我邦ニ於ケル蘭學開始以前ノモノナルベシ。

三三

海國兵要 刊本一冊

京都市 新村出氏藏

小島省吾ノ著ス所、安積明郷ノ閣翠雪樓藏トアリ。刊年明ナラザルモ蓋シ嘉永安政頃ノモノナルベシ。本書ハ上下二編ヨリ成リ、上編ハ專ラ西洋兵學ニ關スル要領ヲ略述シ、下編ハ目次ニ水陸戰考ト題シ銃砲ヲ主トスル新式ノ戰術ヲ記セリ。著者ハ越後ノ人其ノ傳ヲ詳ニセザルモ、幕末ニ於ケル兵學家ニテ西洋ノ兵書ニ據リ本書ヲ編述セシモノナリ。

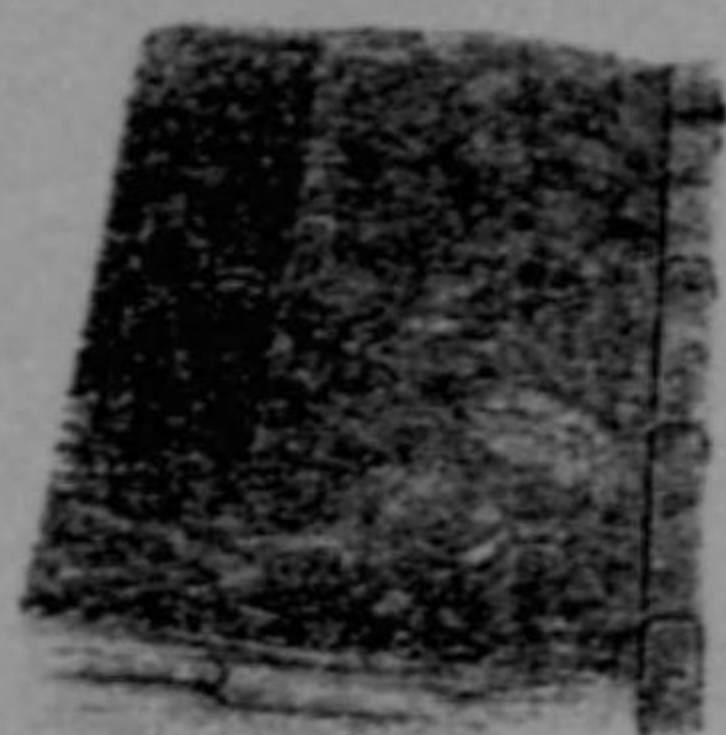
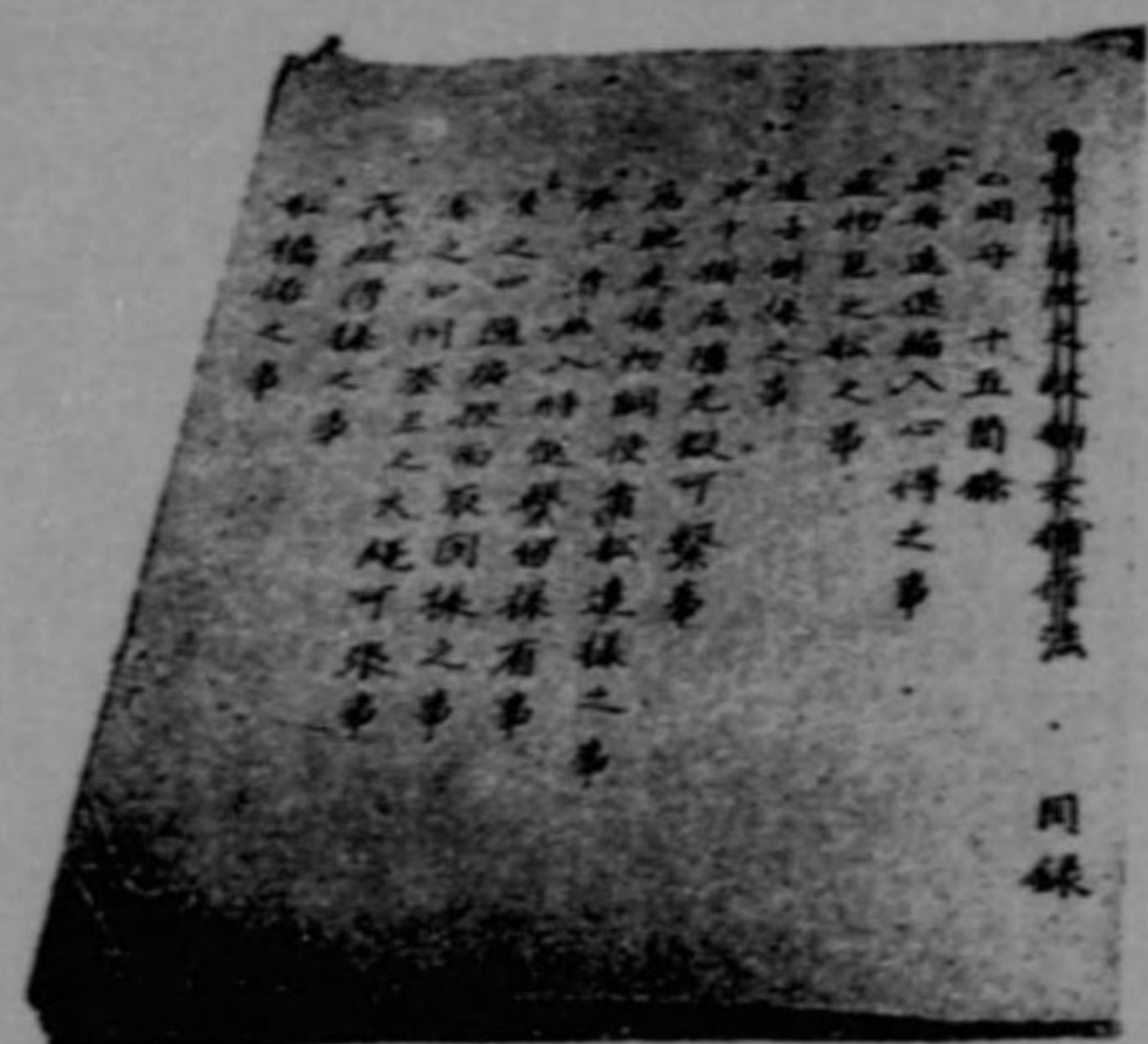
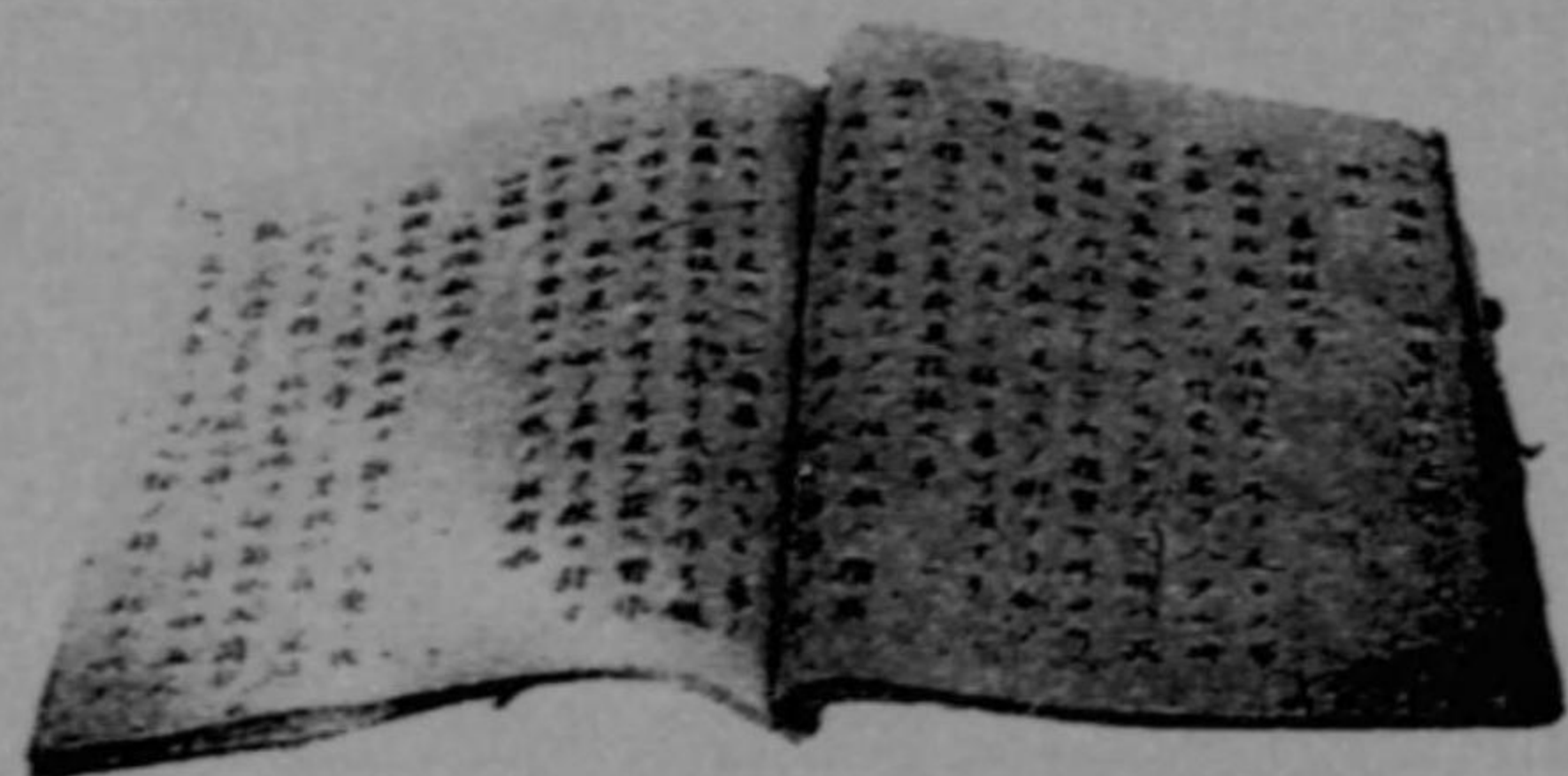
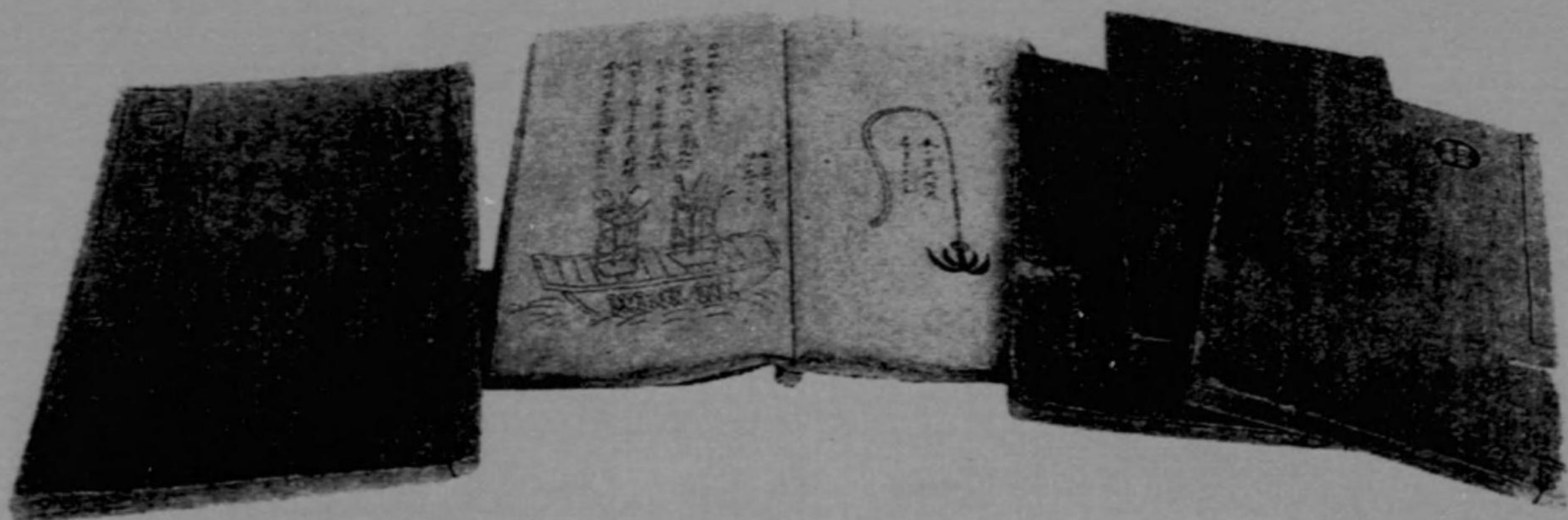
三四

海防集義 寫本一冊

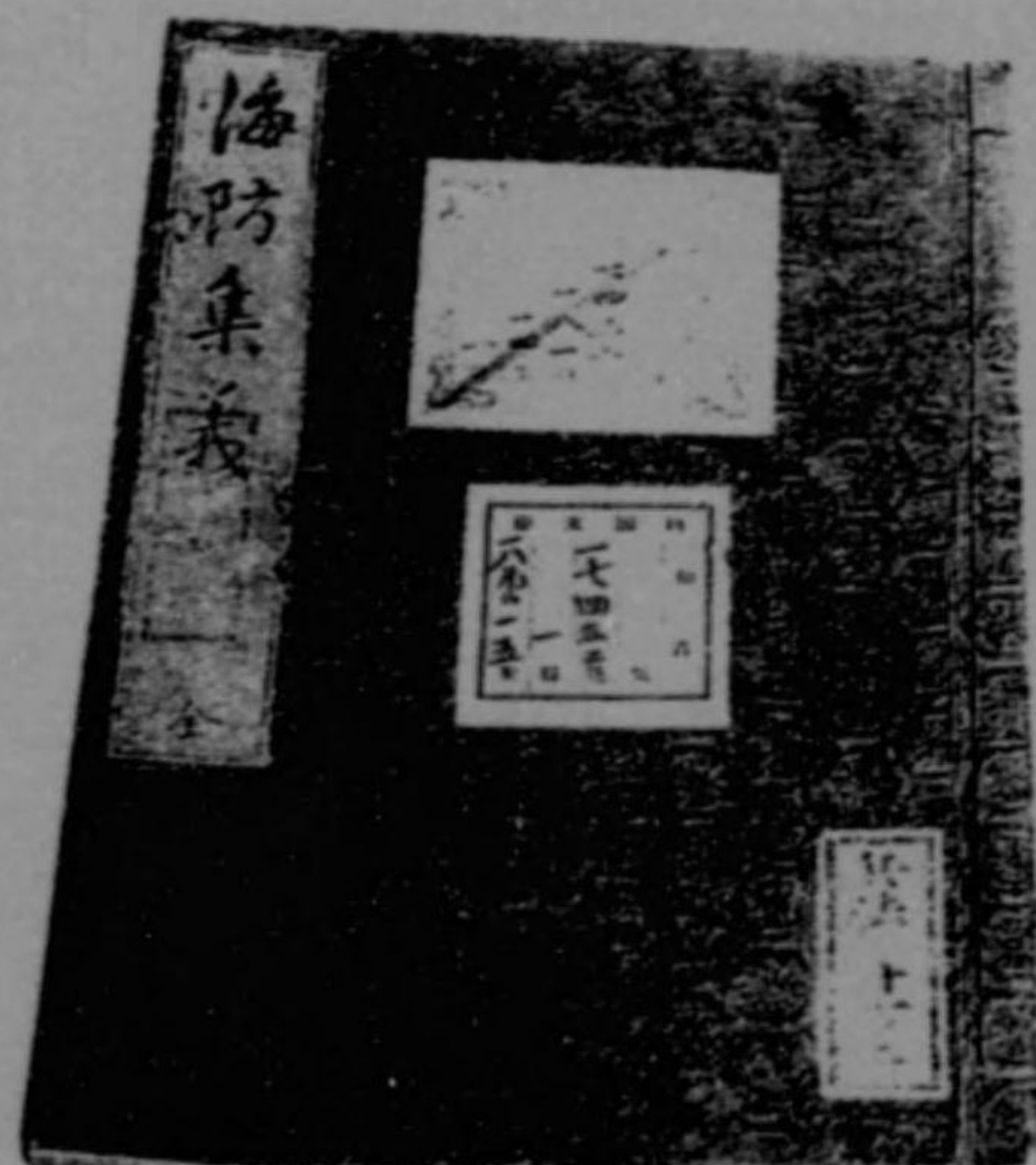
内閣文庫藏

本書ハ和學講談所ノ舊藏ニ係リ羽倉簡堂(外記)ノ振論海防鼓盞谷甲藏ノ籌海私議ヲ收メ之ニ附スルニ嘉永安政丑風説書ヲ以テス。即チ松翠樓叢書中ニ於ケル海防集義ノ乙集トシテ收載セラル、モノナリ。書後ニ土岐參政ニ關シテ友人兩角子靜氏ヨリ贈ラレタル紺摺ノ内山紙ニ記サムモノヲ同フ所ニ此ノ三種ヲ以テ答ヘラレタルヲ以テ之レヲ附録シテ子係ニ胎ス云々ト載セラレタリ。

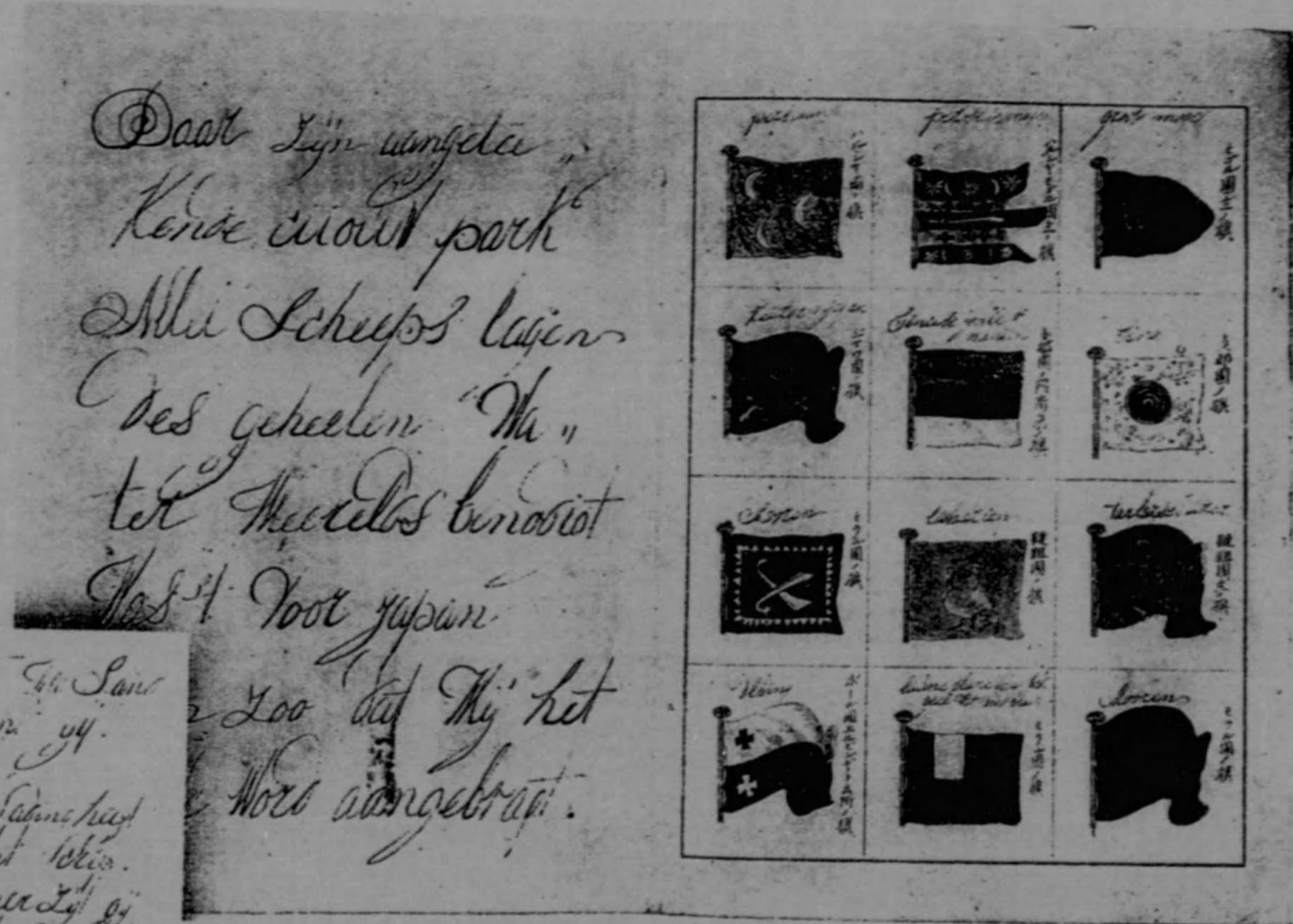




擬繪海防一  
 蓋海防之要不在於船之利與不利而在於人心之固與不固人心固則利與不利不足為慮人心不固則利與不利不足為慮人心固則利與不利不足為慮人心不固則利與不利不足為慮







三五 各國旗圖 寫本一冊

和蘭陀人ノ傳寫セル旗圖録ニツキ我國ニ於テ寫シ取リタルモノナルベク、主トシテ  
各國ノ船旗ヲ集録シタルモノナリ。美麗ナル彩色ヲ施シタリ。初期國學ノ資料トシテ  
モ興味深キモノナリト考ヘラル。

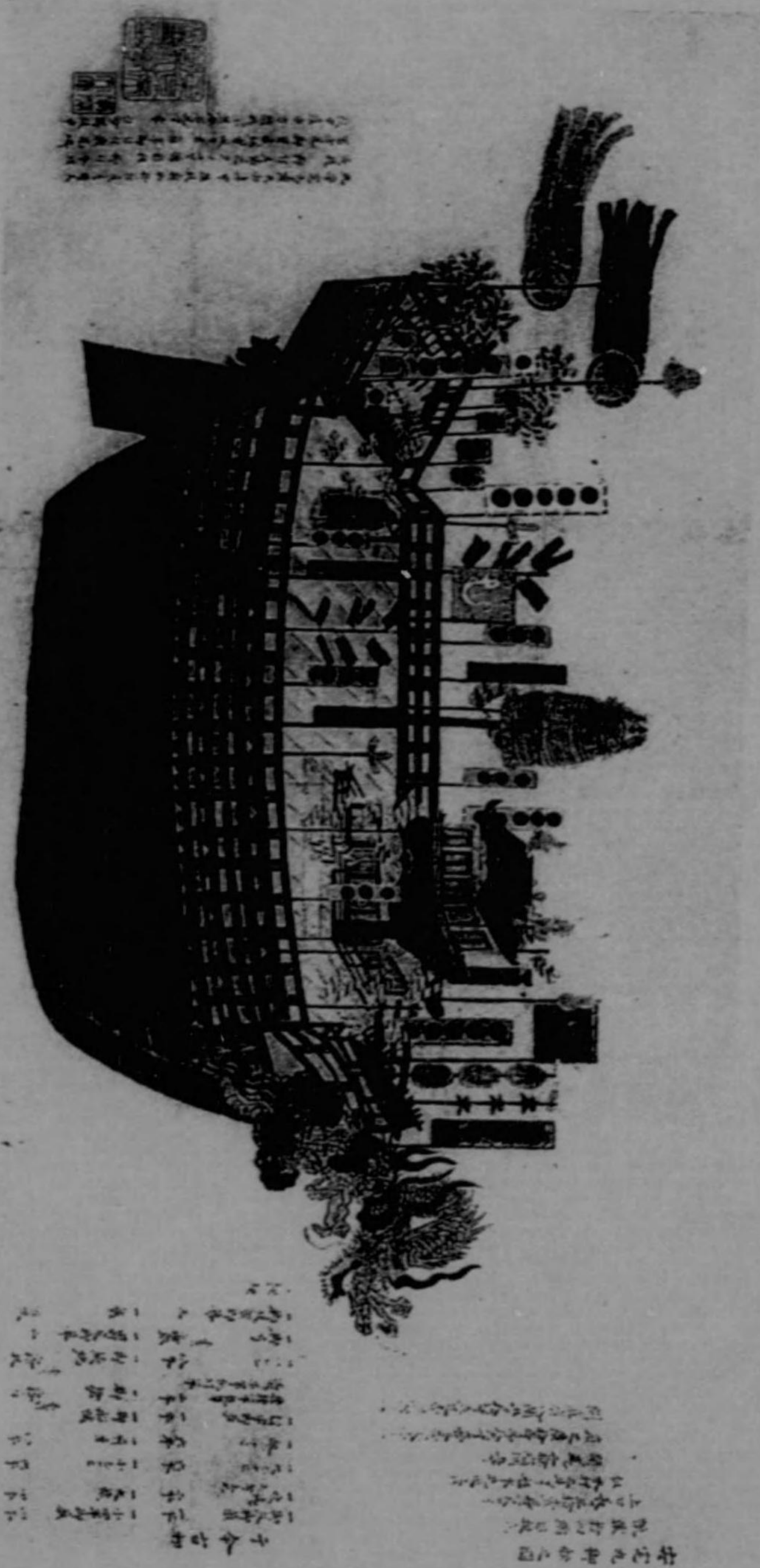
東京帝國大學附屬南葵文庫藏



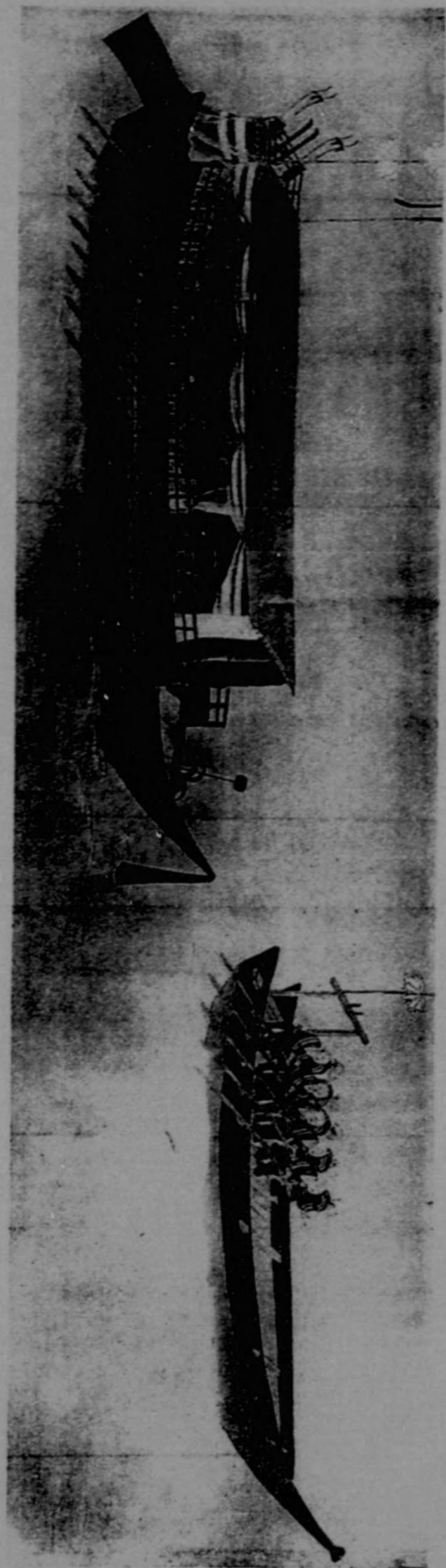
三六 安宅御船之圖 一幀

東京帝國大學附屬南葵文庫藏

安宅丸ハ徳川幕府ノ軍船ニシテ、三代將軍家光寛永十二年伊豆ニ於テ建造ス。徳川實紀寛永十二年六月二日ノ條ニ曰ク「安宅丸云ふは、一昨年より向井將監忠勝に命ぜられ、相模國三浦三崎にて作らしめしに、今年に至て成功せり。此船龍頭首をよそほひ、その大きさは三十尋、銅もて是を包み、三重の櫓を設け、あたかも城廓の如し。五色の幔幕をめぐらし、五色の船印を立て、船二百挺、一艇ごとに水手二人、すべて四百人あり、螺、太鼓にて進退す」と見ユ。後廻漕セラレテ本所ノ船倉ニ繋留セラレタルモ、和船トシテハ餘リニ膨大ナリシ爲メ取扱ニ不便ナル上天下ノ我トナルノ故ヲ以テ天和二年破毀セラレテ埋メラル。里俗此ノ邊ヲ安宅ト云フ。即チ今ノ深川區安宅町ノ地ナリ。







三七 川船御成之圖

一軸

東京市 帝國圖書館藏

文化文政頃ニ於ケル將軍家墨田川々船御成ノ光景ヲ描キタル巻物ノ一部ナリ。



三九 廣島市淺野圖書館藏水軍書

舟戰武見卷 寫本一册

水戰ニ於ケル偵察船ノ心得ヲ箇條書ニシテ記述セルモノナリ。卷頭序ニ「夫斥候者則用兵之樞要也。故謂之軍艦。陣體之虛實進退之利害江海之淺深潮汐之順逆皆可由是察也。非能者則何可得之乎」トアリ。以テ本書ノ内容ヲ察スベシ。筆者並年代不詳。

漕列之卷 寫本三卷

水戰ニ於ケル軍船之備立法、漕列法、碇泊法、其他諸般ノ心得ヲ記述セルモノナリ。筆者並年代不詳。

船軍拔書 寫本一卷

題目ノ如ク水戰ニ關スル心得ヲ拔書シタルモノニシテ、六十九條ヨリ成ル。各條記事簡ナレドモ潮汐及風ノ事ハ比較的詳シ。筆者並年代不詳。

船軍間書 寫本一卷

潮汐ノ干瀉ヨリ始メテ風ノ事、兵器、船具、戰法之事等水戰法ノ概略ヲ記述ス。卷末ニ「右者真鍋、谷輪、德井、來島、九鬼小濱ノ家ニ仕ヘシ老人共ノ物語ヲ聞集シテ如此書付申物也。寛文六丙午歲八月日」トアレドモ筆者ノ姓名ヲ記ナズ。

艦弁之卷 寫本一卷

艦弁之卷口訣 寫本一卷

舟戰ノ心得並ニ戰法ニ就キテ論述セル兵書ニシテ、前者卷尾ニ、「右之條々軍船大秘傳之所収々他言有之間敷者也、明曆元乙未九月吉島」トアリ。後者ハ前者ノ遺漏ヲ補ヒ、口傳及意義ノ足ラザル所ヲ抜キテ講義体ニ記述シタルモノナリ。蓋シ前者講義ノ筆記ナラン。

因ニ後者ノ卷首ニ艦弁之卷ノ辨アリ。「師云題號ナル艦編ハ戰艦ナリ。弁ハ戰ナリ。舟ヲ以戰之法ヲ演ル故ニ題號トスルナリ」ト。

全流舟軍之卷 寫本一册

(誤テ下段ニ編入セリ下段ヲ見ヨ) 全流ハ水軍諸流派ノ中最モ後レテ成立シタル一流派ニシテ備前池田藩ノ船手安田氏ノ流派ナリ。本書ハ天氣之卷、全流舟戰之卷全流道具之卷、全流舟橋之卷、全流舟備之卷等ヨリ成ル。天氣之卷尾ニ「寛永十有稔二月中旬於備前重次誌之」トアリ。又全流舟軍之卷尾ニ「寛文十庚戌正月二十五日、傳從安田氏」トアリ。右軍船之法寺島氏藩守ヨリ元文元辰春傳之興榮軒中如書寫」トアリ。按スルニ數卷ヲ合冊シタルモノ、如シ。

三八 東京市帝國圖書館藏水軍書

宋國流船軍書 寫本四入一册

宋ノ發沈流ヲ基礎トシテ水軍ノ戰法ヲ講述セルモノナリ。著者不詳。

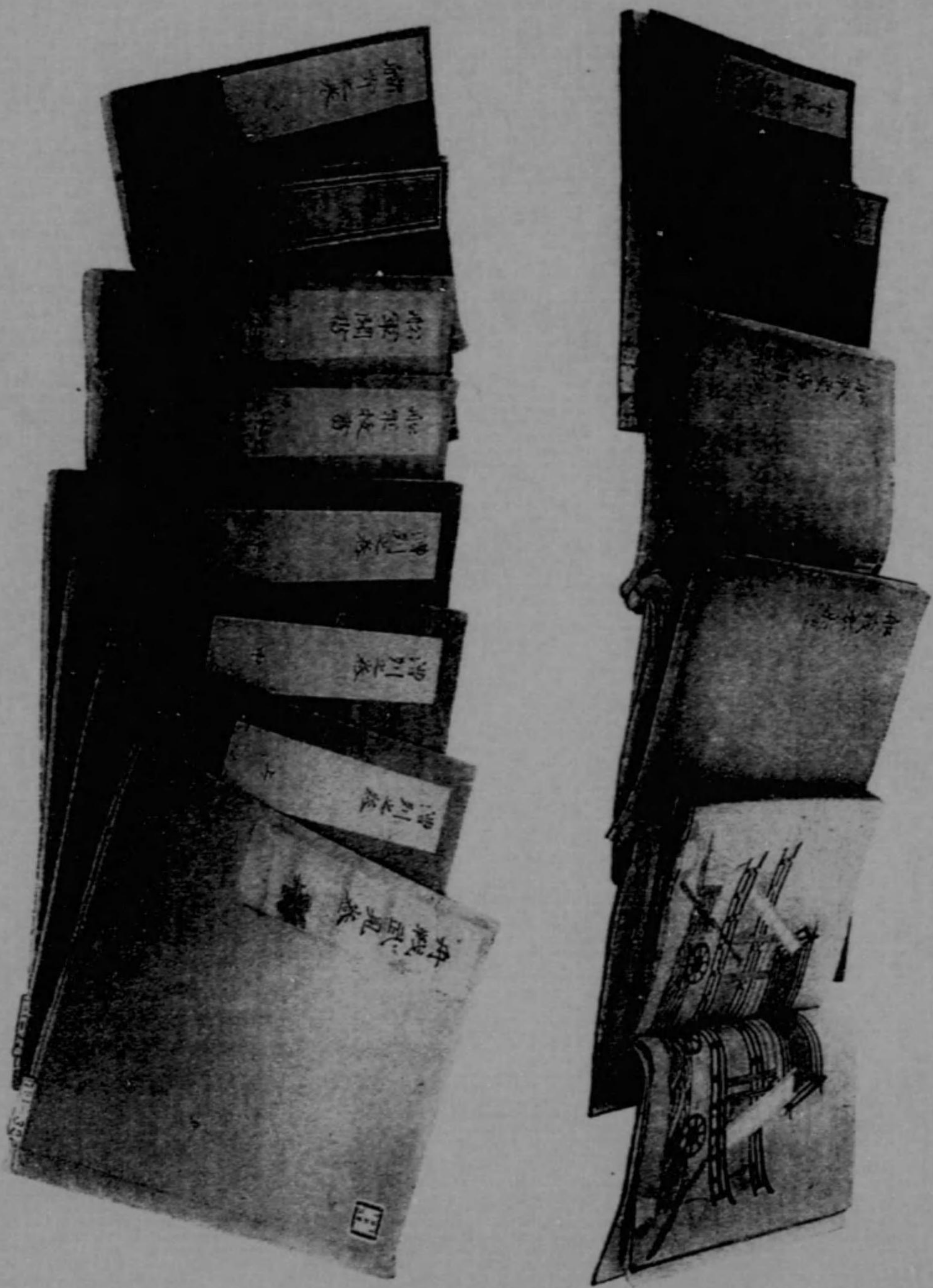
船戰要集 寫本二册

船戰要集講談 寫本二册

著者ハ手利元就時代ニ同家中ノ戰術家タリシ浦部兵部ニシテ、水軍ノ戰法ヲ述ベタルモノナリ。三島流水軍ノ傳統ヲ傳ヘタルモノト考ヘタル。

船軍口訣 寫本一册

甲州流ノ水軍ニ關スル傳書ナリ







四〇 御前本鐵砲書

寫本 十一帖

内閣文庫藏

本書ハ所附鐵砲御前物ニシテ標紙ハ紺紙金泥壽繪ハ池水ヲ以テシタル精緻ノモノナリ。更ニ見返シハ絢爛タル金泥ヲ以テ粉飾セラレ禮ニ菊桐葵ノ紋様ヲ鑲配ス。裝旋風葉ニシテ界欄スベテ金色ヲ呈ス。収録スル所鐵砲ノオコリ、藥ノ法、執意筒椿朱積、鐵砲繪之書ソノ他七篇ヲ以テス。但六、七、八ノ卷ハ題名ノミニシテ記ストコロナシ。モト天文廿三年十一月佐々木少輔義國ノ稻富相模守ニ對シテ差出サレタルモノヲ裔孫一夢之ヲ謄書シテ小笠原監物へ進シ披露ニ及ブモノナリ、時ニ慶長九年八月ト云。

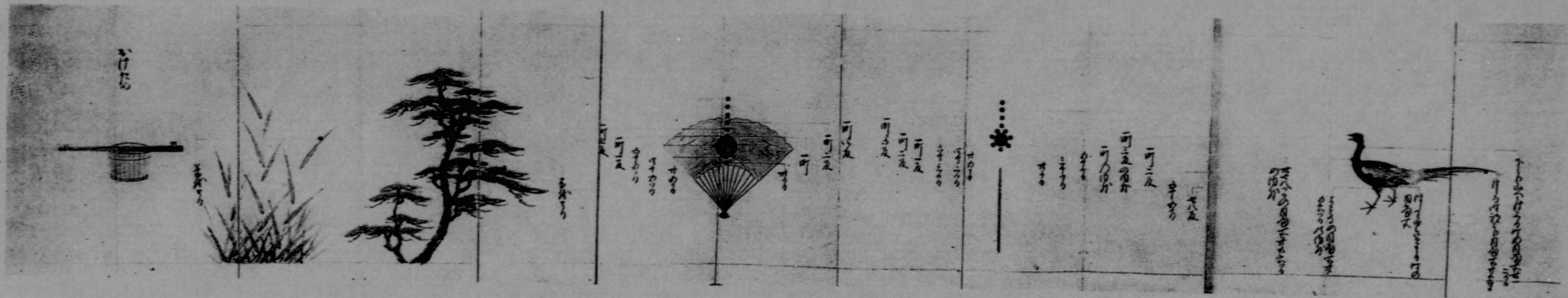


四一 御前本鐵砲書

内閣文庫藏

前掲鐵砲書ノ一部ニシテ、所々點ヲ打チタルハ狙フベキ箇所ヲ示シタルモノナリ。原圖ニハ美麗ナル彩色ヲ施サル。





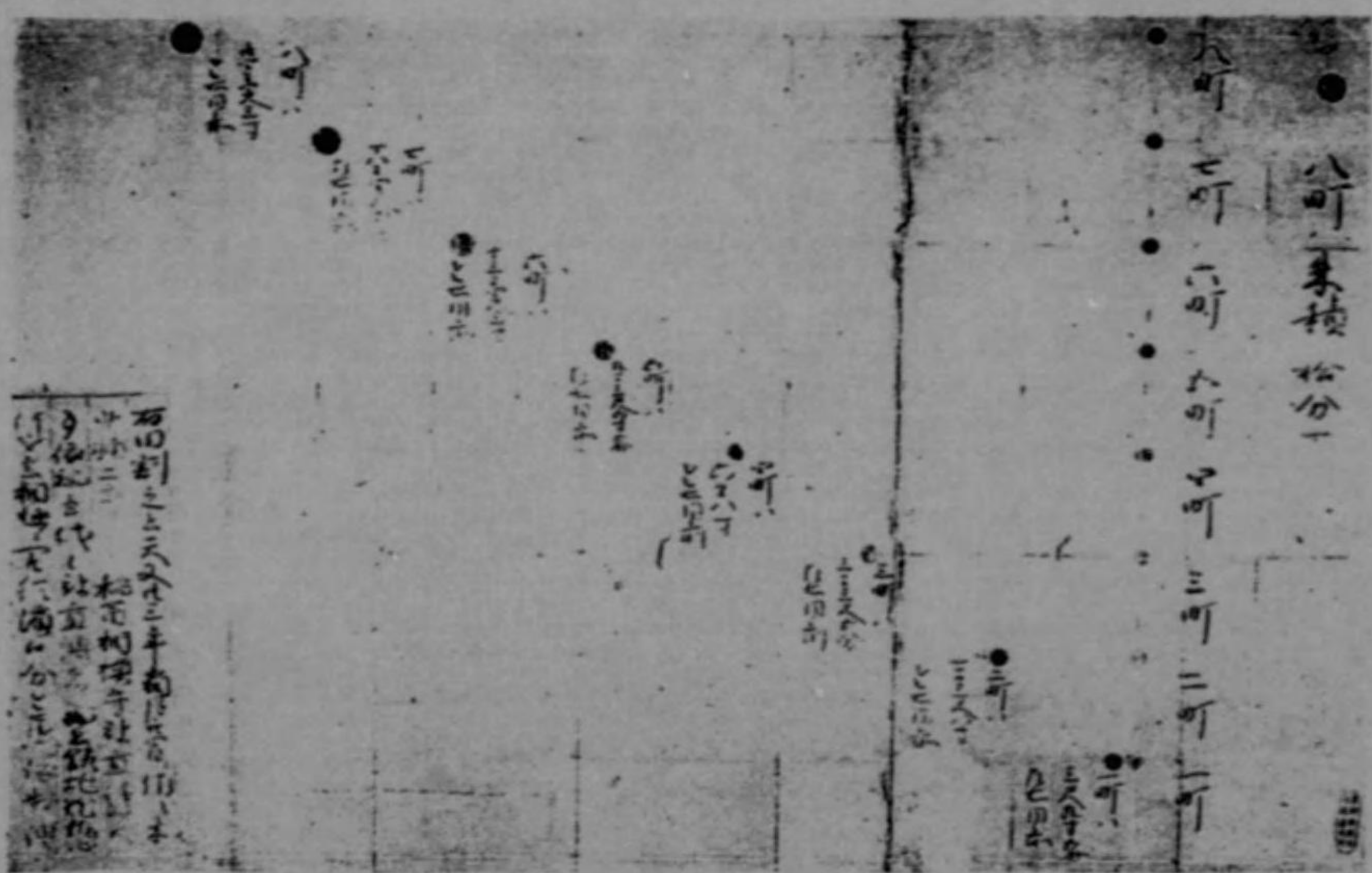


四二 稻富流砲術傳授書

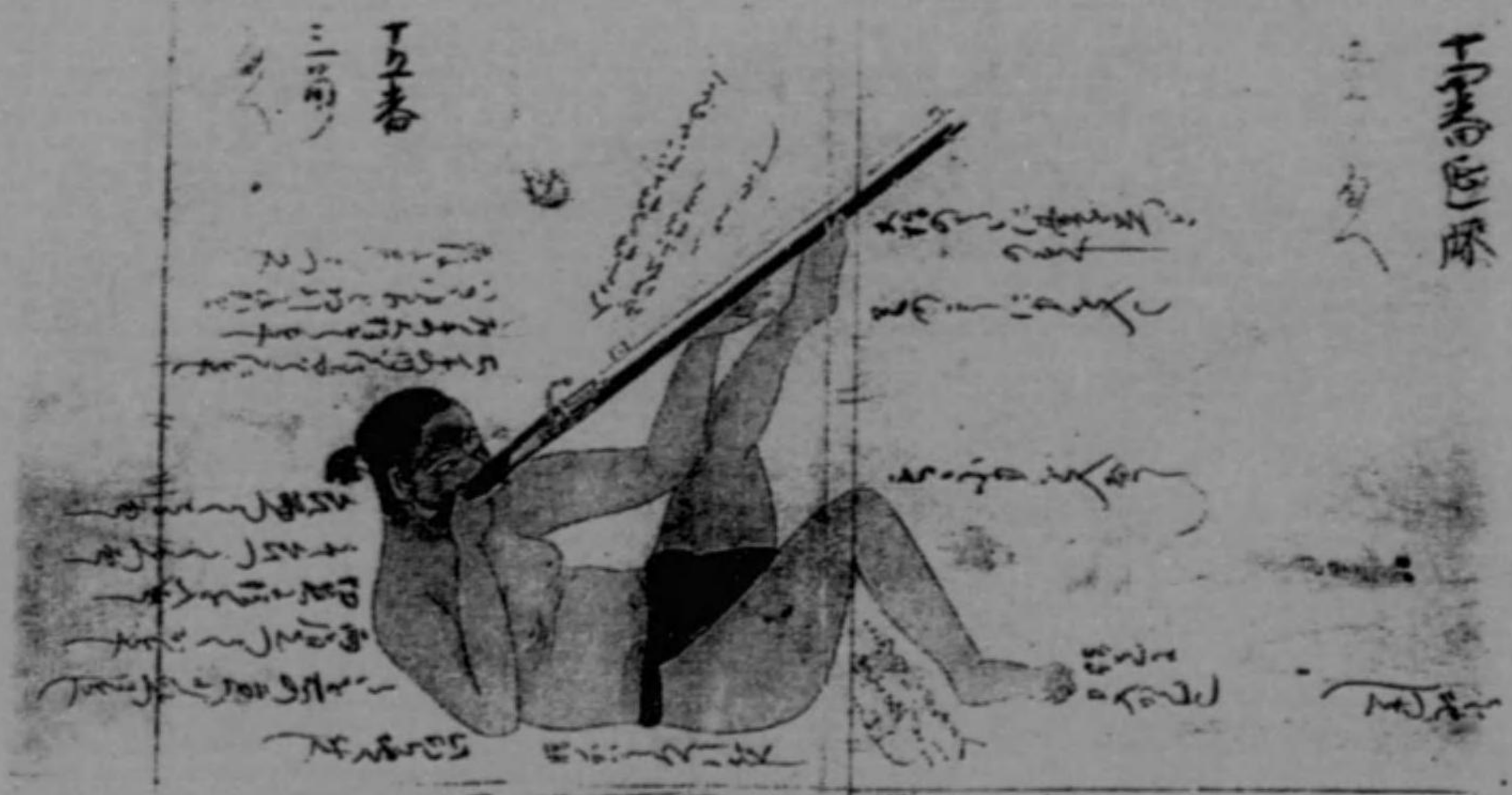
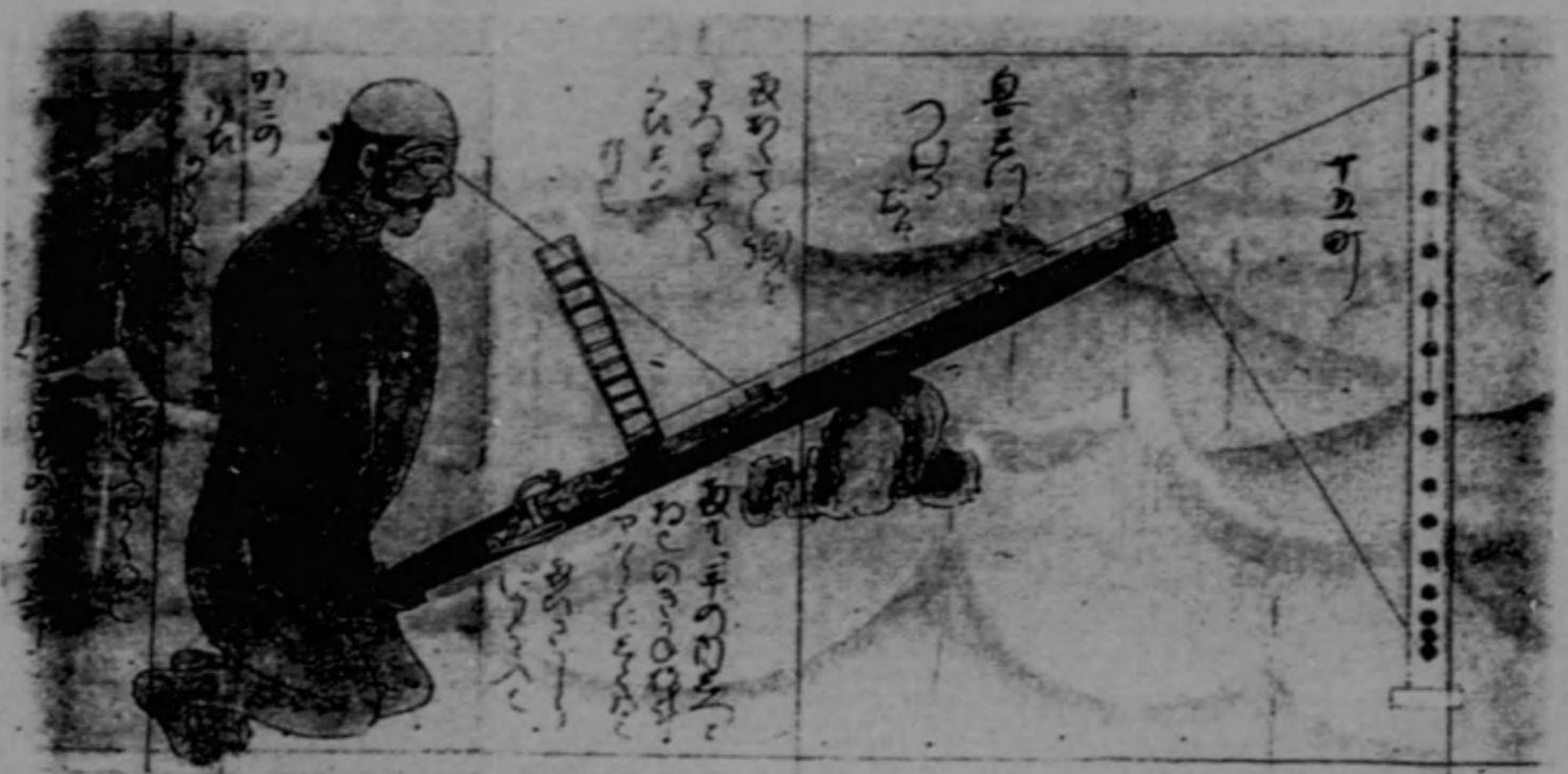
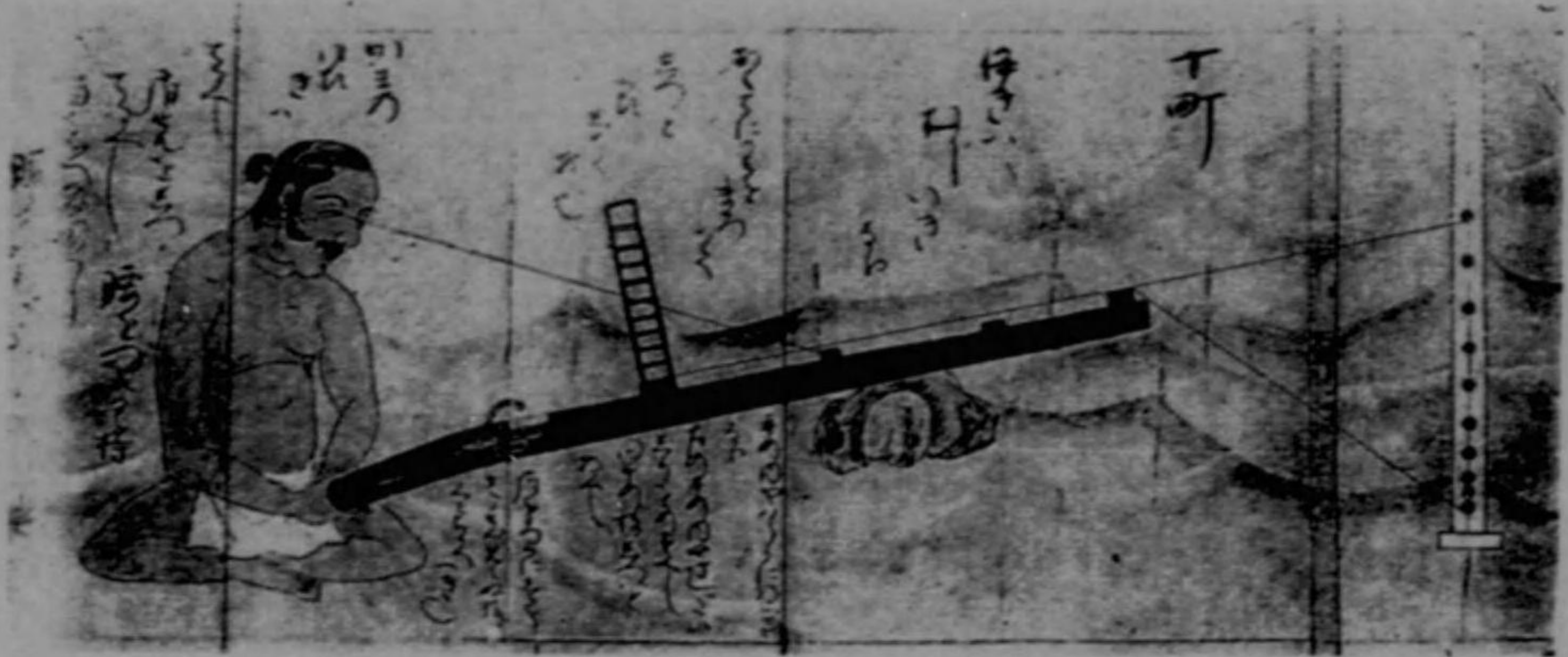
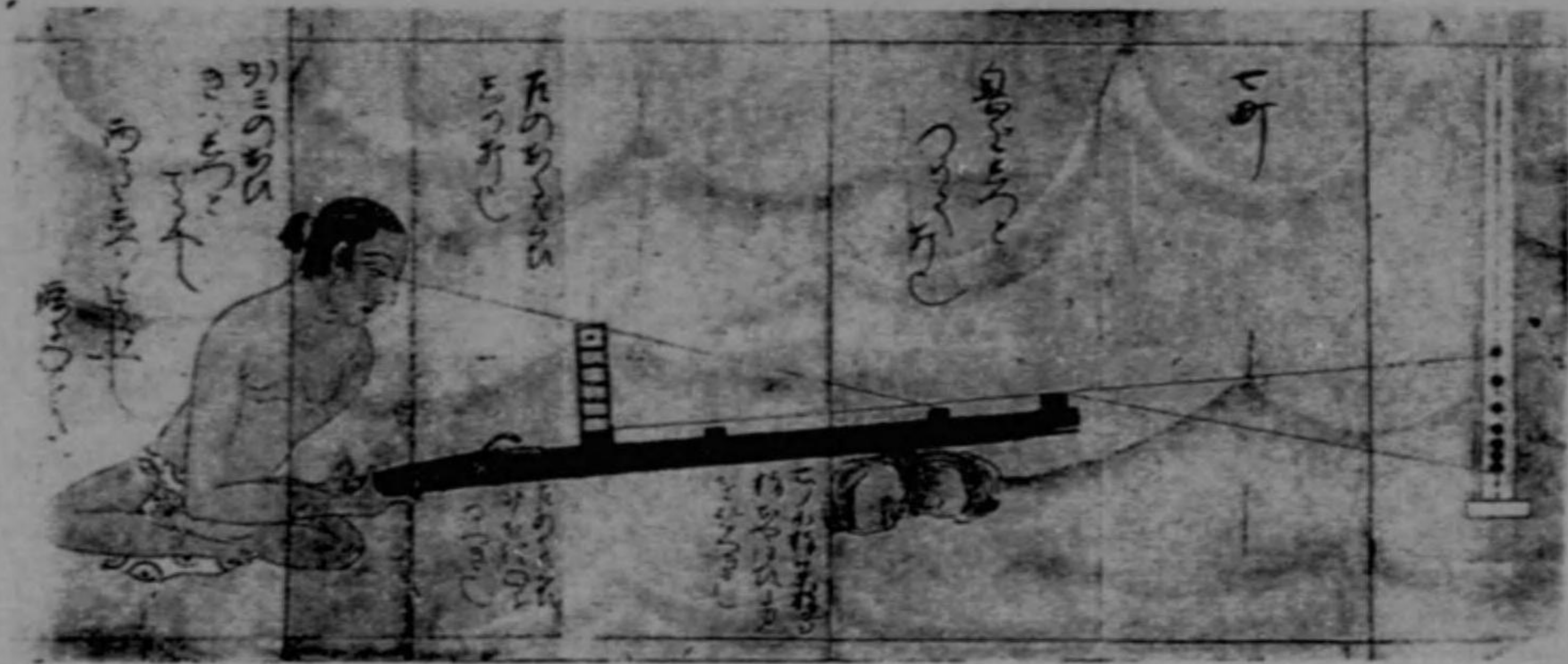
寫本 十九冊

京都帝國大學藏

本書ハ稻富流砲術ノ始祖稻富伊賀入道一夢ノ傳授書ニシテ、慶長十四年及十七年  
 門人長澤七右衛門尉重綱ノ書寫セシモノニ係ル。稻富伊賀ハ文祿慶長年間ノ人、初メ  
 細川忠興ニ仕ヘ征韓役ニ從ヒ大イニ武功ヲ顯シ又徳川家康ニ砲術ヲ以テ仕ヘ關ケ原役  
 ニ從軍シテ功アリ。後家康秀忠ニモ砲術ヲ傳授シテ名聲ヲ博セリ。此書ハ鐵砲寸法之  
 書 鐵砲藥發方書 極意秘傳書 極意町見之書 三十二相繪圖 二十五相繪圖等凡テ  
 十五帖ヨリ成リ、何レモ詳密ナル圖解ヲ加ヘ、鐵砲ノ構造並ニ製作、火藥ノ製法、射  
 擊法、町見法等ニ就キ解説セルモノナリ。  
 因ニ本書ハ内閣文庫藏本「御前本鐵砲書」ト互ニ參照スベキモノナリ。





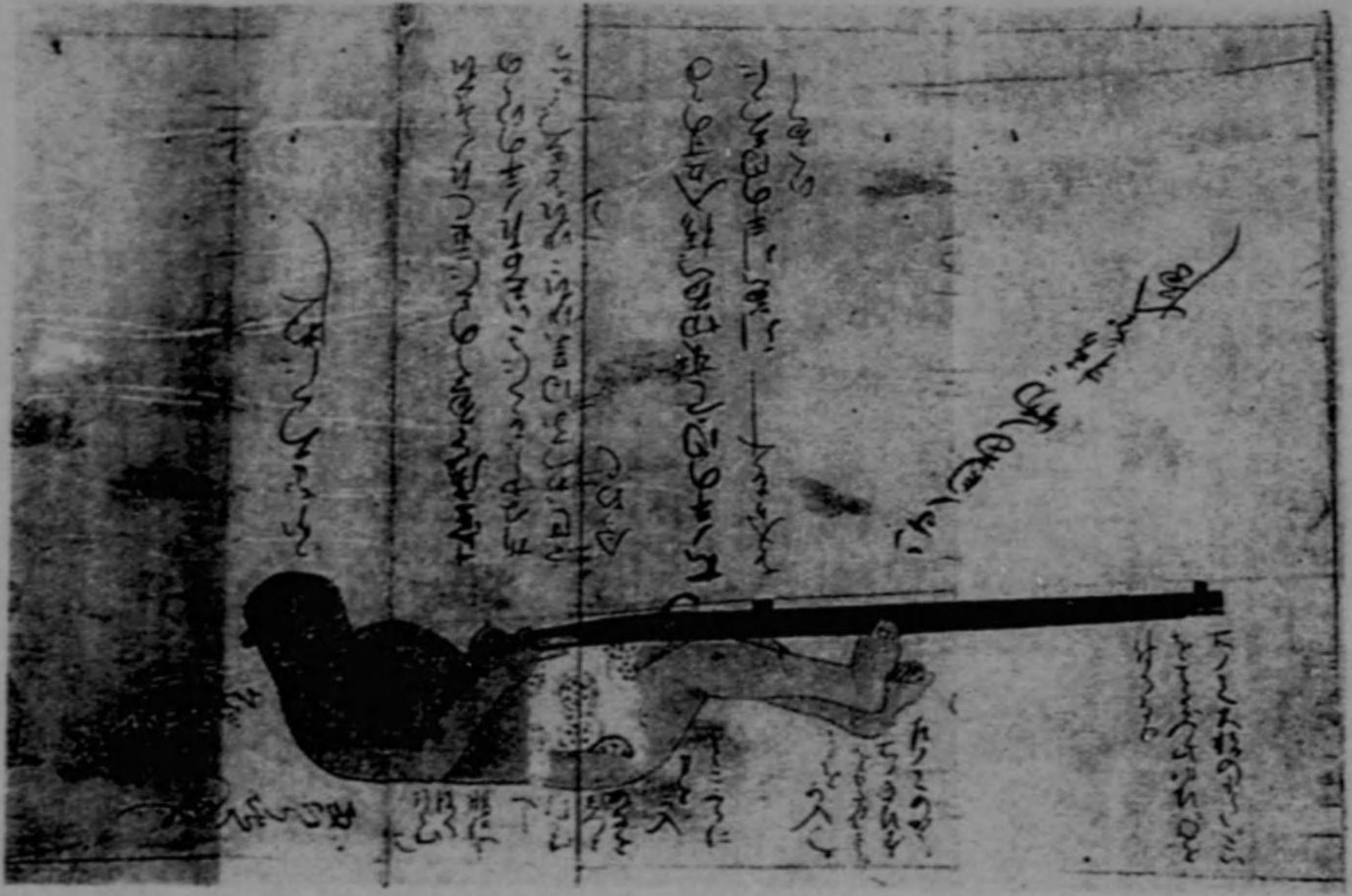


四三 稻富流砲術傳授書

京都帝國大學藏

前掲傳授書ノ一部ニシテ、原書ニ於テ順次ニ精細ニ圖解セルモノ、中ヨリ姿態ノ異レルモノ、興味アルモノ等代表的ト思ヘル、モノヲ撰出セルモノナリ。





四四 稻富流砲術傳授書

京都帝國大學藏



四五 德丸原火技練習圖

一軸

長崎市 古賀十二郎氏藏

東京帝國大學史料編纂掛藏本ヨリ撮影

本圖ハ天保十二年五月九日高島秋帆ガ幕府ノ命ニ依リ武藏德丸原ニ於テ洋式ノ砲術  
及ビ銃陣ヲ試ミシ時ノ狀況ヲ示シタルモノナリ。圖中兵士ハ銃レモ秋帆ノ門人ニシテ  
黒漆圓錐形ノ小陣笠ヲ被リ黒筒袖ノ半纏、黒股引、紺足袋、草鞆トイフ服裝ニ膺差一  
本ヲ差シ彈藥入ト銃筒袋ヲ代帶ヲ以テ腰ニ附ケタリ。當日秋帆トソノ子淺五郎トハ司  
令官ニシテ黒ノ筒袖羽織、黒ノ太刀附ヲ着シ雙刀ヲ挿ミ居タリ。此ノ火技ハ我國ニ於  
テ洋式ニ據フテ銃砲ヲ演習セシ始メトシテ意義深キモノナリ。





Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or a list of items. The text is arranged in a single column and is partially obscured by the illustration. It appears to be a detailed account or inventory, possibly related to the scene depicted in the drawing.



四六 米艦載砲陸揚ノ景

靜岡市 葵文庫藏書所載

本國ハ一八五六年(安政三年、此年米國領事ハリス下田ニ駐在ス)米國ニ於テ出版セラレタル「米國海軍艦載砲」(ダールグレン著)ト稱スル著書ノ口繪ニシテ、本書發行ノ二年前即チ一八五四年(安政元年、此年四月ベルリト下田條約締結ナル)米艦ガ伊豆ノ下田ニ於テ榴彈砲ヲ陸揚セル光景ヲ描ケルモノナリ。現在ト比較シテ轉ダ成概ニ堪ヘザルモノアリ。







四七 津田流鐵炮口決記

寫本 五冊

内閣文庫藏

モト昌平版學問所發淺草文庫ニ收藏アリシモノナリ。津田流鐵炮ノ秘術ハソノ祖屏太郎享祿ノ頃種子島ニ著到シテ鑿主ヨリ傳授ケラレタルニ始マリ、算長天文十三年ニ歸住シテ之ヲ傳授セラレタルモノトセラル。寢覺之卷、星之卷、大要之卷、秘歌之卷、矢倉積之卷ソノ他數卷ヲ輯ム。本書原本ハ寛永六年秋山源太夫へ宛津田六兵衛守勝ヨリ贈リシモノトセラル。

四八 海上砲術全書及附圖

寫本 十六冊

同 文庫藏

本書ハ西紀一八三二年蘭國メテムプリフヲ海軍教場ノロイテナント、カランノ著ス所ニシテ天保十四年癸卯宇田川氏ノ譯解ニナルモノナリ。火藥篇ヨリ海岸攻守篇ニ至ル廿八卷ヲ收ム。譯出ニ忠實ナルコトソノ用語ニ於テ最モ歴然タリ。ハンデルメウレン海上砲術書ノ右ニ出ブルノ完本ニシテ以テ海軍操習(ヒータヒシール)トシテ珍重セラル、モノナリ。

四九 中嶋流砲術稽古之卷

寫本 一帙廿二冊

同 文庫藏

名流中嶋氏ノ秘傳書ニシテ收ムルトコロ畫之相圖、由來之卷、鑿鍊之卷、傳記、町間之卷、明星之卷ソノ他十數篇ヲ以テス。各卷ニ跋ヲ附ス。曰ク、右此畫卷ハ建爲秘事、多年無解意執心不淺故令授與。努力不可有廢相他見者也。

文政十丁亥年九月吉日  
觀世兵次郎殿  
以テ秘籍ノ真價ヲ想察スルニ足ラム。

五〇 紅毛火術錄

寫本 二冊

同 文庫藏

雲陽平戸ノ人古河氏異人蘭(イトルカラス)ヨリ木炮、火瓶ニ就テ攻城碎敵ノ秘術ヲ傳授セララル。ソノ派ヒムトシテ僅カニ小澤氏ニヨリ傳承セララル。江戸在住結川氏久シク之ヲ望ムトコロ小澤氏側々下向ノ佳期ニ會シテ敢テ請フヲ得タリ。武備ノ一助トシテ子孫ニ胎ストコロノモノ之レナリ。時ニ享保丁未冬ノ交ナリ。モト高崎侯臣富岡光賢ノ收藏ナリシモノヲ文化戊辰孟秋之ヲ贈寫セララルト云。

五一 水軍操砲鑑

寫本 三冊

同 文庫藏

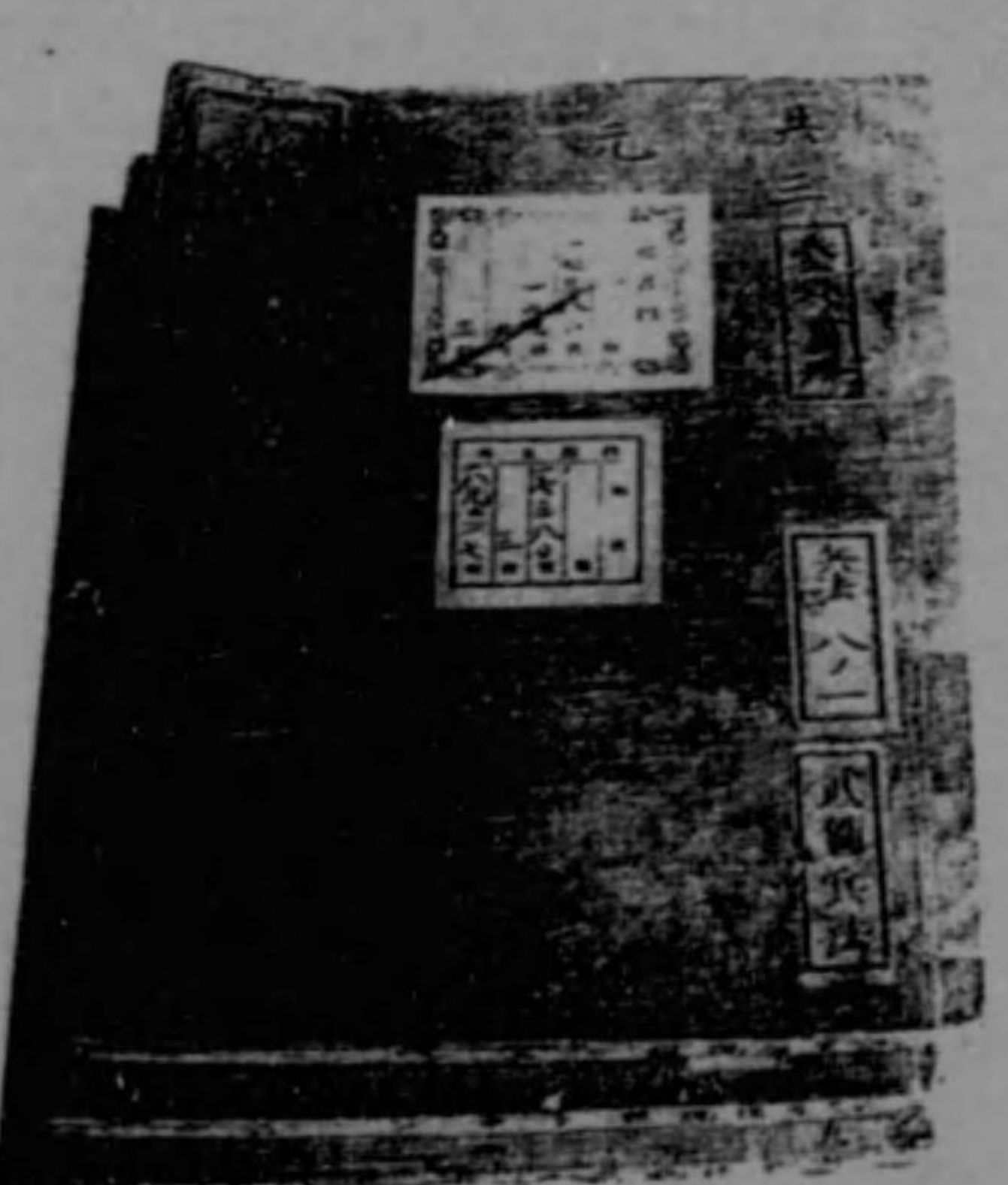
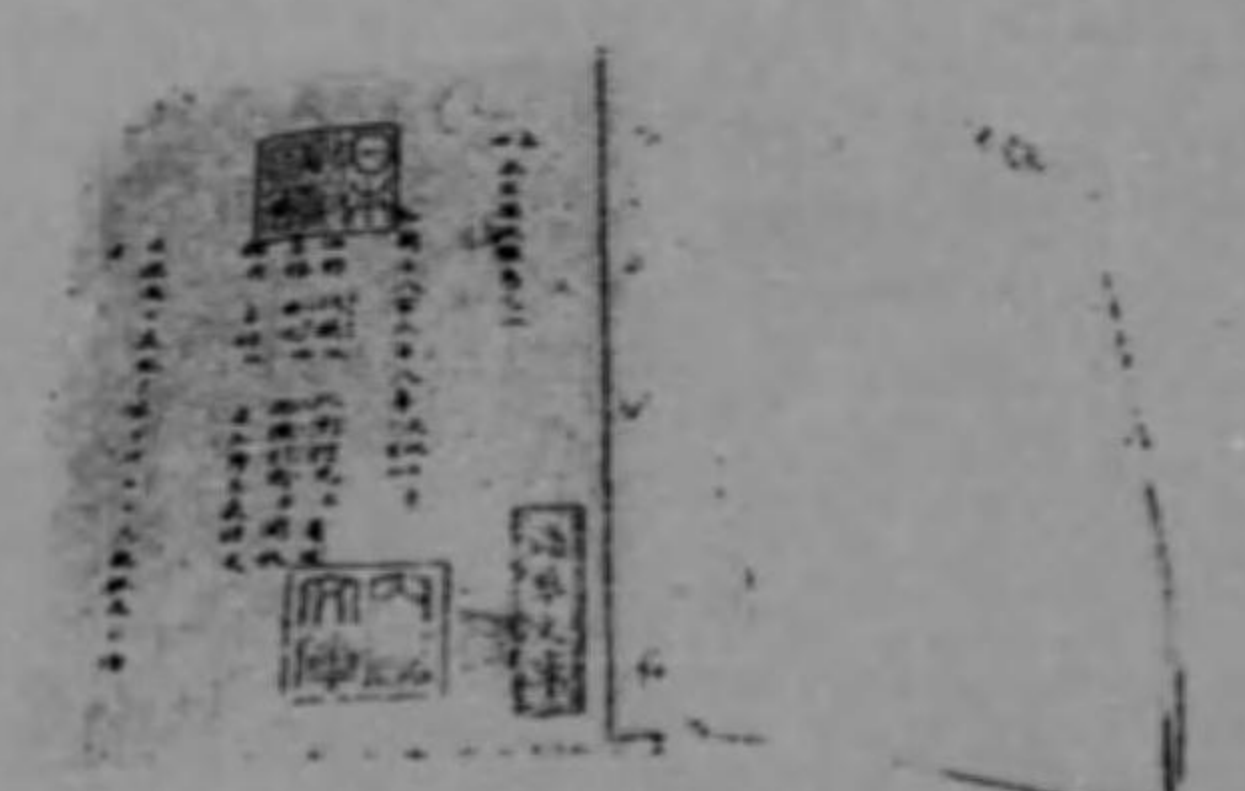
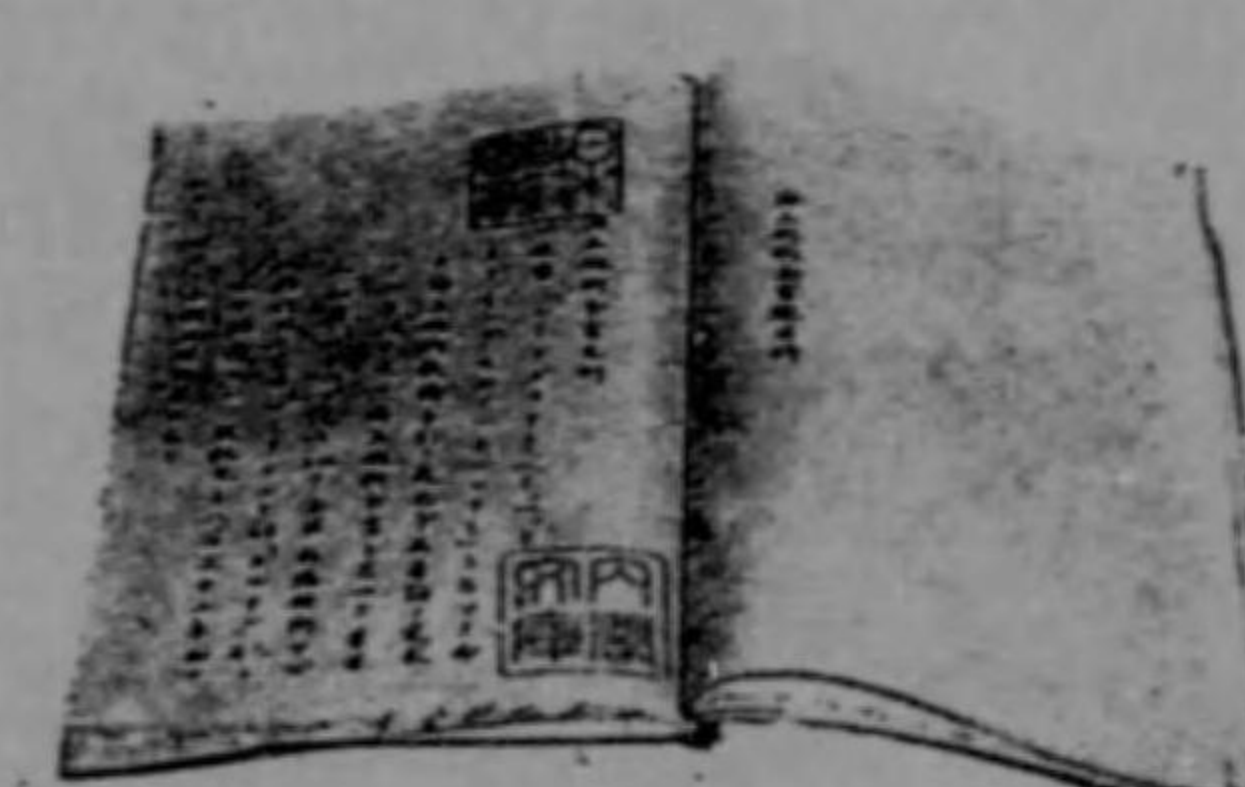
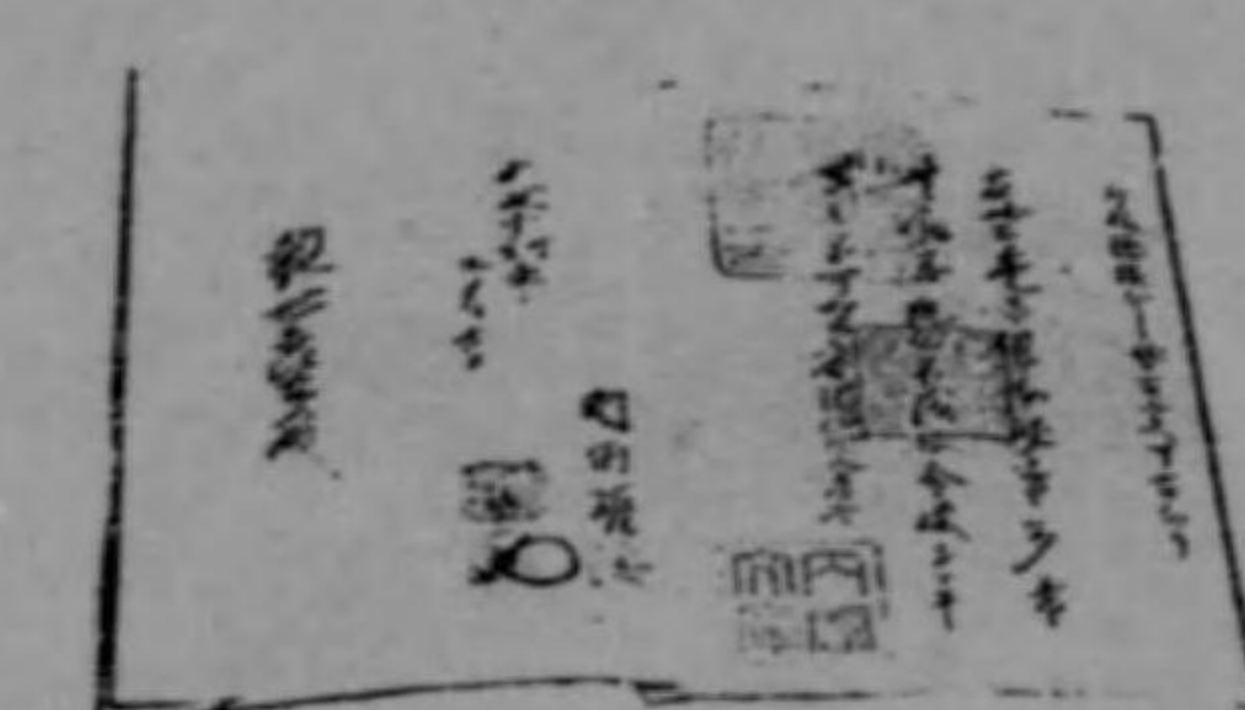
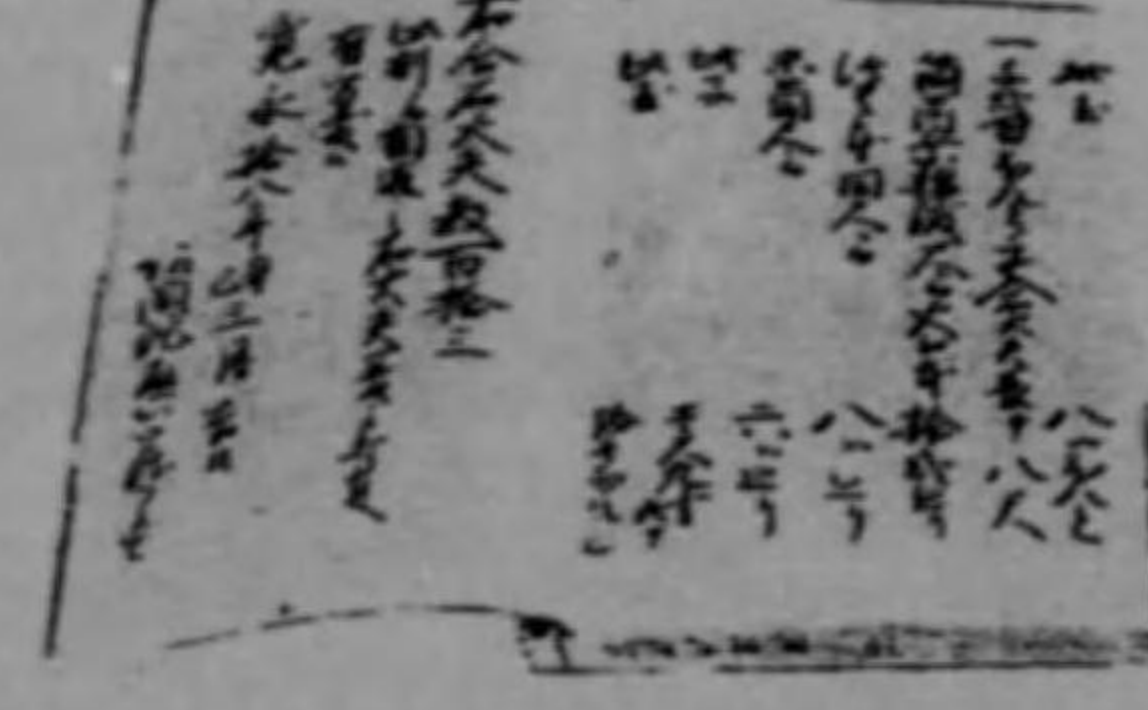
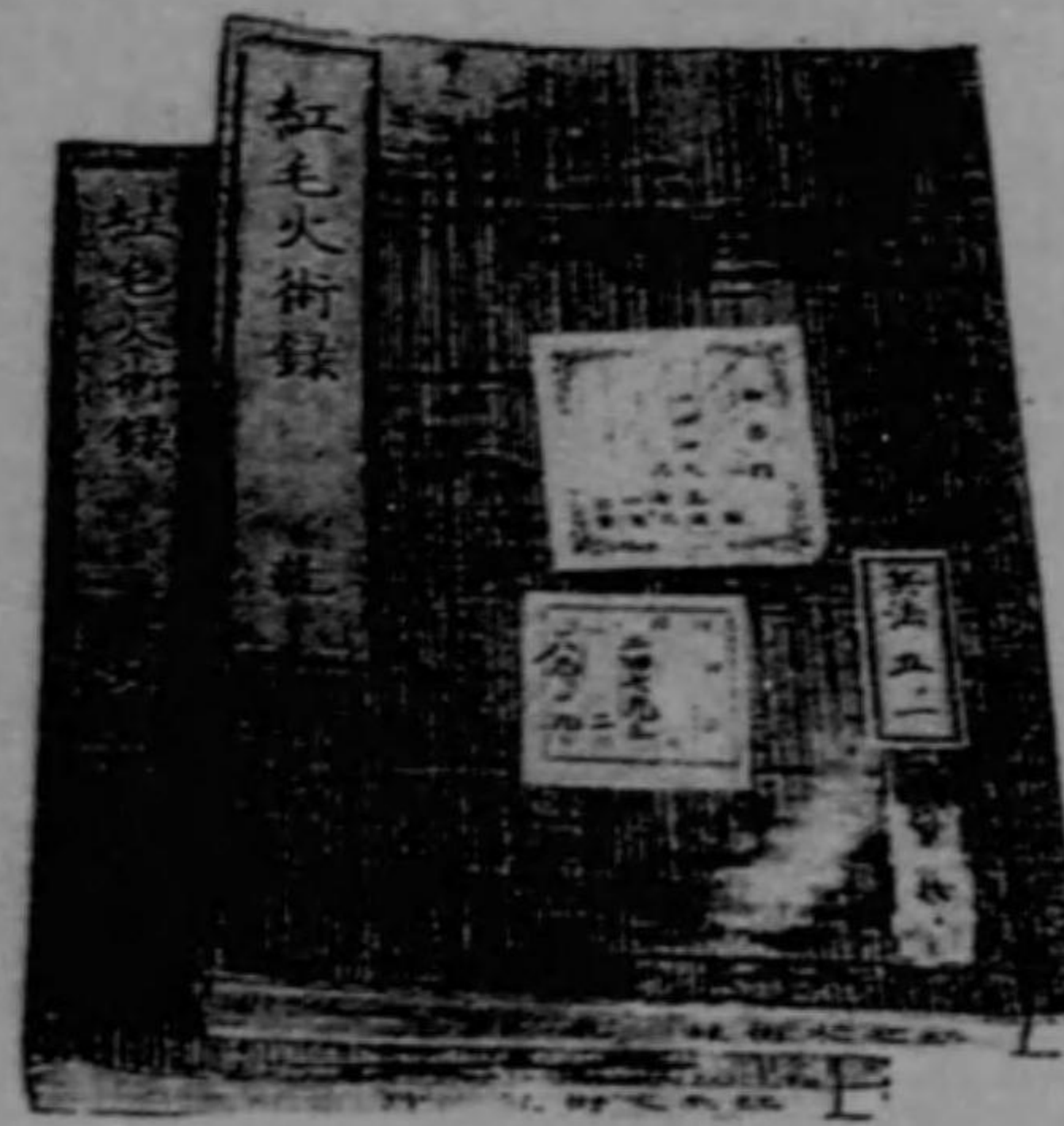
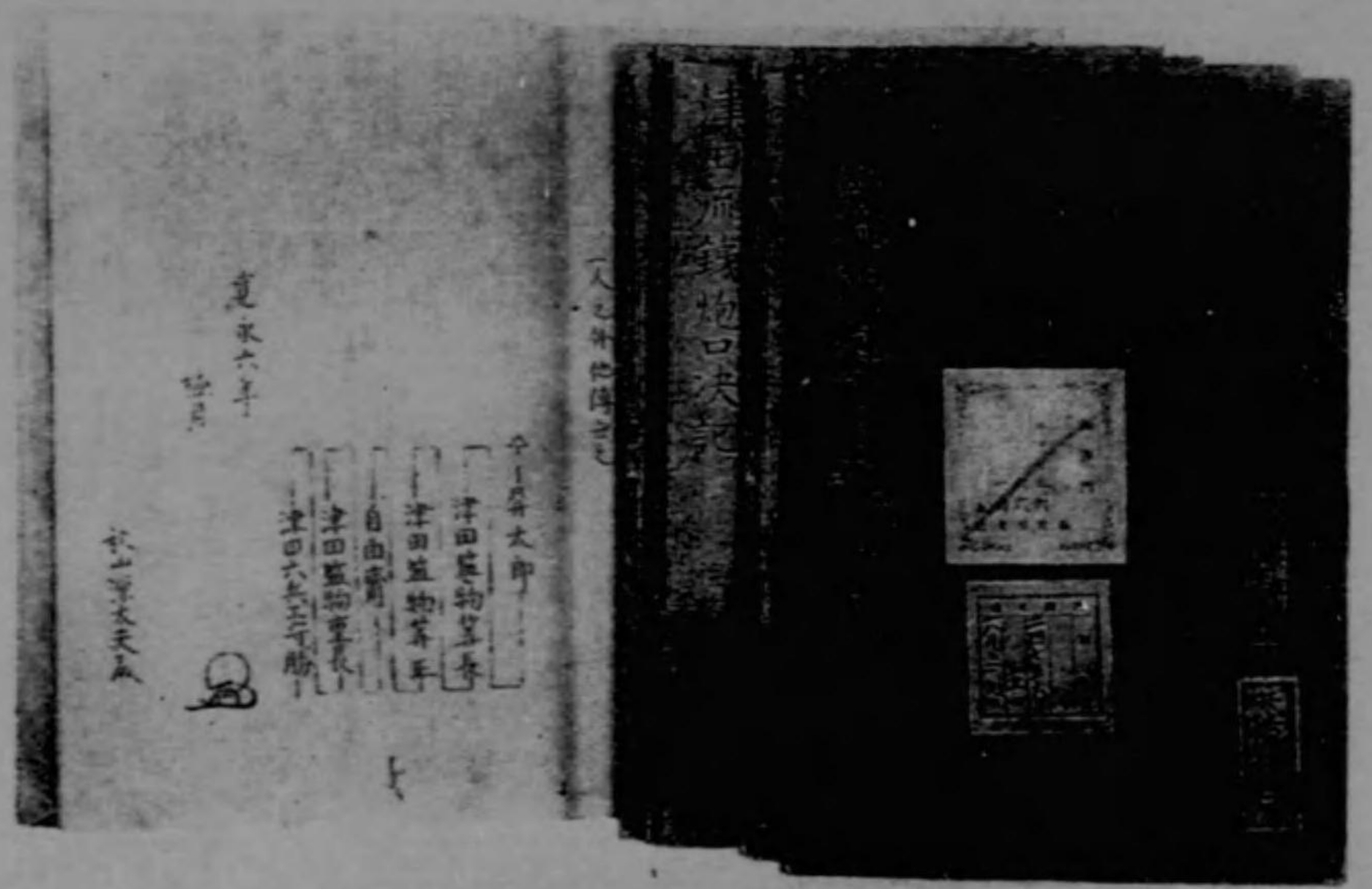
泰西ニ於ケル水軍砲術ノ教本ニシテ、西紀一八二八年和蘭海將以攝比喇阿兒ノ原著ニシテ譯司名村元義ニヨリ譯解セラレタルモノナリ。主トシテ大砲及ビ其砲ヲ取扱フ人数及ビ備方短火砲藥合之部並兩船線ニテ左右放テ替ル業等ニシテ下知ニ關シテハ特ニ懇切ニ指致セラレタリ。淺草文庫ノ收藏ニカ、リシモノナルコトヲ附記ス。

五二 東西火攻辨

寫本 五冊

同 文庫藏

佐藤信淵ノ述ブルトコロニシテ弘化四丁未ノ跋ヲ窺ハル。水戰秘訣兵法一家言ト俱ニ淺草文庫ニ收藏セラレシモノナリ。西洋ニ於ケル大砲東洋ニ於ケル小銃ノ術ヲ彼我對照シテ長短得失ヲ載シ實證明證利便捷徑ヲ主トシタルモノニシテ大砲四種、小銃四種、彈丸類並ニ火藥製造明辨本邦捧火箭之法ヲ收録シ之ニ附スルニ異風炮異樣船製作記ヲ以テシ懇切周到ニ致示スルトコロアルナリ。





五三 大筒鑄之圖

寫本一冊 內插畫三枚

東京市 帝國圖書館藏

弘化四年中洲崎御備場ニテ大筒ヲ鑄造セシ始終ヲ描キタルモノニシテ、當時ニ於ケル大砲製造ノ狀況ヲ窺知スル好資料ナリ。茲ニハソノ中三場面ノミヲ示シタルモ、原書ニハ尙數場面ノ挿繪アリ。

五四 東京灣内砲臺設計圖

一軸

山形縣 石垣吉六郎氏藏

橫濱開港ノ恩人鐵道助佐藤政義ガ圖スルトコロノ東京灣砲臺ノ設計圖ニシテ、砲臺設計圖トシテハ最モ古キモノ、一ナリ。因ニ佐藤政義ハ勝安房ノ塾頭ナリシガ、豫テ測量ノ術ニ長ジ、神奈川開港ヲ變ジテ橫濱ヲ開港場タラシメタル恩人ナリ。後官ヲ拜シテ鐵道助トナリテ京濱鐵道ヲ敷設セリ。

五五 薩琉軍鑑寫本四冊

內閣文庫藏

慶長十四年家康ノ命島津義弘ニ下リ琉球討伐ノ舉ニ出ブルコト、ナリヌ。卷首ニハ島津氏由緒ノ事ヲ載ス。尋テ島津三位宰相義弘琉球征伐ノ命ヲ蒙ル事ニ端ヲ發シ、琉球國都攻諸官人降參ノ事ヲ以テ結ブ。附スルニ嶋津家分限證書上ノ寫ヲ以テス。時ニ享保十七年正月ナリ。本書ハ明和三年ノ再寫ナリ。モト西莊文庫ニ收藏セラル。征服ノ凱歌ヲアゲンノ使命ヲ全フスルヤ、島津氏ノ偉名一躍海内ヲ壓倒スルニ至ル。

五六 能島家傳法

寫本一冊

內閣文庫藏

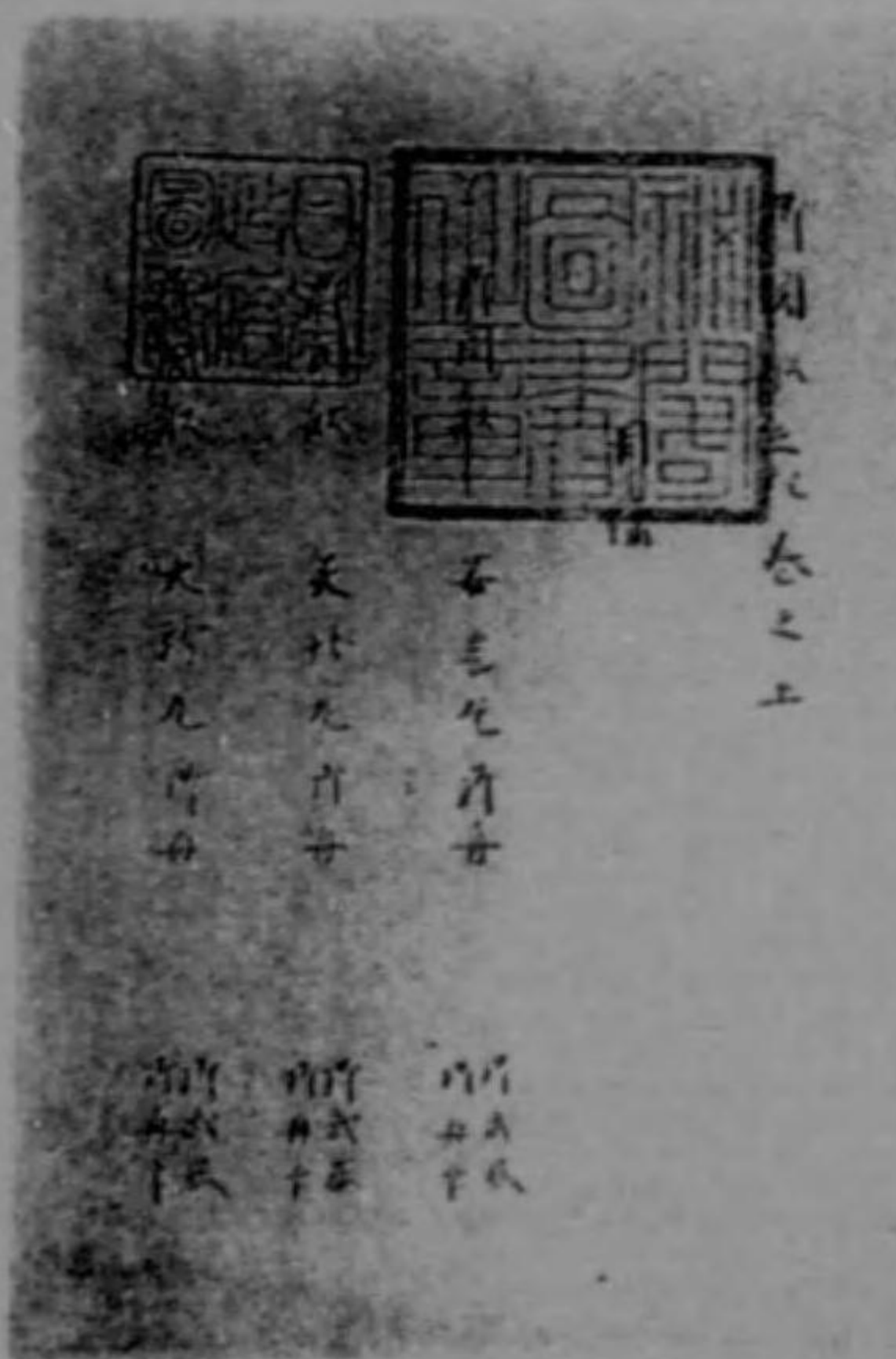
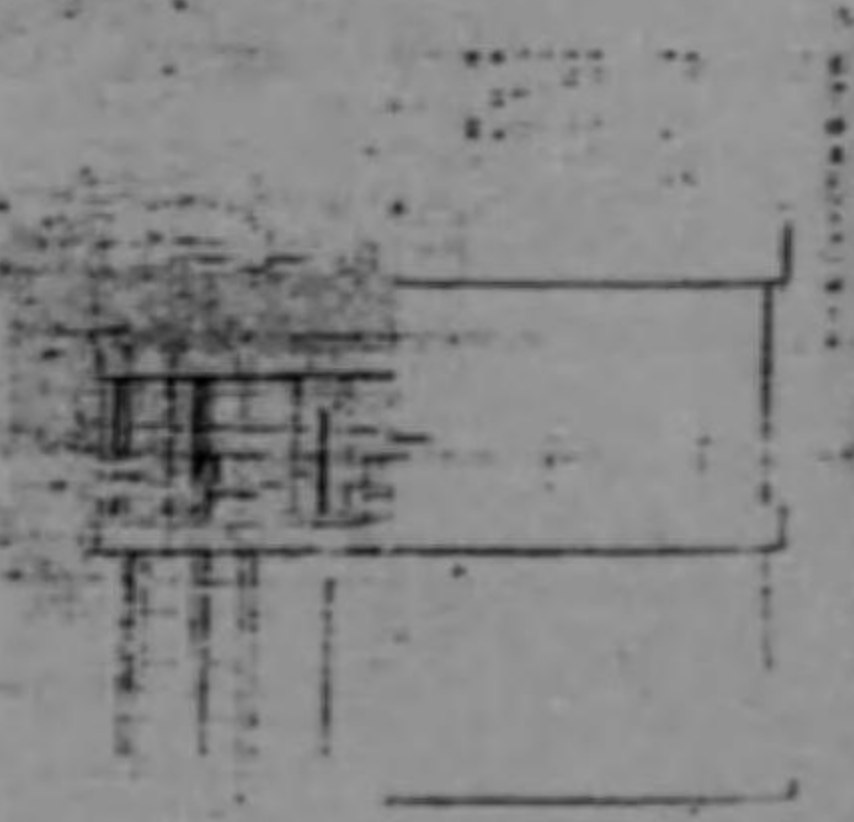
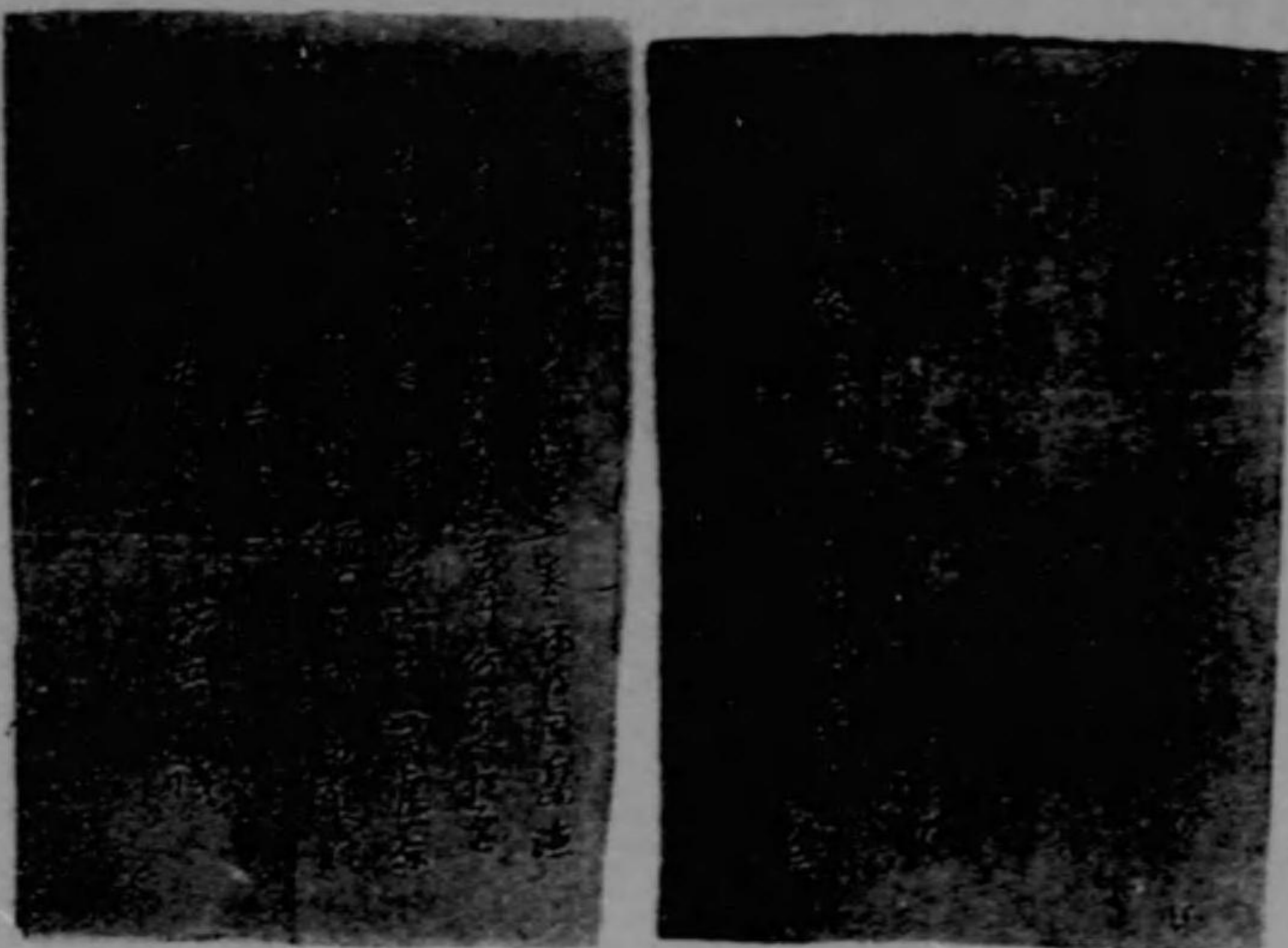
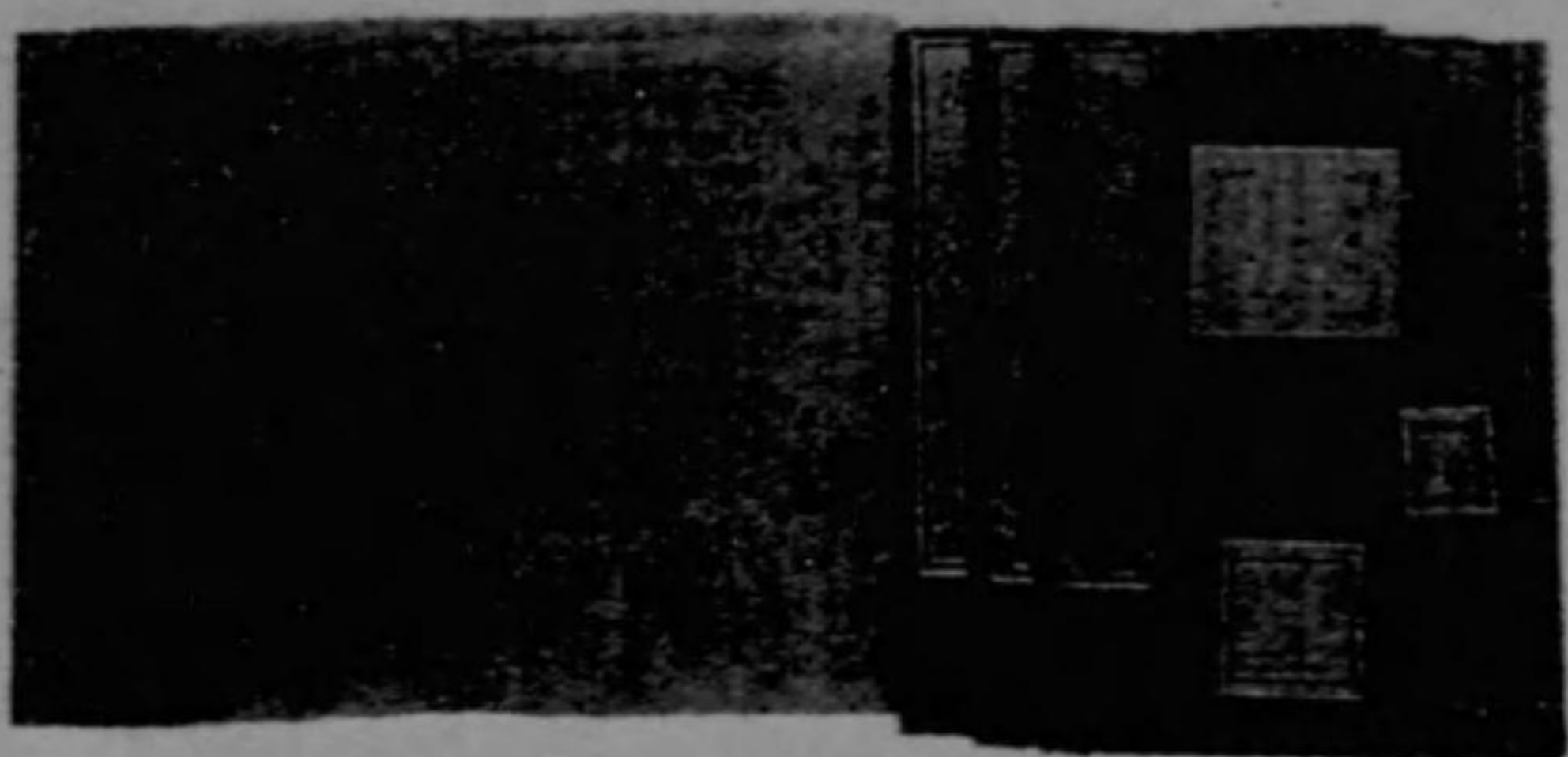
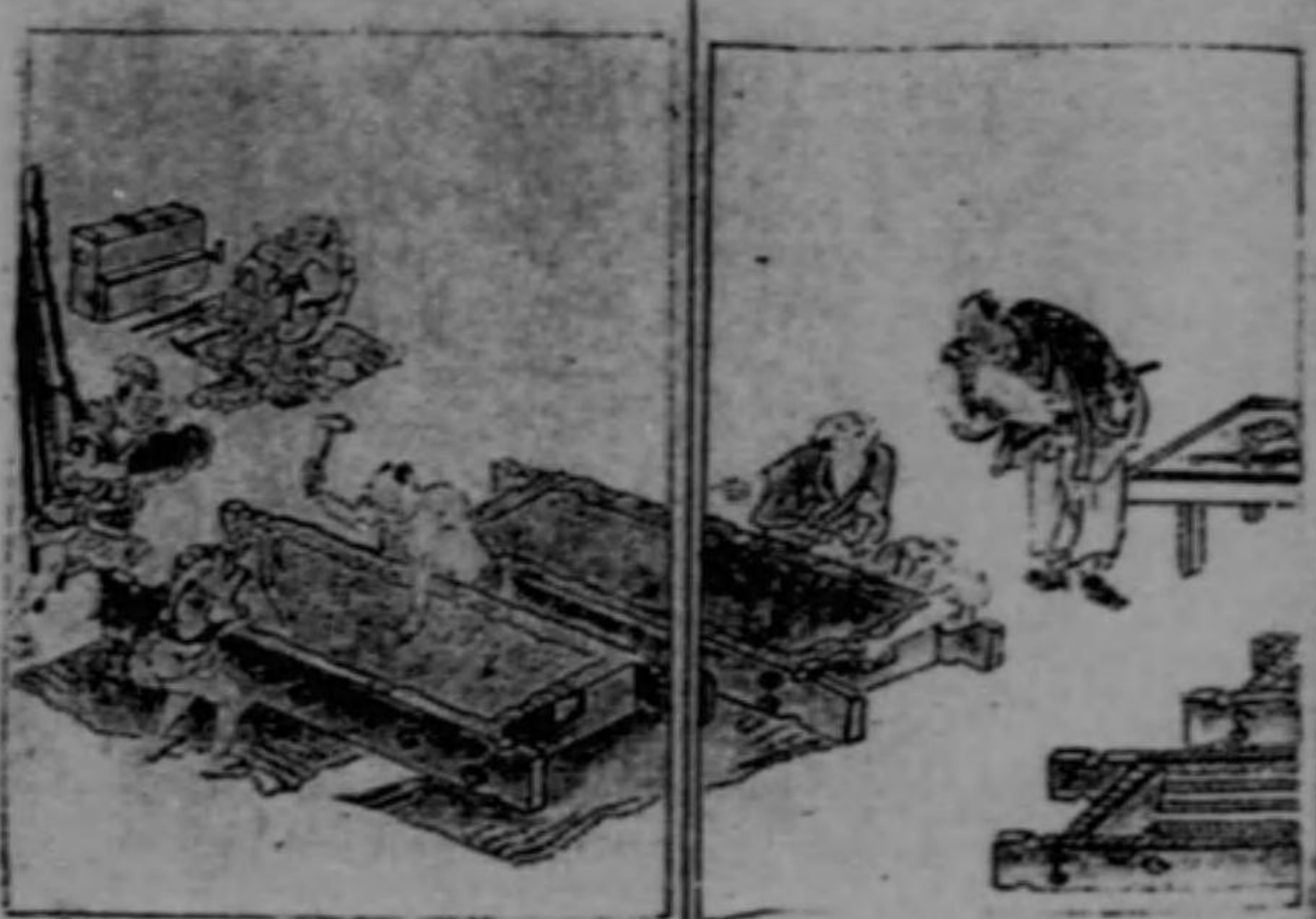
一ニ能島家傳兵源法海軍ト題セラル、モノニシテ、能島氏水軍秘傳五卷ヲ收ム。跋ニ寛政丁巳夏六月菅野師(茶山)ノ識アルヲ以テ珍觀トセラル。ソノ所載ノ來由ヲ窺ハムニ和學講談所、書籍館、淺草文庫ノ藏印ヲ以テス。ソノ識ニ曰ク  
能島氏水軍秘傳五卷、備後因島漁家數世所弄、家姪萬年介反人松口、執供而磨之、吁嗟呼今時太平無虞、余家隱處安貧、此書將何用耶、我願終無用所又無用時。  
茶山ニ於テハ用所時ナシト雖水軍源法ハ首尾不朽金玉ノ文字ナラザルハナシ。

五七 御關船御建物雛形

寫本一冊

內閣文庫藏

本書ハ秘閣ノ藏書ニシテ安宅九ツノ他ノ徳川將軍御關船並大川御座御船ニ至ルマデノ御建物ニ關シ圖示セラレタルモノニシテ簡明ナル説述ナリ。  
多門繪書類ト看做サルベキモノハコノ表題下ニ向井將監、大橋與惣衛門、上村猪十郎、橋本喜平太、小笠原新九郎ノ連署ヲ以テセラル。





五八 海軍御用留 寫本 一冊

内閣文庫藏

多門橋ノ書類ニシテ慶應三卯年十二月ヨリ慶應四年三月ニ至ル覺書ヲ輯録シタルモノナリ。主トシテ人事ヲ載スト雖モ、幕末ニ於ケル海軍日誌トモ稱スベク、中ニハ官軍下向將軍恭順ノタメ横須賀造船所ノ建造中止方ヲ首長並公使ニ傳達シタルノ記見ヘタリ。幕末海軍史研究ノ根本資料トシテ推ナルベキ第一ノモノナリ。海軍奉行軍艦頭ノ官職アルニ留意スベキナリ。

五九 御軍艦操練所何等之留

寫本 一冊

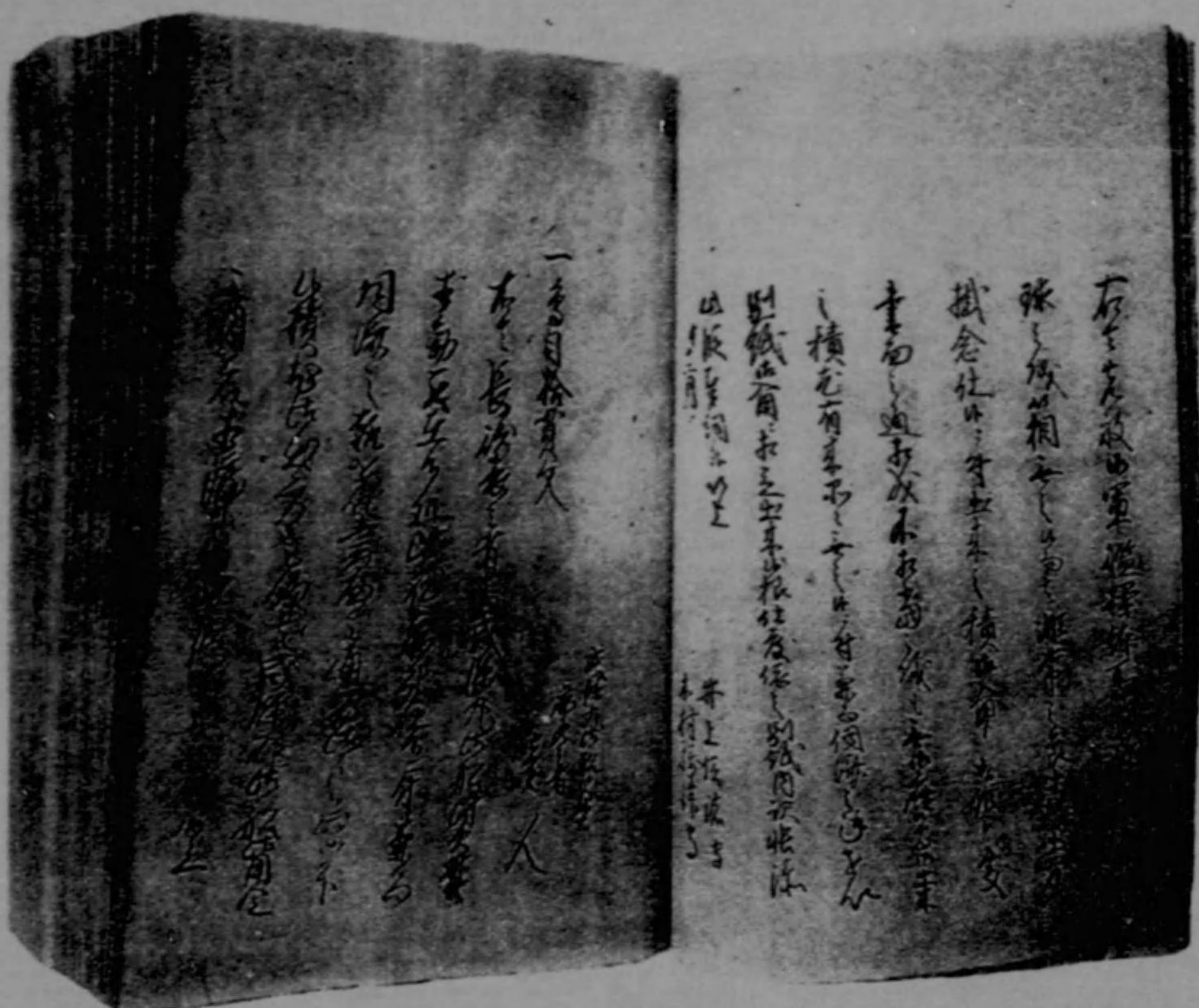
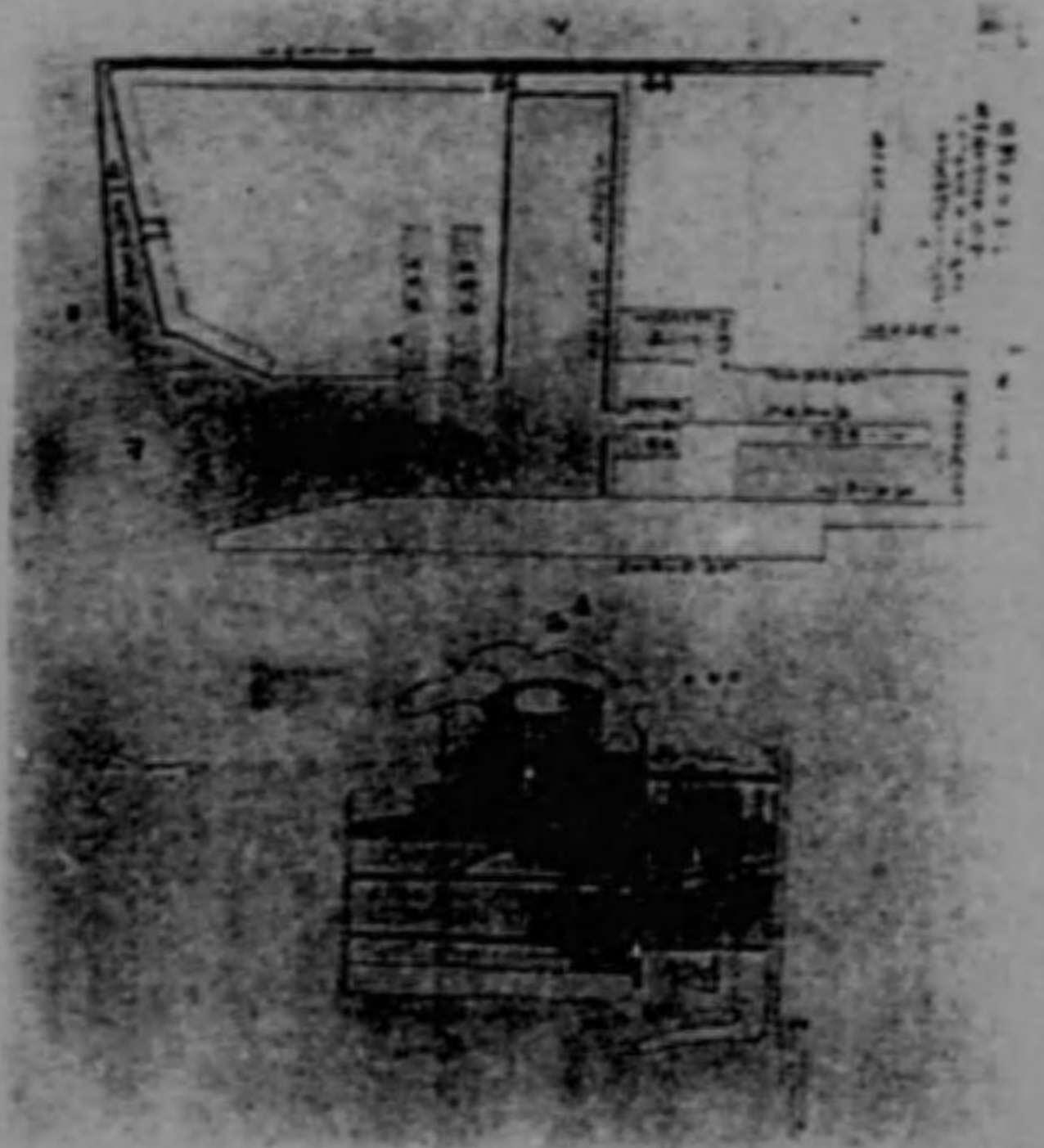
内閣文庫藏

多門橋書類ノ一ナリ。万延元年ヨリ元治元年ニ至ル公文ノ雜纂ニシテ造船注文並修理方、海軍御書籍購入方蝦夷地産物仕入方、ソノ他長崎、大阪表ノコト、兵學傳習ノタメ外國へ教授方派遣申請ナドノ儀モ現ハレ、木村鎮守井上信濃守御勅上奉行御吟味役御勅上方箱館奉行ナド記ナレタリ。御軍艦操練所ハ文久二年ノ頃神戸ニ存置シ勝安房ノ宰スル所ニシテ、阪本龍馬ナドモ、ニ撰海ニ關シ理想の大計畫ヲ企テタリト云。海軍局ハコレガ後身ナリ。

六〇 神戸海軍操練所地割圖

神戸市 桃木武平氏藏

東京帝國大學史料編纂掛藏本ヨリ撮影





六一 木村攝津守及威臨丸

一軸

東京市 木村浩吉氏藏

木村攝津守名ハ芥舟、楢室ト號ス。天保元年江戸ニ生ル。幼兒ヨリ切経研學、安政三年長崎海軍傳習所ニ奉仕シ、同六年新設ノ御軍艦奉行トナリ、高延元年米國軍艦ニテ我邦ヨリ米國ヘ差遣ナル、使節ノ海路警衛ト航海練習ノ爲ニ威臨丸ニ艦長トシテ衆港ニ赴ク。歸來一度官ヲ辭シタルモ再ビ召ナレテ大阪ニ於テ御軍艦奉行ノ職ヲ執ル。明治三十四年歿。

威臨丸ハ西曆千八百五十六年和蘭國ニ於テ製造、安政四年九月長崎ニ於テ受領シタル百馬力ノ蒸氣帆船ニシテ長サ二十七間半、幅四間ノ小形軍艦ナリ。安政六年十二月二十四日米國派遣ノ命ヲ蒙リ高延元年正月十九日(西曆一八六〇年二月十日)浦賀港ヲ出帆シ連日天候險惡、幾多ノ辛酸ヲ嘗メ二月二十六日米國桑港ニ到着ス。三月十九日同港ヲ出發シ四月四日ホノル、港ニ投錨、五月五日遂ナク浦賀港ニ歸着ス。コレ正式ニ我國船ニシテ米國ヘ渡リタル最初ナリ。

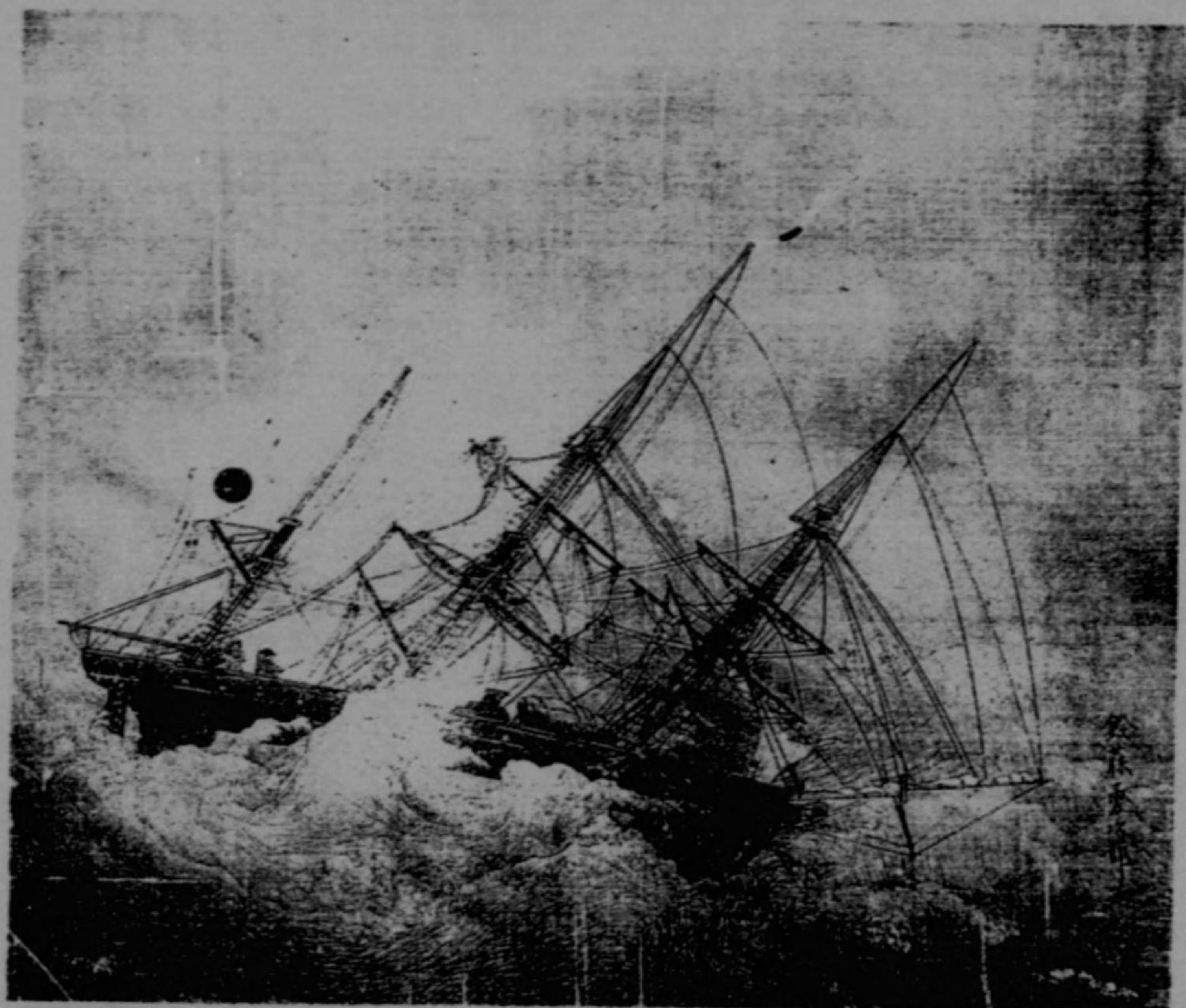
六二 亞行日記

横帳 一冊

尾道市 野田茂作氏藏

長尾幸作(後名ヲ土居笑吾ト改ム)ガ木村攝津守ニ附隨シ威臨丸ニ乘リテ米國ヘ渡リタルトキノ日記ナリ。





Handwritten Japanese text, likely a diary or journal entry, written in vertical columns. The text is dense and covers the width of the page.

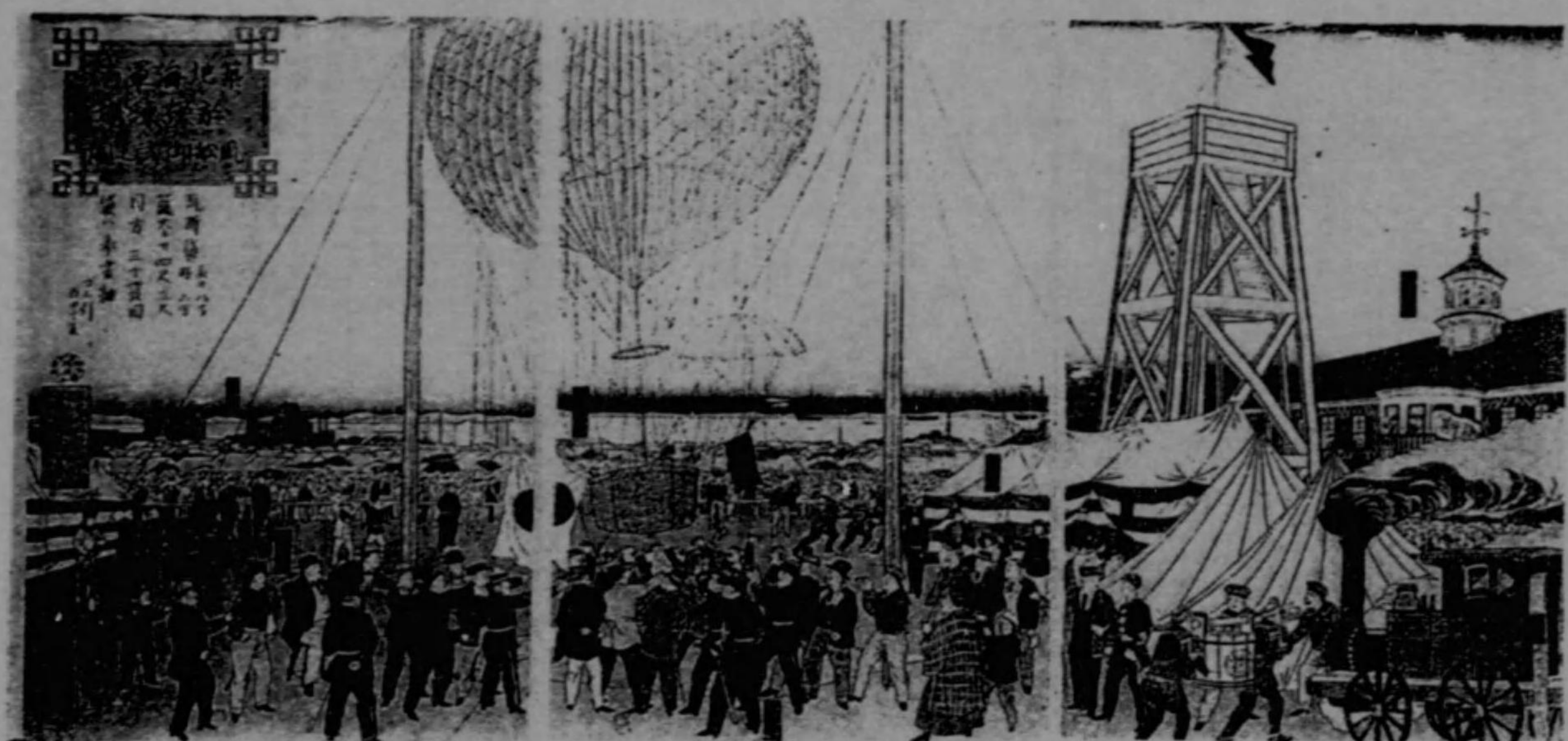




六三 築地海軍兵學寮圖

明治四年一覽帝國雜畫 版畫 一葉

東京市 石井研堂氏藏



六四 築地海軍省於操練場  
風船御試之圖

明治十年二代廣重 版畫 一葉

同 氏藏



六五 築地海軍省圖

同 氏藏

明治七年版「道しるべ東都之部」トイフ  
小冊子ノ中ニ見ヘタル挿繪ナリ。



六六 慶應頃ノ錦繪帖

版書一帖

東京市 帝國圖書館藏

原本ハ諸種ノ錦繪ヲ集メテ一帖トナシタルモノナリ。コ、ニ其ノ中ヨリ四種ヲ選ビテ

登載ス。

(一) 横濱鐘宅之圖 貞秀畫 文久元年版

鐘宅ハ和蘭語ノ"Koudo"ニシテ日曜ノコトナリ。日曜日ニ於ケル外人ノ行樂ヲ表  
ハシタルモノナリ。

佛蘭西把里須府 芳虎畫

(二) 大井川運臺渡圖 貞秀芳宗合作

家茂將軍ノ上落ヲ寫セシモノナリト云フ。

(四) 頼朝公參内之圖 廣重畫















六九 諸葛孔明八陣圖

永藏寫本一卷

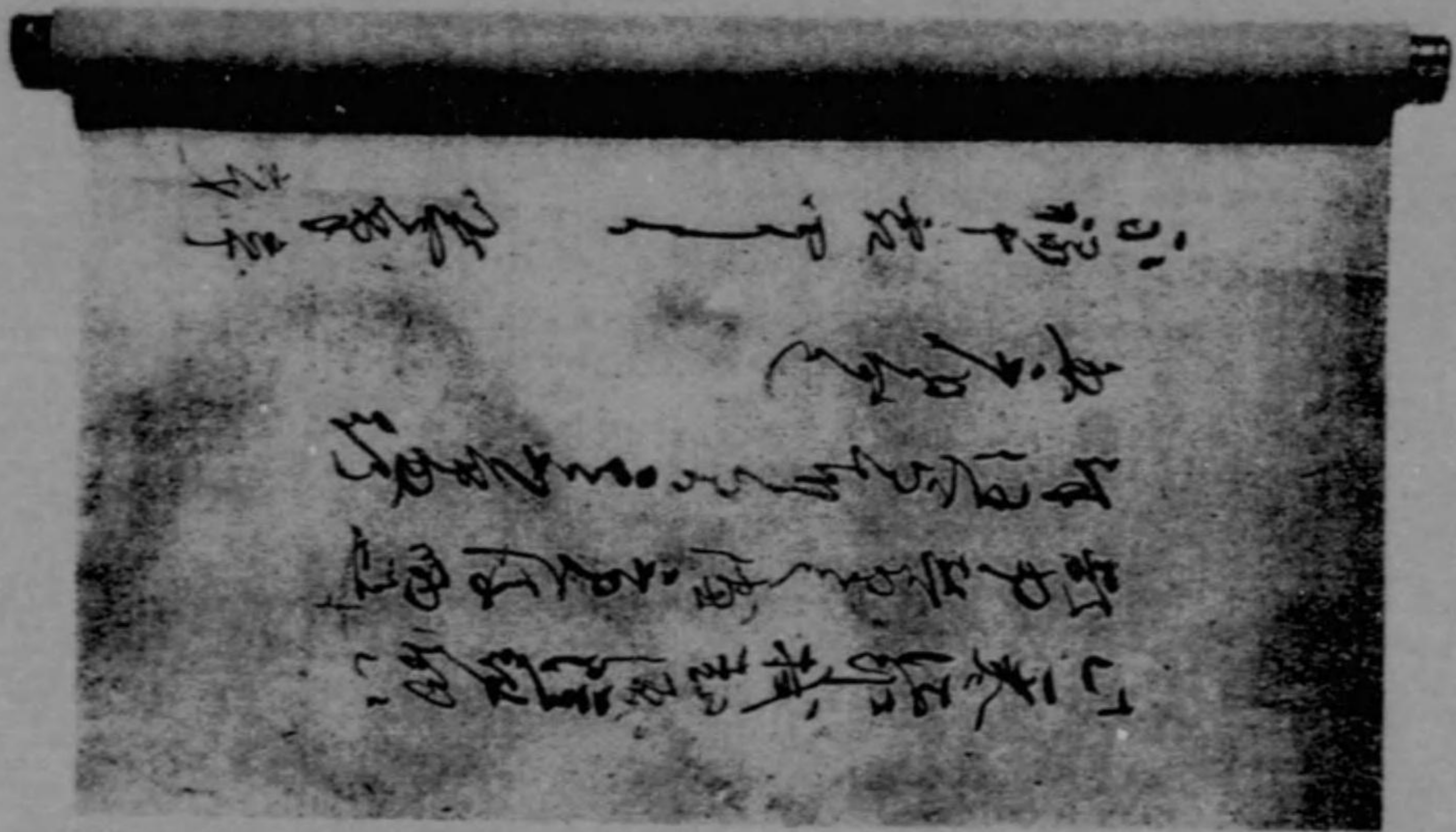
内閣文庫藏

古兵法ノ一ニシテ顯著ナルモノ、八卦トノ關係ヲ詳述シ解説シタルモノナリ。

奧書ニ曰ク、此一卷依仰拭老淚凝酌候爲懸望之儘不見後嗣者也殊任寫本候間其不審行毎不明而已

永藏十霜四月 吟雲 筆 六十六才

徳川時代ニ於ケル手澤ヲ窺ヘレ讀後ノ振假名ニ意ヲ拂フベシ。





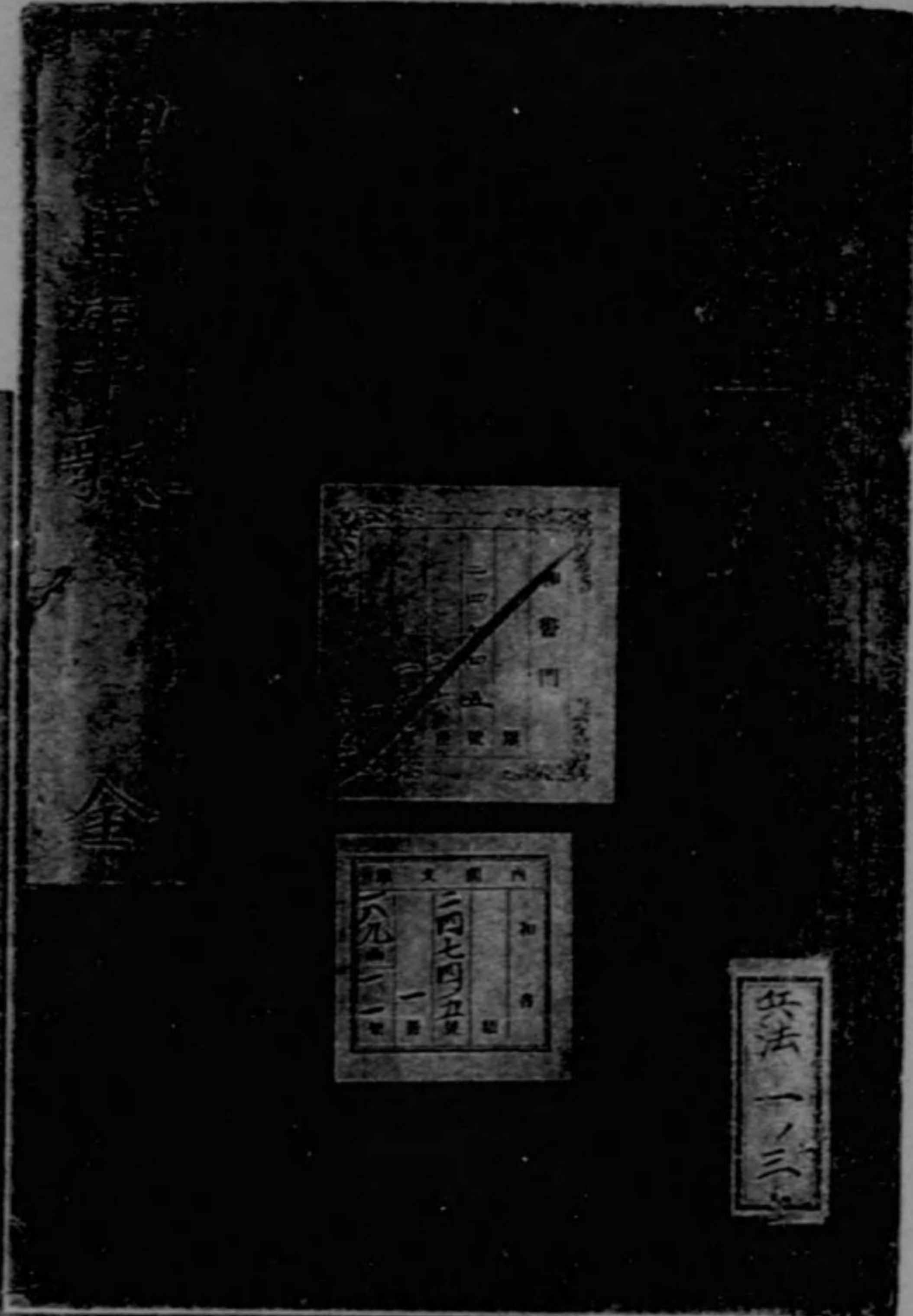
七〇 佃田軍歌 一冊

内閣文庫藏

福島左衛門大夫正則ノ臣、佃田又右衛門ノ作ルトコロニシテ、名将勇士物語ヲ聞キ自ラモ諸國ヲ遍歴シテ名哲ノ話談ニ接シ、ヨクコレヲ觀示シ其ノ短ヲ巧ミニ從ヘタルモノニシテ以テ、世道人心ヲ戒ムルトコロアルナリ。  
家康ヲ引テ曰ク

敵よせば大事ノ心得テ  
合戦をむねに當て近よれ

徂徠先生ノ「古之功者ニ聞ケ」トノ説示ニ據リ、安永九子年七月篠山光官ノ筆スルトコロナリ。光官ハ徳川家治ノ臣ニシテ武藝ニ精進シテノ蘊奥ヲ極メ使槍ニ於テハ海内指ヲ屈ス。明和六年家ヲ起シ從兵帥ヨリ新軍ノ騎將ニ累進ス。



佃田軍歌  
浅草文庫  
我者押兵ノ心を得テ  
道ノリカ  
敵進ノカ  
我者押兵ノ心を得テ  
道ノリカ  
敵進ノカ

是並ろく身材を以て  
敵味方ハ人ノ心を以て  
是合人我ノ心ヲ以テ  
味方ニシテハ人ノ心を以テ  
我者ノ建場ニシテハ人ノ心を以テ  
敵者ノ建場ニシテハ人ノ心を以テ  
合戦ハ勝て中ノ勝と云フ  
是ハ二ノ事ニシテハ人ノ心を以テ  
是ハ二ノ事ニシテハ人ノ心を以テ  
是ハ二ノ事ニシテハ人ノ心を以テ  
是ハ二ノ事ニシテハ人ノ心を以テ



七一 軍書題說

林道春自筆本 一冊

內閣文庫藏

本書ハ茶標紙大本ニシテ紅雲蓋樹、林氏藏書、昌平阪學問所、淺草文庫ニヨツテ舊藏セラル。松平越州刺史源定綱公偶々軍書ノ篇題ヲ表出シテ道春子ニ之レガ説解ヲ求ム。即チ本書ヲ以テ答フルナリ。奥書ノ末尾ニ「元和五年孟秋廿五日羅浮道春謹書」トアリ。標紙裏ニ草稿ノ反古紙ヲ用ヒタルハ極メテ妙味アルモノト察セラル。



軍書題說  
松平越州刺史源定綱公偶々軍書ノ篇題ヲ表出シテ道春子ニ之レガ説解ヲ求ム。即チ本書ヲ以テ答フルナリ。奥書ノ末尾ニ「元和五年孟秋廿五日羅浮道春謹書」トアリ。標紙裏ニ草稿ノ反古紙ヲ用ヒタルハ極メテ妙味アルモノト察セラル。

松平越州刺史源定綱公表出軍書之篇題以請余為之說解兵者以非余之所知故辭之然請而不止於是考於經書粗為記誦問後議以已意未識謂大方之人何耶雖然只從臨事好謀之聖言而受開國承家之君命必其在刺史之功者耶豈小補也哉

元和五年孟秋廿五日羅浮道春謹書

此小之辭也世之無知者謂此先賢經書篇目又殊謂神妙門之說也世有靈表者相傳以為策謀之類也世有靈表者之說作且人君子備說其書而況靈表乎或復於其辭不足云乎  
古者三甲以軍為之庫中壽可而年純甲者二百年分甲各三百年後也乃用金銀錢與書

中貴對世以來始有經史之文按說甲中惟甲中起或恒在實惟千其者應時王惟或也先經究明乃固不依或或四二或或天下大定前大傳口神武而不報大共之不可容易用也見于經則此雖然不傳已而用之則何無其滿哉故軍中以星虎邊河為成則甲中固與之活承也其及我國時如禮之武平衣三屬之中尚文冠勳三曰之根人老武本朝者本半本神國未也其乃設人人武備的帶物皆



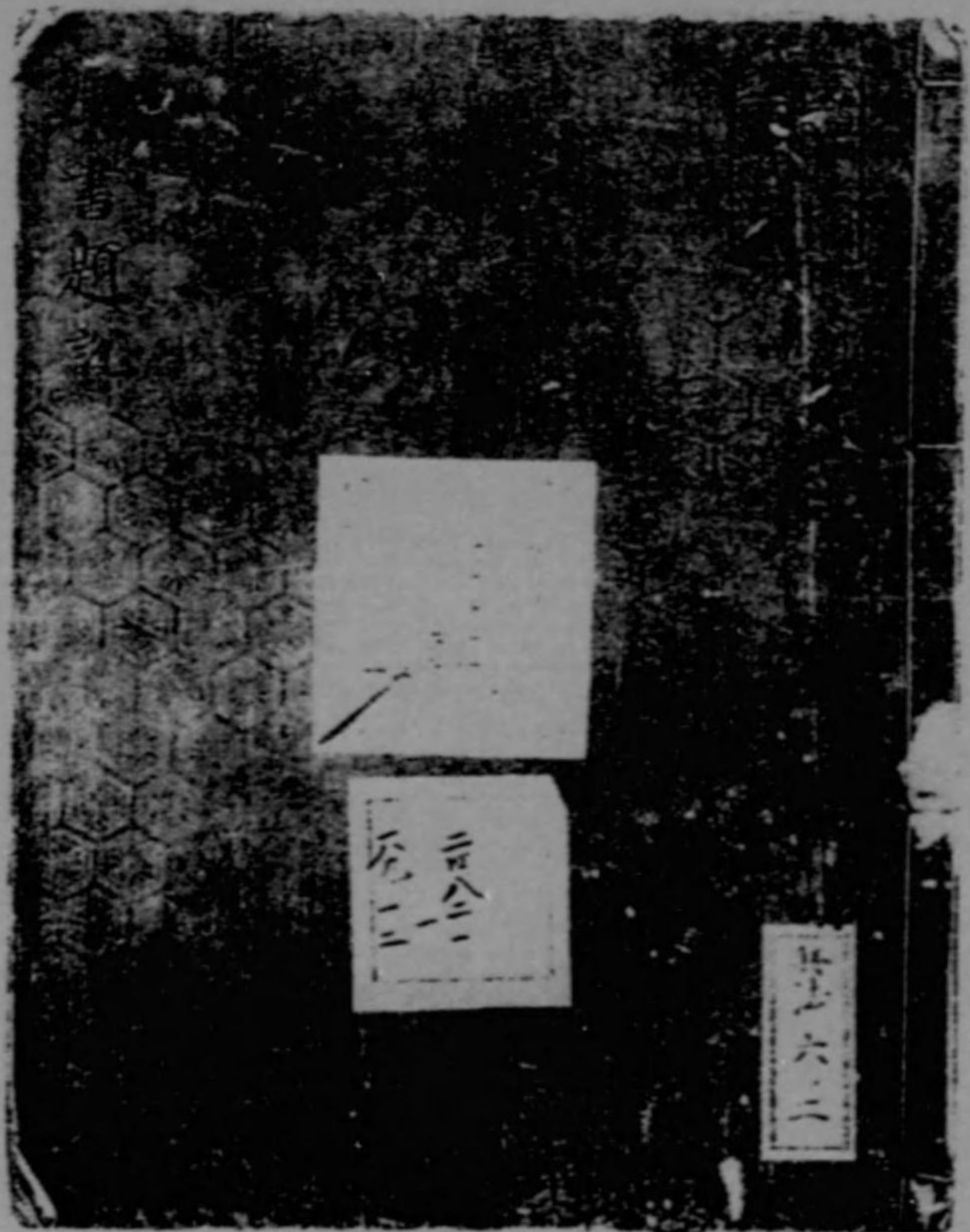
七一 軍書題說

林道春自筆本 一冊

内閣文庫藏

本書ハ茶軒紙大本、シテ紅雲湖樹、林氏藏書、昌平醫學問所、漢草文庫、ヨフテ貯蔵セラレル。

松平越州刺史源定綱公儀々軍書ノ篇題ヲ表出シテ道春子之レト説解ヲ求ム。即チ本書ヲ以テ答フルナリ。軍書ノ末尾ニ「元和五年孟秋廿五日羅浮道春謹言」トアリ。標紙裏ニ草稿ノ反古紙ヲ用ヒタルハ極メテ妙味アルモノト察セラレ。



軍書題說  
此書ハ松平越州刺史源定綱公儀々軍書ノ篇題ヲ表出シテ道春子之レト説解ヲ求ム。即チ本書ヲ以テ答フルナリ。軍書ノ末尾ニ「元和五年孟秋廿五日羅浮道春謹言」トアリ。標紙裏ニ草稿ノ反古紙ヲ用ヒタルハ極メテ妙味アルモノト察セラレ。

松平越州刺史源定綱公表出軍書之篇題以請余為之說解兵者以非余之所知故辭之然請而不止於是考於經書粗為記誦問後議以己意未識謂大方之人何耶雖然只從臨事好一謀之聖言而受開國承家之君一命必其在  
刺史之功者耶豈小補也哉

元和五年孟秋廿五日羅浮道春謹言

此書ハ松平越州刺史源定綱公儀々軍書ノ篇題ヲ表出シテ道春子之レト説解ヲ求ム。即チ本書ヲ以テ答フルナリ。軍書ノ末尾ニ「元和五年孟秋廿五日羅浮道春謹言」トアリ。標紙裏ニ草稿ノ反古紙ヲ用ヒタルハ極メテ妙味アルモノト察セラレ。

此書ハ松平越州刺史源定綱公儀々軍書ノ篇題ヲ表出シテ道春子之レト説解ヲ求ム。即チ本書ヲ以テ答フルナリ。軍書ノ末尾ニ「元和五年孟秋廿五日羅浮道春謹言」トアリ。標紙裏ニ草稿ノ反古紙ヲ用ヒタルハ極メテ妙味アルモノト察セラレ。



七二 孫吳摘語 林道春記 刊本一冊

内閣文庫藏

本書ハ小冊子綴青標紙ニシテ羅浮子ノ紅雲畫樹、林氏藏書、昌平版學問所、淺草文庫印存スルヲ以テソノ來由ヲ窺ヒ得ベシ。孫吳兵法ノ要諦ヲ簡明ニ説示シタルモノ蓋シ數本トシテハ兵法ノ原理ヲ會得スルニ適切ノモノナラム。跋ニ元和庚申孟冬日道春記ト印行セラル。

七三 倭漢軍談 林道春述 寫本二冊

同 文庫藏

茶標紙中本ナリ。林氏ノ藏書ニシテ忍岡ニ在リシ林氏ノ私塾タル弘文學士院、昌平版學問所、淺草文庫ノ藏印ヲ以テス。説テ所孫吳ノ兵法ヲ摘録シテソノ例證ヲ唐土ノ漢、本朝ノ源平以降ノ合戦ニ就テ舉タルモノナリ。林氏ノ手澤ニナルモノ稿本其ノ儘ナルヲ以テ殊ニ興味ヲ誘フモノアリ。内閣文庫ニハ同種ニシテ寛永板ヲ收藏ス。

七四 百戰奇法 林道春述 寫本一冊

同 文庫藏

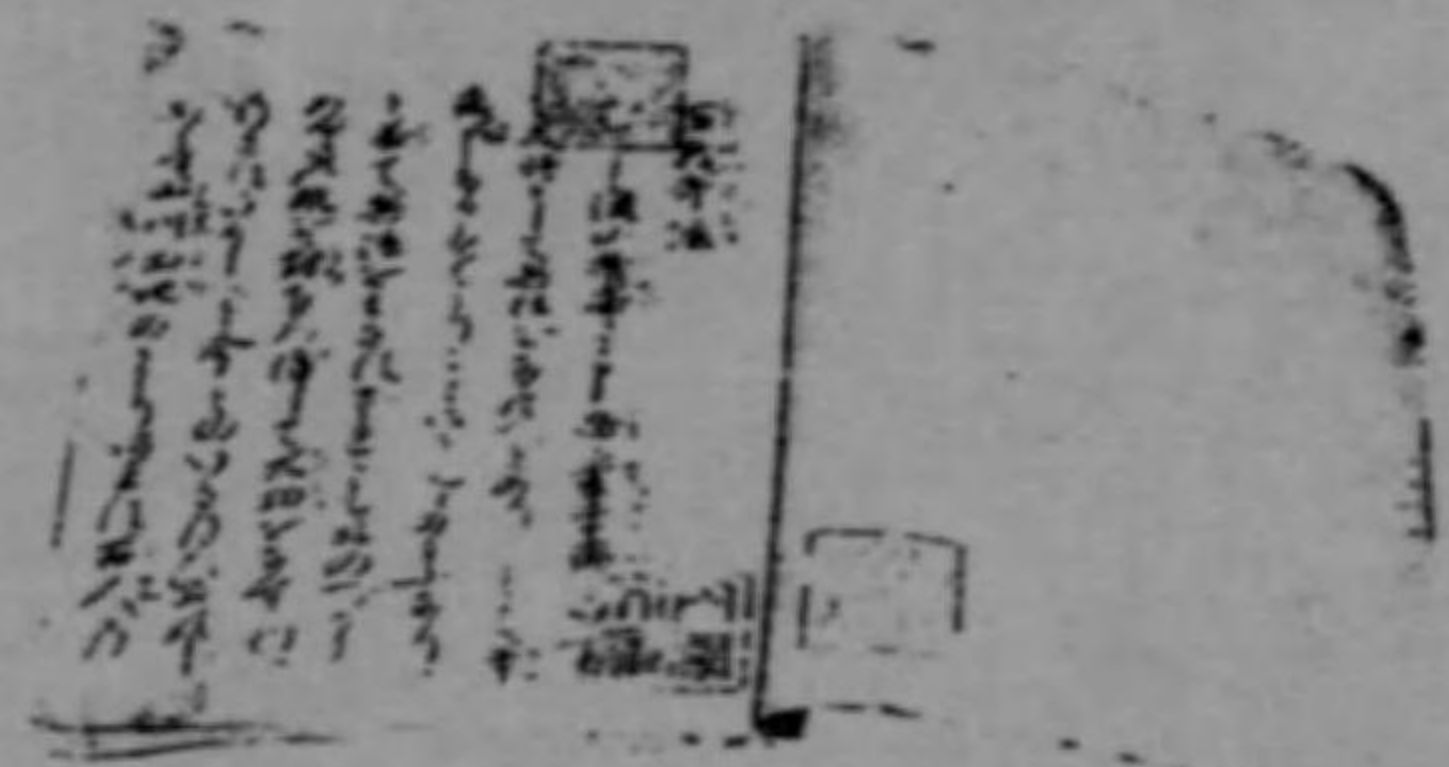
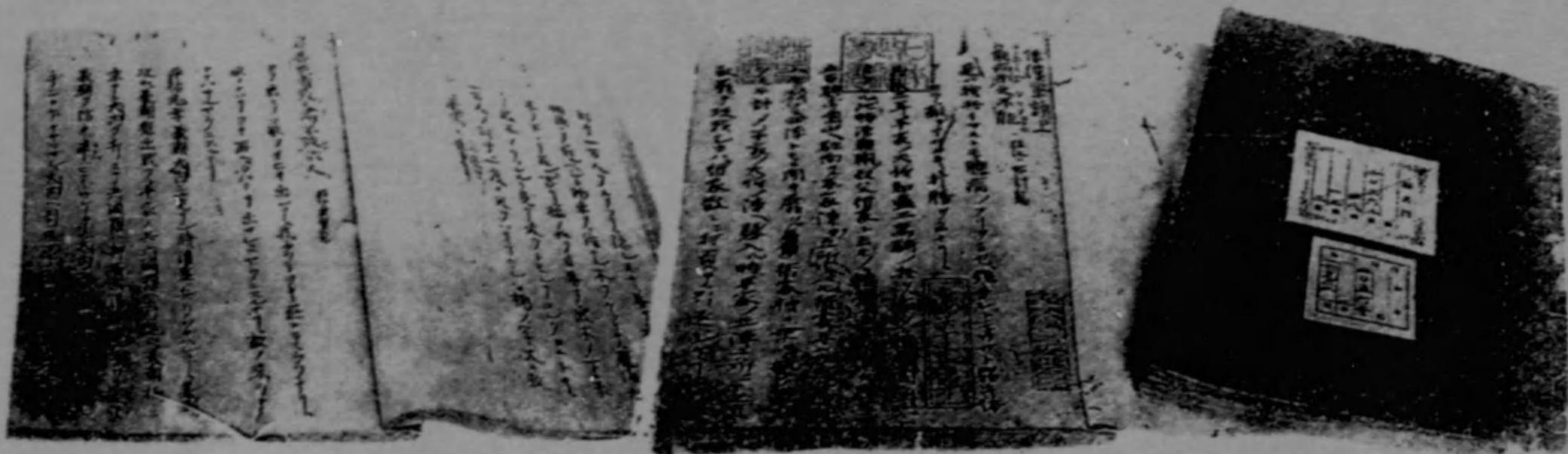
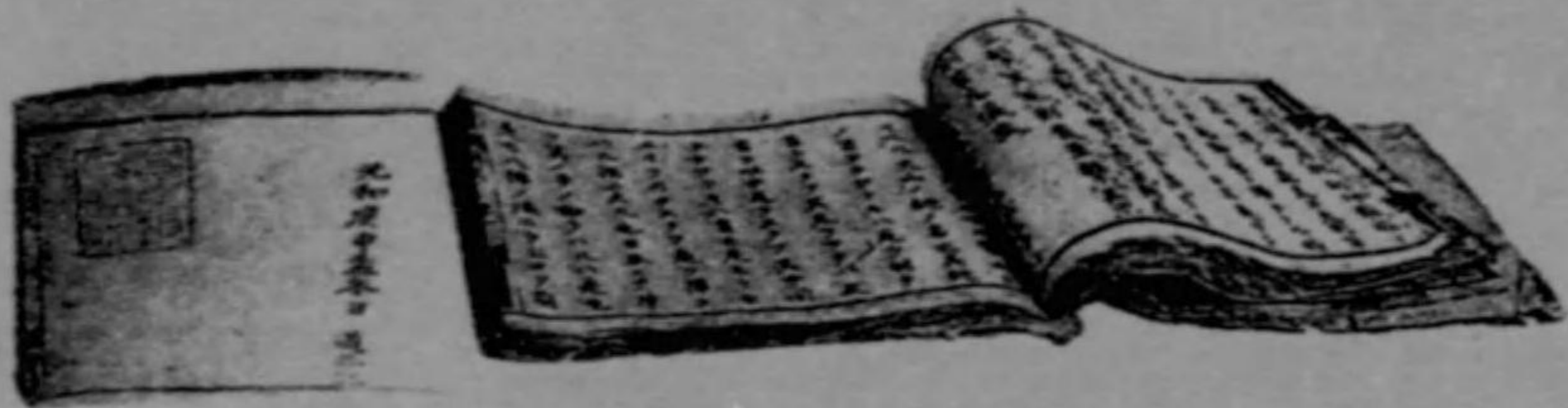
本書ハ秘閣ノ收藏ニ係リ揭標紙大本ニシテ紙質強韌、ソノ手蹟マタ典雅真ニ來歴本ヲ彷彿セシムルモノアリ。林氏ノ手澤ニナルモノトセラル。述ブル所ハ戦法百箇條ニシテ李氏ガ武徳全書、章氏ガ圖書編ニ載セラレタルモノナリ。即チ四書五經七書ノ内ヨリ摘録セラル、トコロナリ。

七五 兵法一家言 寫本七冊  
七六 水戰秘訣 寫本三冊

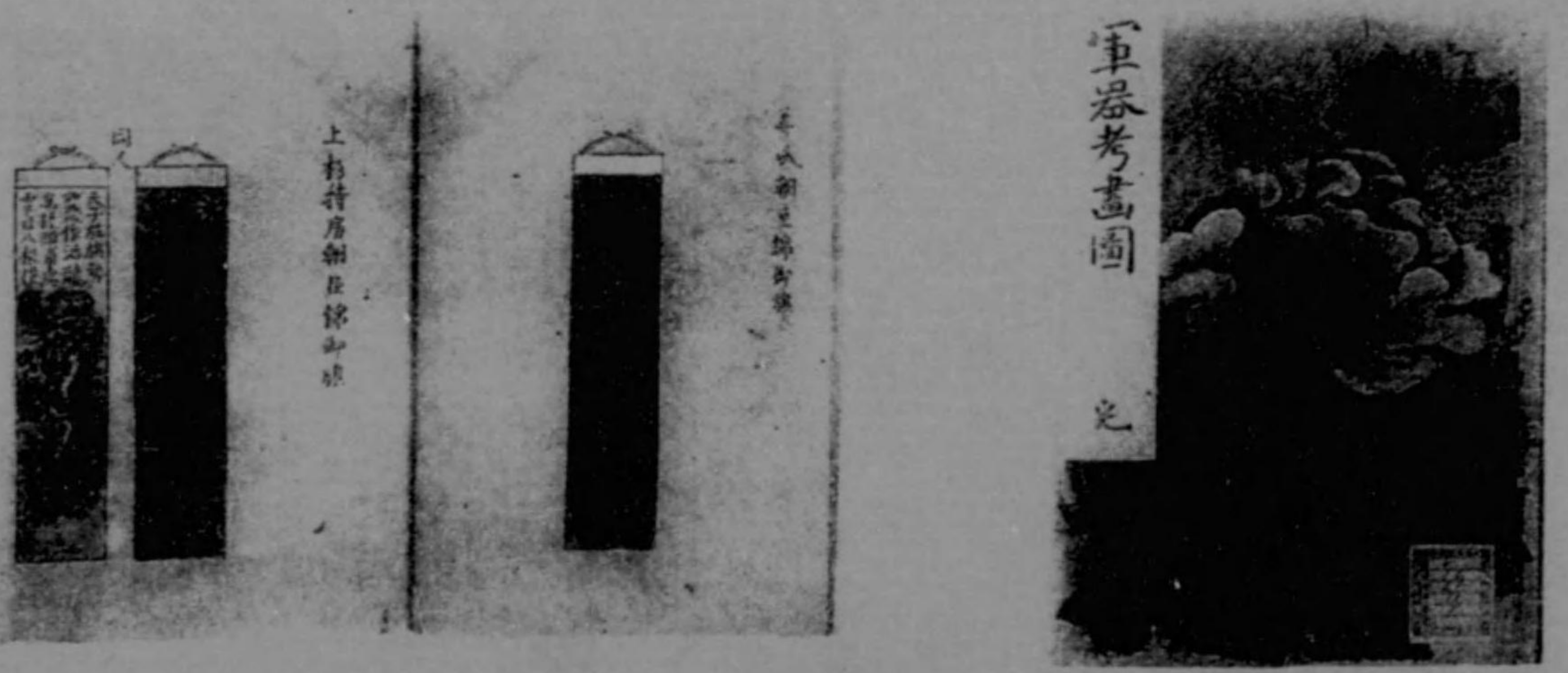
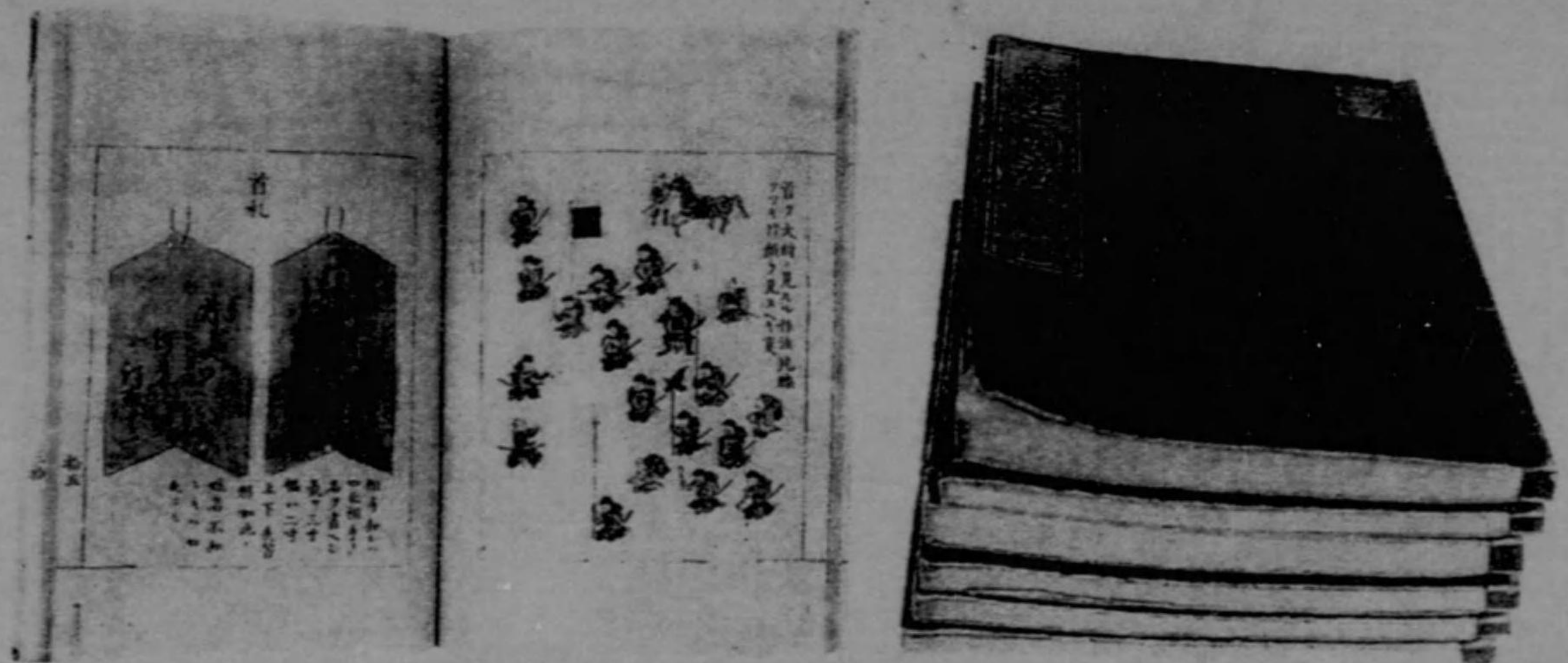
同 文庫藏

天保癸巳之歲六月佐藤信淵ノ撰述スルトコロナリ。古來本邦諸兵學家ヲ窺フニ實ニ百七十有餘ヲ算スルト雖モ其ノ論説ノ究局スル所ニハ各自ラ一僻ノ嫌ヒナシトセズ。茲ニ於テ諸兵家ノ説ノ信實説ニ合スルトコロノモノヲ撰ス。即チ武ノ虛實ヲ排シ實用ヲ以テ主眼トシタルモノコレナリ。引證該博論理公正誠ニ真ヲ穿ツモノトイフベシ。牧ムル所撫御、騎前、人數、組、操練備押シ小荷駄押、物見、陣營、接戰、攻城、籠城ソレ他ヲ以テス。安逸ヲ貪ル鉢植武士ニ對シ世界ノ大勢ニ順應スベク武道ノ本領ヲ説示シソノ奮起ヲ促シタルモノコレナリ。

水戰秘訣モ亦信淵ノ著ス所ニシテ問答體ヲ以テ説示シタルモノナリ。天保ノ交英吉利西國ソノ水軍ヲ以テ清國ヲ侵伐スルニ筆ヲ起シ大イニ論駁スルトコロアリ。舟軍ノ練熟軍船ノ堅固ナルコト西洋ニノミ獨歩シ本邦ニハ確固タル水戰法ノ存スルナキヲ嘆シ廣大堅固ナル軍船ノ建造ハ國家鎮護ノ完備ナリト革新的禦海ノ法ヲ力説スルトコロアルナリ。嘉永二年九月重陽此ノ稿ヲ作スト云。







七七 武器圖考

寫本繪入 七冊

東京市 帝國圖書館藏

著者有深武貞ハ金澤藩ノ兵學家ニシテ寶永頃ノ人ナリ。其學統ハ山鹿素行ニ出プト云  
此書甲冑小道具ノ細ヨリ攻城野戰ノ大ニ到ルマデ圖書ト解説ト相俟テテ當代兵法ノ真  
髓ヲ發揮シタルモノナリ。

七八 軍器考畫圖

寫本 一冊

東京帝國大學附屬南葵文庫藏

軍器ノ中特ニ諸將ノ旗印ヲ圖録セシモノニシテ、美麗ナル彩色ヲ施シタリ。筆者不詳。



七九 東京帝國大學附屬南葵文庫所藏兵書

舊諸侯所用之旗指物圖 刊本二冊

徳川將軍家一門及び各諸侯ノ指物馬印ヲ圖録シ寛永年間ニ刊行セルモノナリ。著者ハ谷重道、京都ノ人刻板家トシテ知ラル。

日本古義 寫本五冊

高木尙三郎正朝ノ著ハセルモノニシテ弓術ニ關スル諸種ノ故實ヲ着色美麗ナル挿繪ヲ以テ圖示辨説セルモノナリ。(第三段目ハ之ニ屬ス)

武道金言錄 寫本三冊

武人諸將ノ逸話及金言ヲ筆録セルモノ名將言行録トモ稱スベキモノナリ。

孫子大意抄 寫本三冊

吳子大意抄 寫本二冊

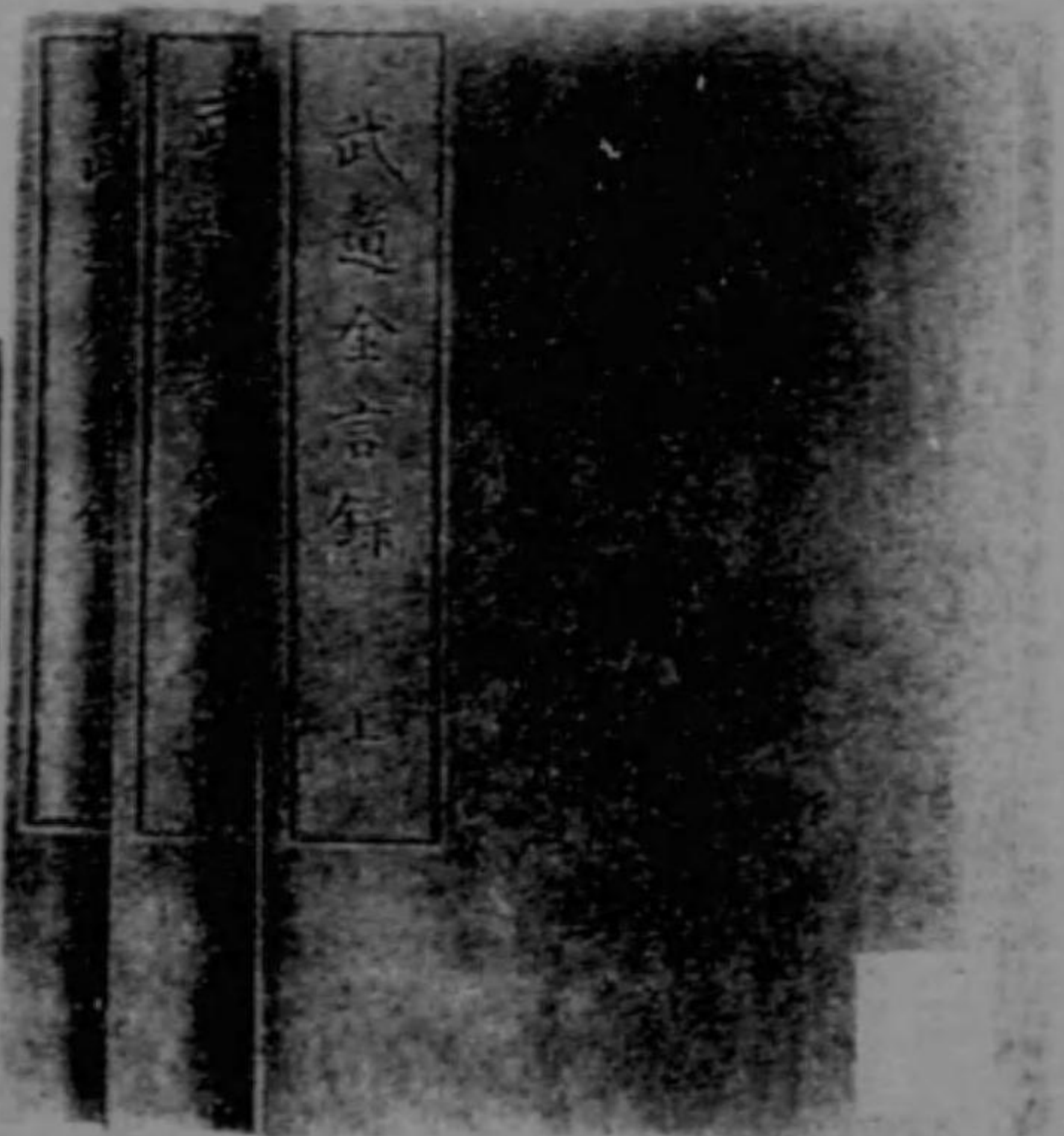
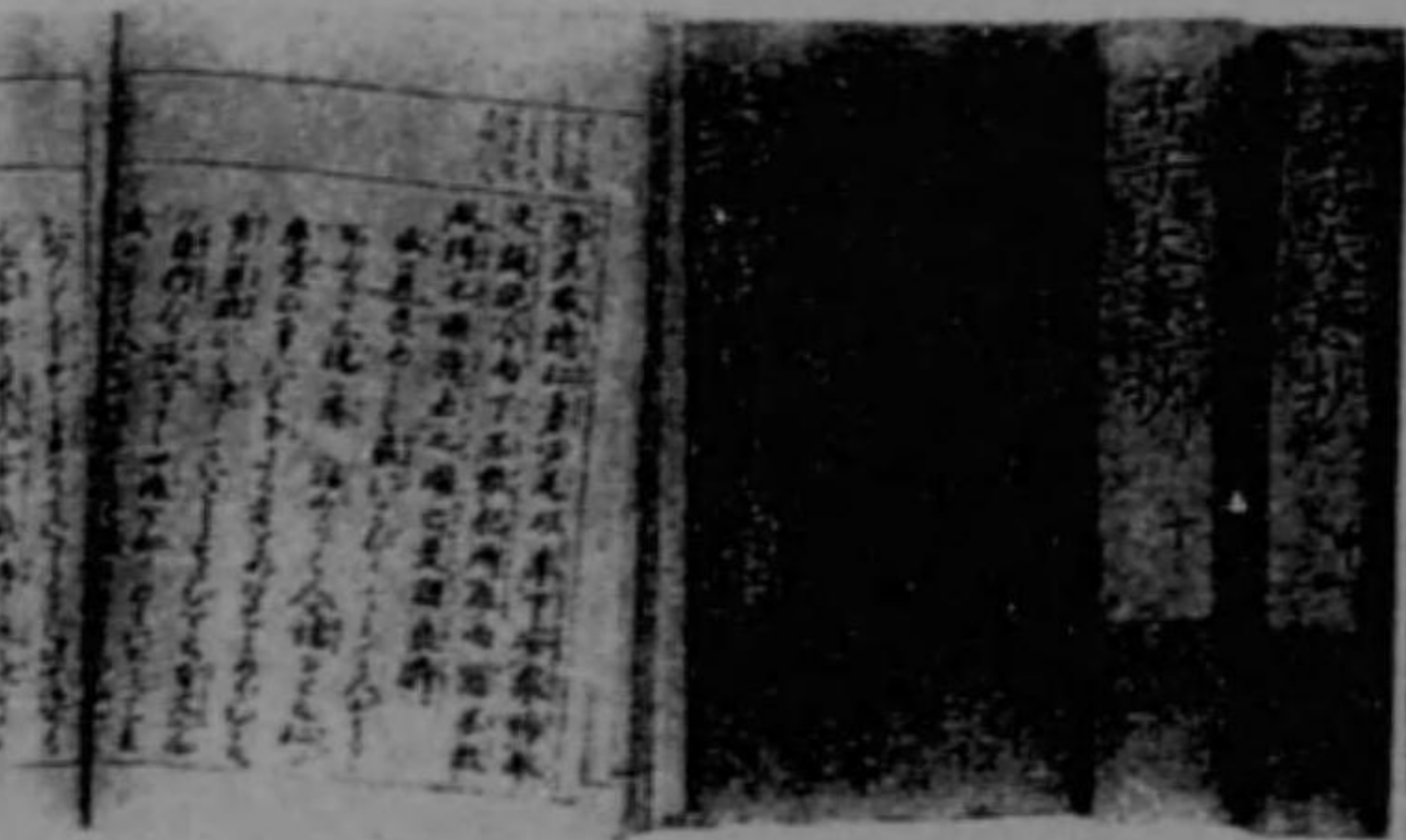
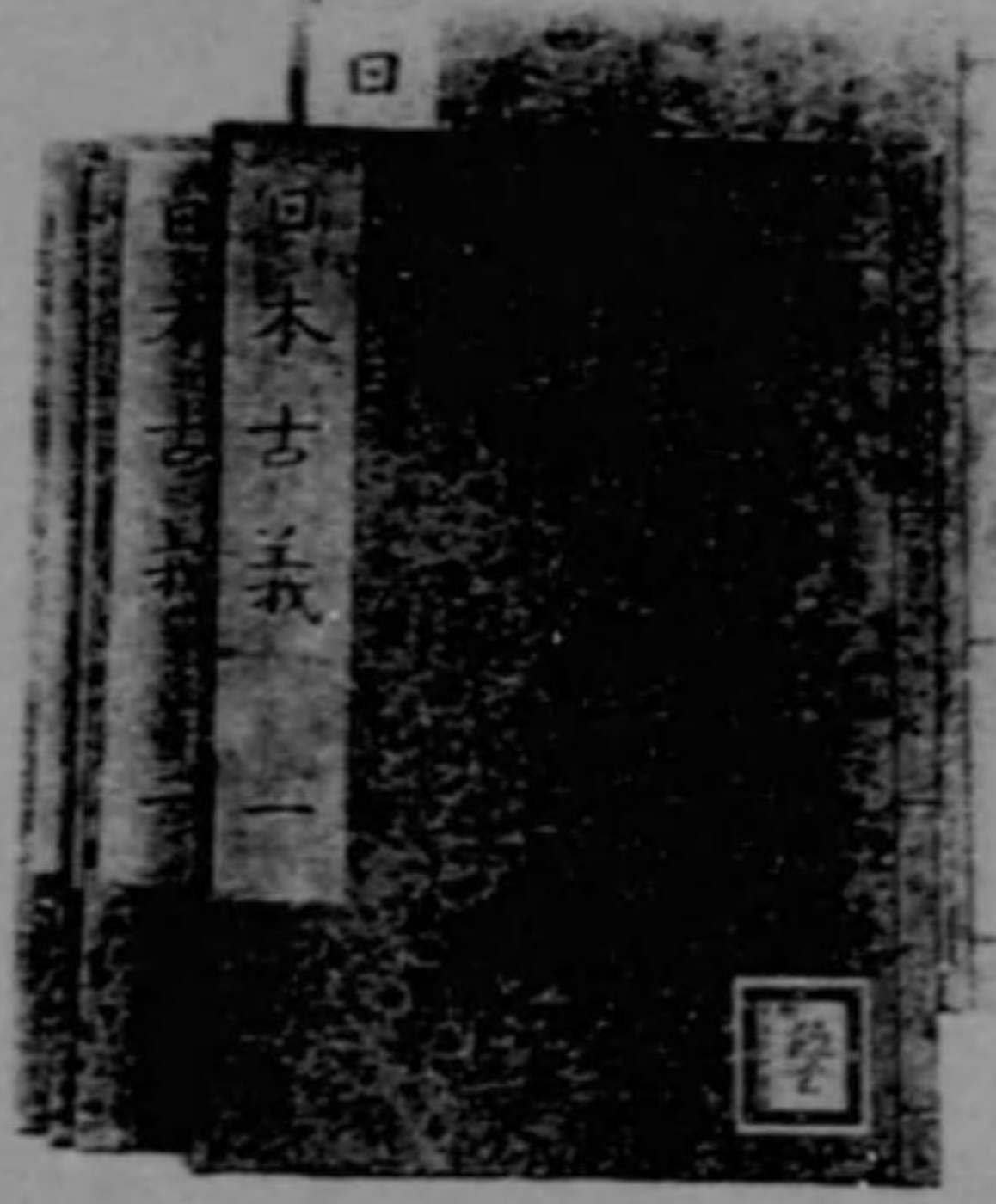
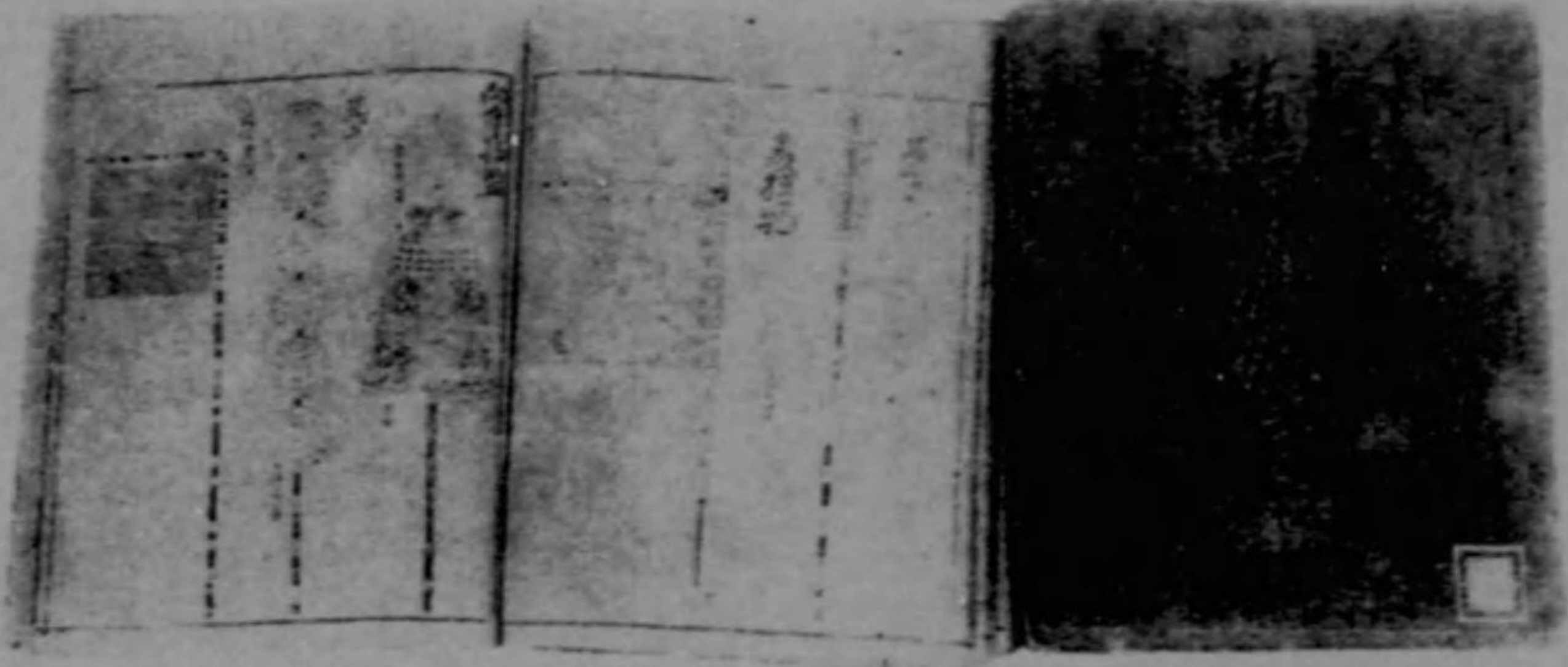
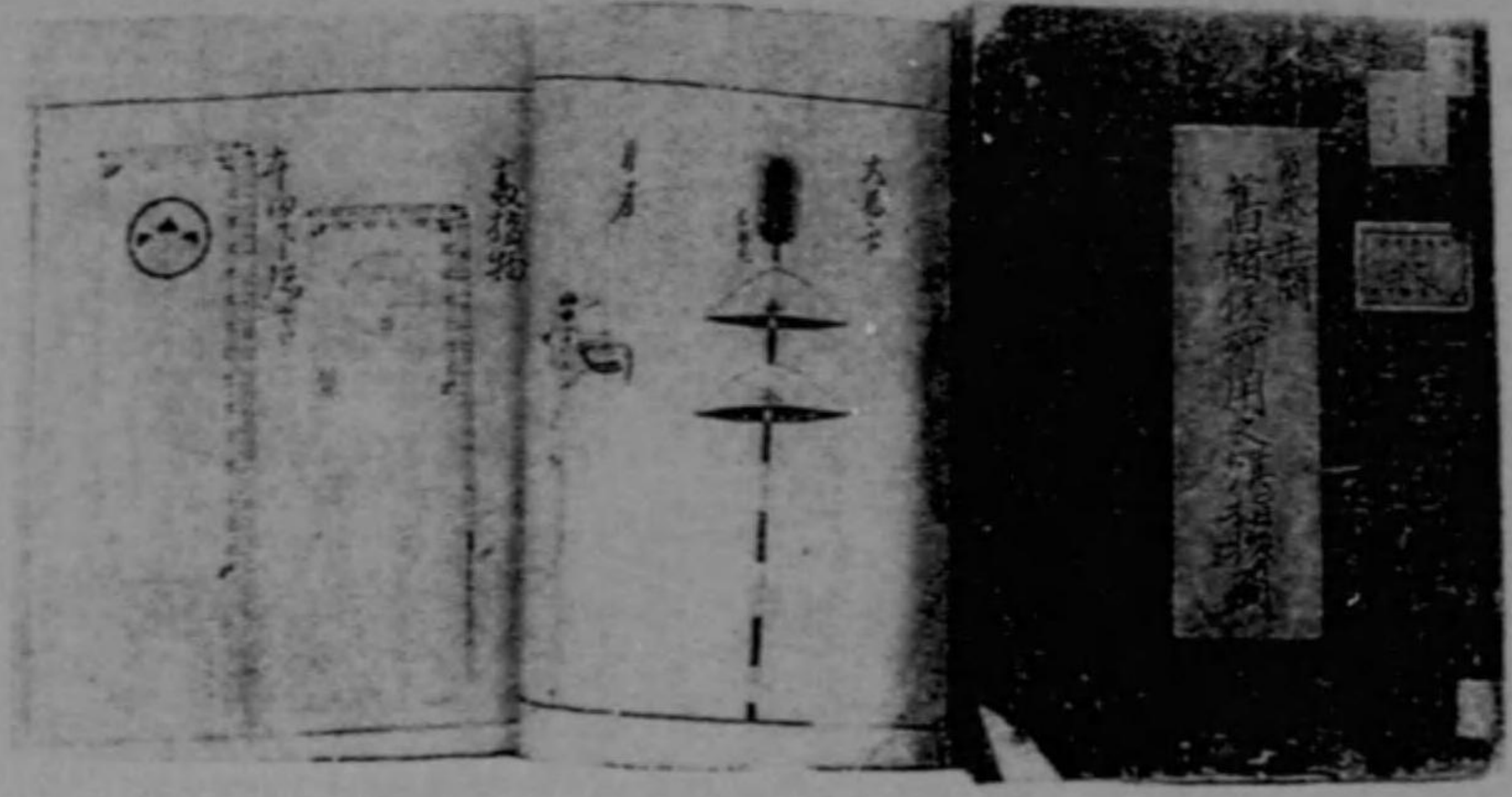
孫子吳子ノ本文ヲ記シテ次ニソノ註解ヲナス。筆者不詳ナルモ筆致極メテ練達ニシテ整美セルコト活字本ヲ見ルニ異ナラズ。恐ラク御前本トシテ誌サレタルモノナランカ。

紀効新書私纂定本 刊本六冊

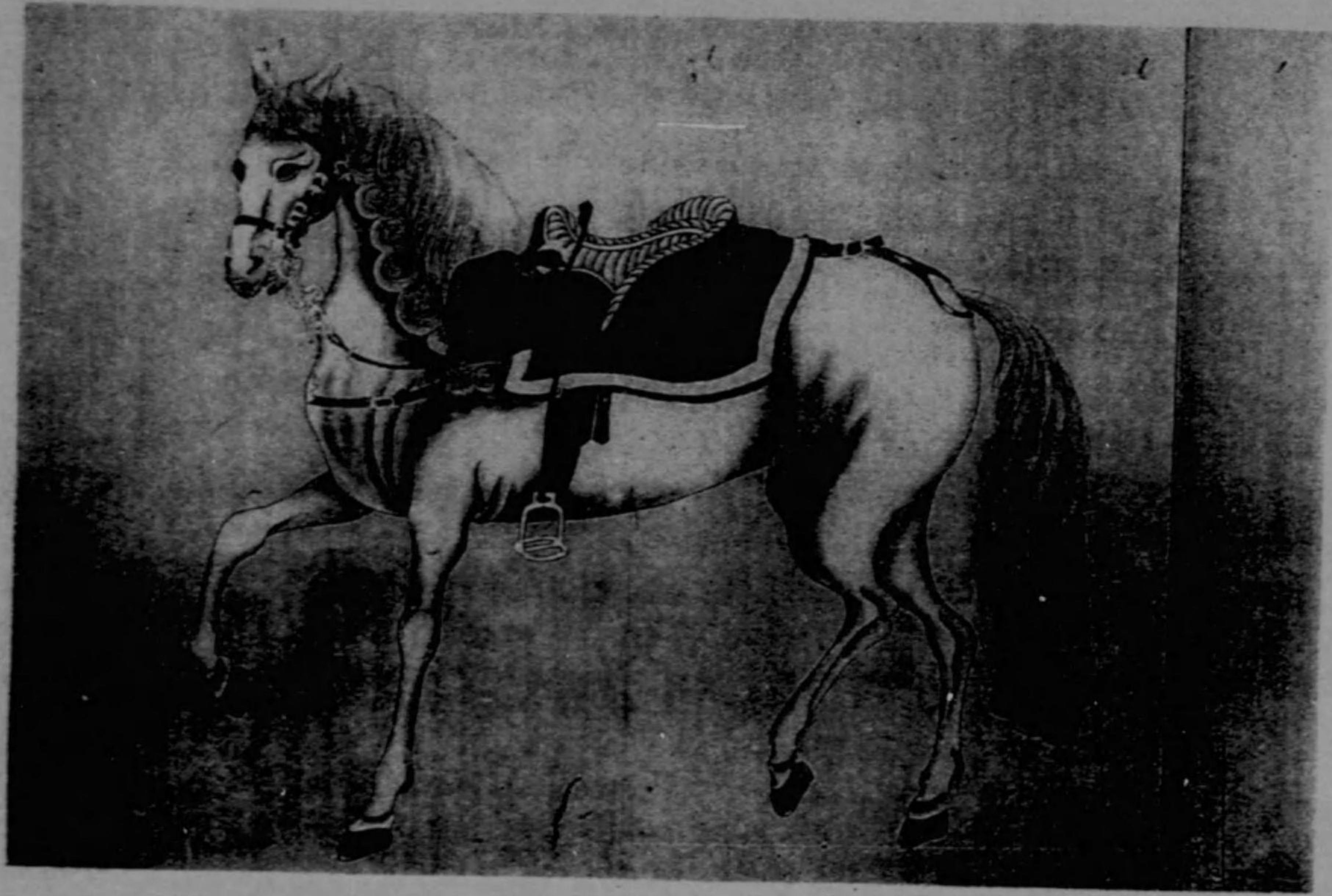
紀効新書ハ清朝成繼光元敬(倭寇遠伐ニ名ヲ擧グ)ノ編述ニ係ル。幕末ニ於テ最モ普及セシ兵書ニシテ本書ハ安政元年相馬氏藏版ナリ。

諸將旗旌圖 刊本三冊

徳川將軍初ノ諸將ノ馬印指物等ヲ集録セルモノニシテ、愚齋周智ノ序アリ。

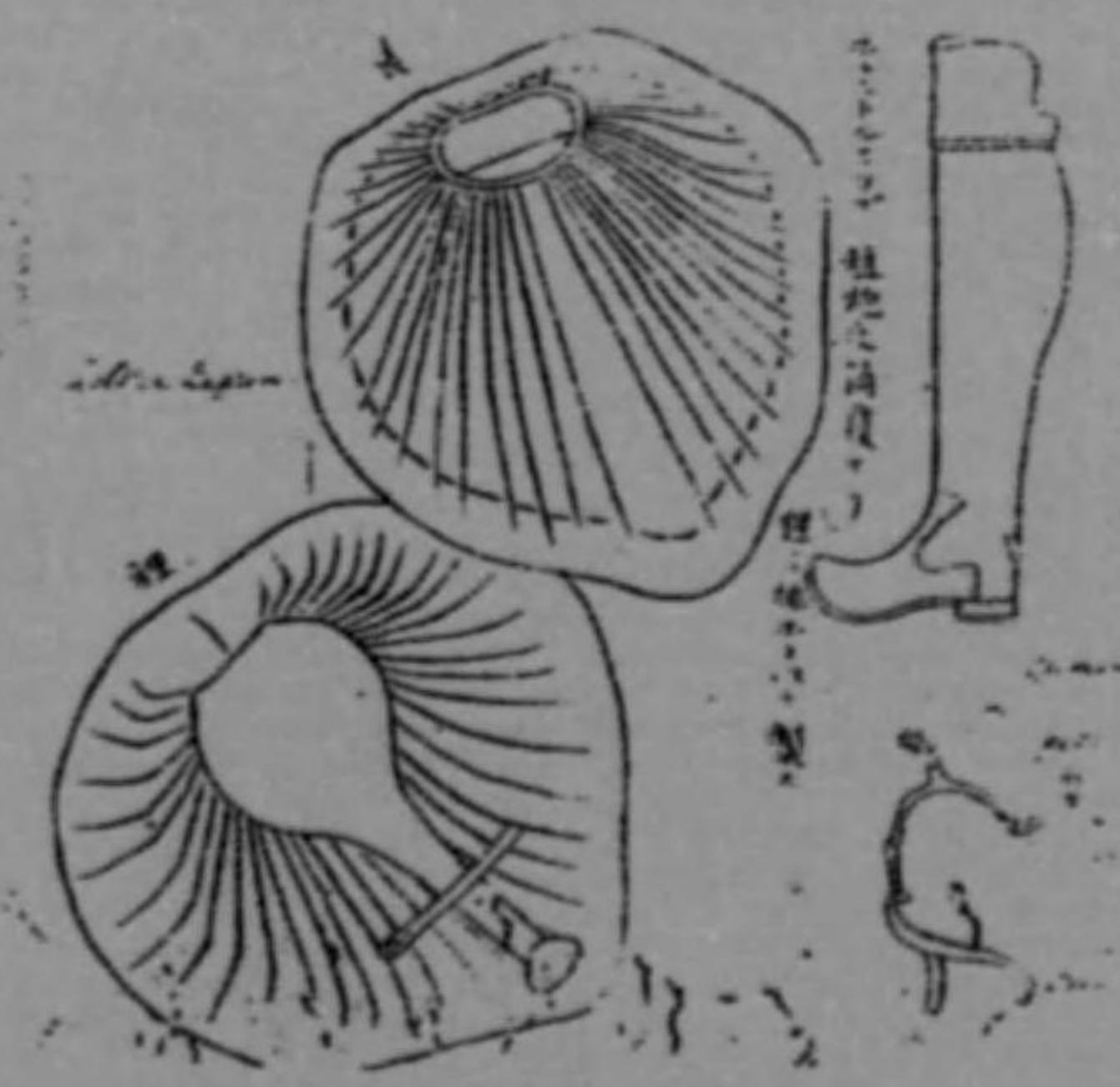






寛政癸巳見一諸侯所藏蘭版西洋諸國馬圖々凡三十二枚、其日如左。所舉馬具輕便似有可取者。就中抄寫九枚、欲助軍器之製作。乙卯秋有崎陽之役、於旅館獲所傳寫蘭圖。今併作宏藏之正番云。丁巳夏日守重識。

第一 馬具圖  
 第二 馬具圖  
 第三 馬具圖  
 第四 馬具圖  
 第五 馬具圖  
 第六 馬具圖  
 第七 馬具圖  
 第八 馬具圖  
 第九 馬具圖  
 第十 馬具圖  
 第十一 馬具圖  
 第十二 馬具圖  
 第十三 馬具圖  
 第十四 馬具圖  
 第十五 馬具圖  
 第十六 馬具圖  
 第十七 馬具圖  
 第十八 馬具圖  
 第十九 馬具圖  
 第二十 馬具圖  
 第二十一 馬具圖  
 第二十二 馬具圖  
 第二十三 馬具圖  
 第二十四 馬具圖  
 第二十五 馬具圖  
 第二十六 馬具圖  
 第二十七 馬具圖  
 第二十八 馬具圖  
 第二十九 馬具圖  
 第三十 馬具圖  
 第三十一 馬具圖  
 第三十二 馬具圖



八〇 荷蘭馬具圖 寫本一卷

內閣文庫藏

本圖ハ正番近藤重藏守重ノ藏スルトコロナリ。蘭版西洋馬具圖ニシテ正番ノ寫ニ係ル。裝幀甚タ粗末ナリト雖モ第一圖(上圖)ハ彩色ヲ以テシタル繪燭人目ヲ奪フモノアリ。其ノ他ハ素描圖ニシテ蘭語ノ對譯ヲ附ス。コレ荷蘭馬具ニシテ併テ佛郎家、都兒古、バルシヤンノ他各國ノ馬具九枚ヲ抄寫スト言フ跋アリ。「寛政九丁巳年夏日」ノ識ヲ以テス。左ニ載ス。

寛政癸巳見一諸侯所藏蘭版西洋諸國馬圖々凡三十二枚、其日如左。所舉馬具輕便似有可取者。就中抄寫九枚、欲助軍器之製作。乙卯秋有崎陽之役、於旅館獲所傳寫蘭圖。今併作宏藏之正番云。丁巳夏日守重識。







八二 廣嶋市淺野圖書館藏兵書

萬國旗章圖譜 刊本 一卷

水戸ノ人繪重時ノ著ニ係リ、萬國ノ旗章ヲ彩色シテ圖録シタルモノナリ。卷頭ニ嘉永五年四月藤森大雅ノ序文アリ。

諸家馬印 寫本 二冊

信長、秀吉、秀次ノ馬標ヨリ德川初期ニ於ケル親藩譜代外様諸大名旗本諸士ノ馬標五百五十餘種ヲ彩寫セシモノナリ。筆者不詳。

主圖合結記 寫本 十卷三冊

德川時代ニ於ケル將軍家三家諸大名ノ居城合計百四十八ヲ舉ゲ其ノ位置及廓内ノ模様ヲ插キ彩色ヲ施シテ山川堀塙道路等ヲ明カニシ圖ノ初ニ歴代城主ノ石高移封概略等ヲ記セリ。筆者不詳。

武器百圖 刊本 一卷

小林祐猷ノ著ニ係ル。専ラ童蒙ニ武器ノ大要ヲ知ラシメ尙武ノ氣風ヲ振作セントテ嘉永元年頃ニ出版セラレタルモノナリ。弓矢以下ノ武器二百種ヲ收ム。著者ハ美濃國郡上ノ家臣、平素學ヲ好ミ殊ニ武學ニ深ク、又繪事ニ心アリタル人ニシテ本圖ハ自ら畫キタル所ナリト云。

甲冑之圖繪、鏡之圖、策之卷、武羅之卷、床几之圖 寫本 一折

圖數總テ六十六、悉ク彩色ヲ施シ、詳細ナル説明ヲ施シタリ。惜ラムトハ原圖ノ出所、著者並ニ臨寫年月等ヲ缺ク。



八三 武經要畧外三十九種

寫本 六十四冊

東京市 帝國圖書館藏

武經要畧ハ天文中越後ニ於テ武道ノ神ト稱ヘラレタル宇佐美良勝ノ著書ナリ。他ノ三十九種ハ武邊一切ニ關スル各名家ノ良著ヲ網羅セルモノニシテ、兵學百科全書トモ稱スベキ一大叢書ナリ。



八四 甲冑備考 寫繪入 一軸

東京市 帝國圖書館藏

春日神社寶庫中ノ源義經、楠正成ノ着用セ  
シト傳アルモノヨリ因州池田藩、岩越家所  
藏ノ池田信輝ノ甲冑等ヲ寫セシモノニシテ  
解説モ徹細叮嚀ニシテ故實ニ資スル大ナル  
ベシ。惜ムラタハ筆者ノ名ヲ存セズ。傳來  
モ亦不明ナリ。

八五 本朝鎧色考 寫本一冊

同 館藏

本書ハ書名ノ如ク絨毛ノ色ニ就テ考證セル  
モノニシテ、著者源高敬ハ安永頃ニ於ケル  
赤穂ノ人ナリ。校者塩田松園ハ幕府ノ醫官  
ニシテ名ハ泰、字ハ順庵、海防堂號四十卷  
ノ著者トシテ有名ナリ。

八六 函工圖鑑集 寫繪入三冊

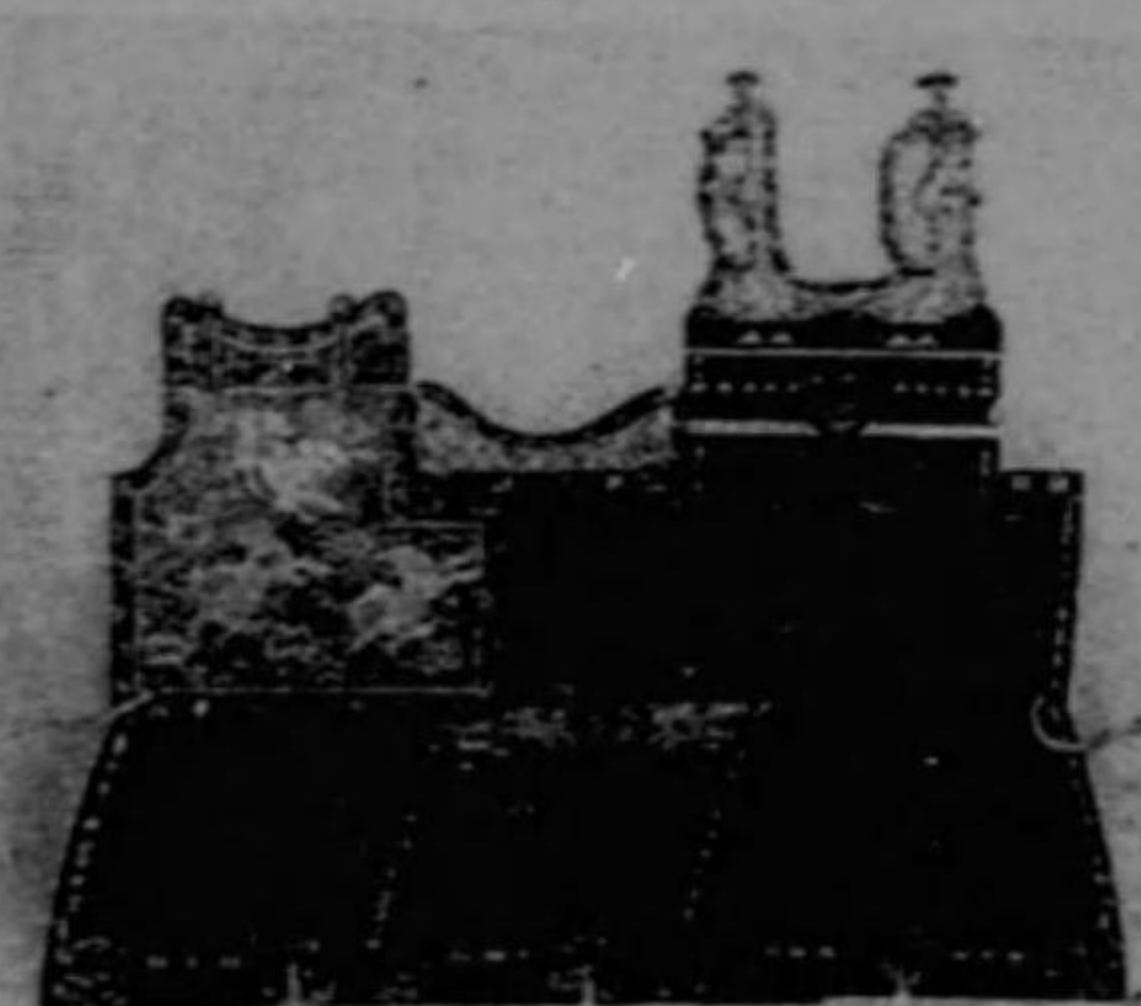
同 館藏

筆者明珍宗正ハ明珍家二十五代ニシテ享保  
頃ノ人、函工ノ家ニ出ブ。斯道ノ秘事ヲ圖  
シタルモノナリ。

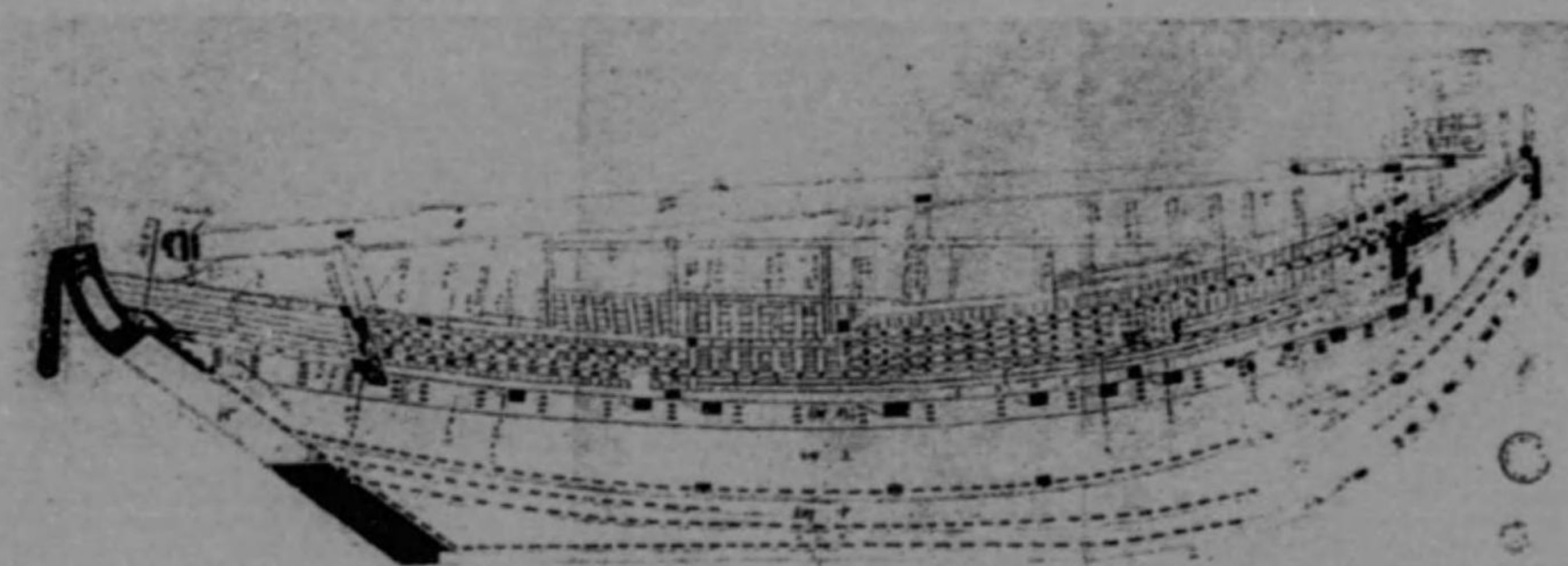
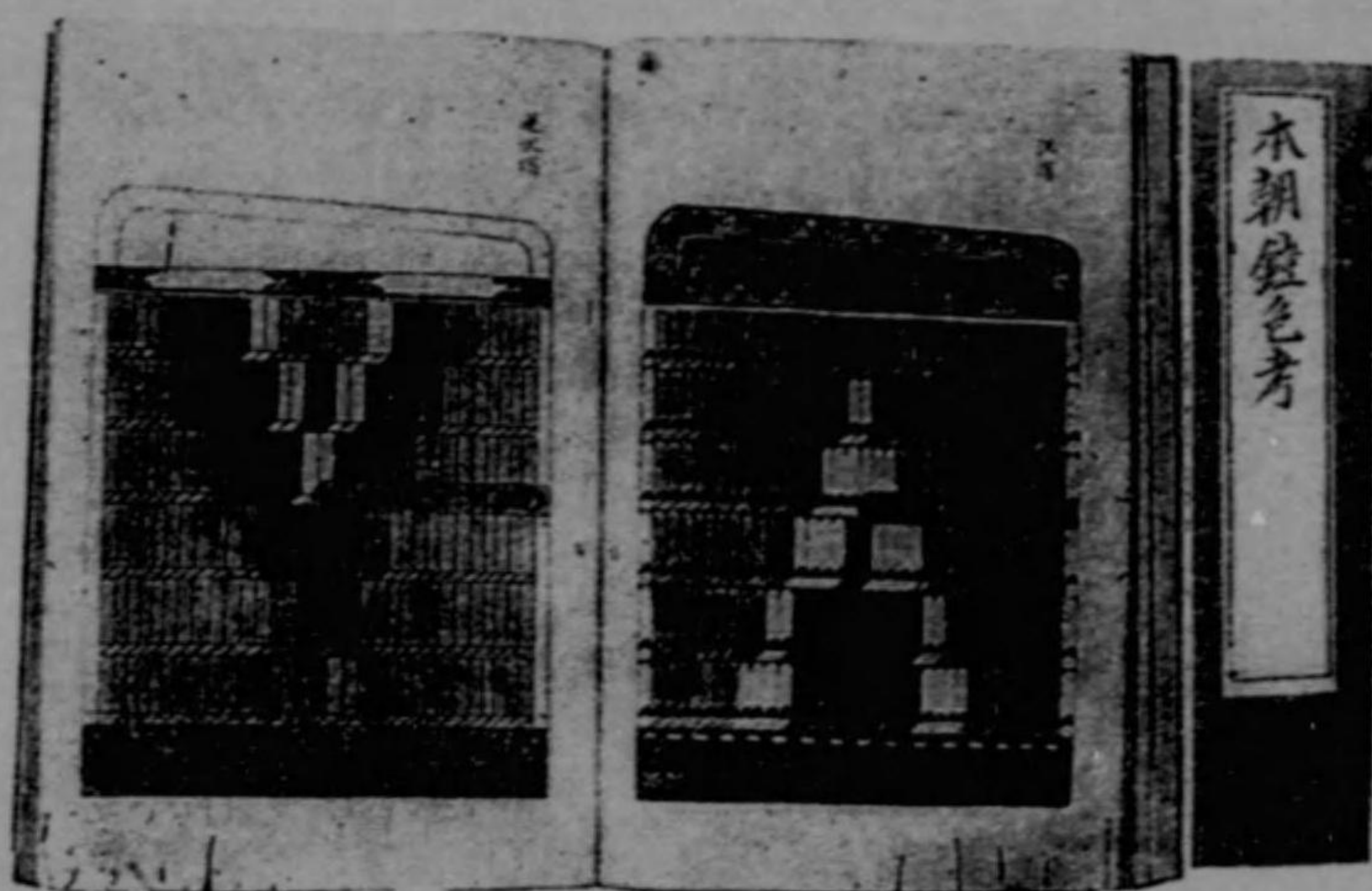
八七 廻船圖 寫本一軸

同 館藏

和船ノ構造ヲ圖解セシモノニシテ船大工ノ  
虎ノ巻トモ稱スベク、モト江戸研究ノ權威  
タリシ故内藤恥堂翁ノ珍藏タリシモノナリ。



甲冑備考  
源義經ノ甲冑  
楠正成ノ甲冑  
池田信輝ノ甲冑  
...







八八 東京帝國大學附屬圖書館藏

武人調

具原益軒著

一四冊

軍用記

寶曆十一年伊勢貞丈親寫本

甲冑製作辨

寛政十二年

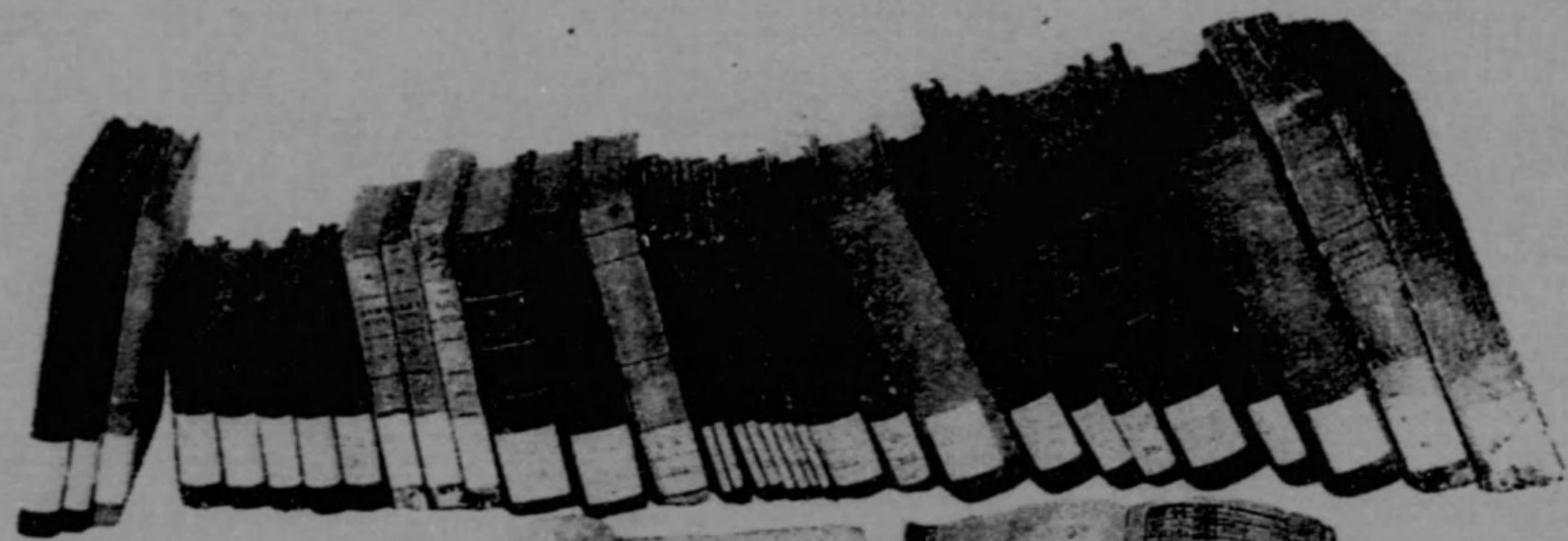
刊本

慶長以來新刀辨疑安永八年

刊本

刀劍ノ鑑定書トシテハ最モ權威アル書ナリ





八九 静岡市英文庫所蔵兵書 二百十七冊

此蒐書ニハ徳川幕府ノ審所調所、開成所、陸軍方、外國方等ノ舊蔵ニ係ルモノ多シ  
明治元年徳川家達公藏府ニ封ゼラル、ヤ其家臣等モ多ク江戸ヨリ轉住シタレバソノ子  
弟教育ノ爲ニ静岡學校ナル學會設ケラレ、當時最モ斬新ノ教育ヲ施シタリ。コヽニ掲  
出ノ圖書並ニ他ノ部類ニ屬スル英文庫所蔵ノ和漢洋書約四千冊ハ何レモ此學校ニ傳ハ  
リタルモノナリ。





九〇 京都帝國大學所藏兵書

三十五冊

九一 陸軍士官學校所藏兵書

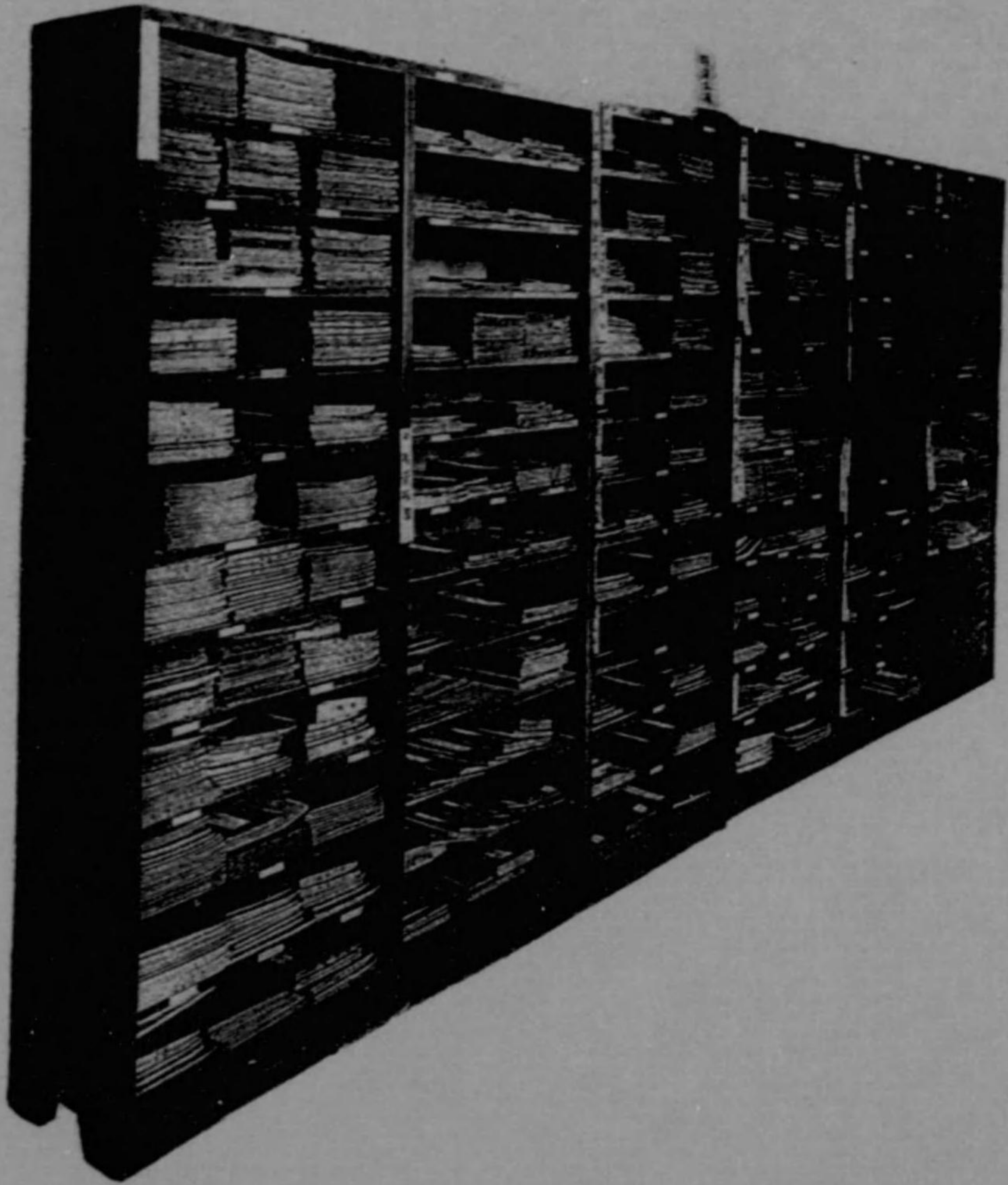
四十三冊





九二 海軍兵學校所藏古兵書

二百四十五冊



九三 野澤文庫 千百七十冊

海軍兵學校教育參考館藏

野澤文庫ハ現小樽住野澤弘幸氏カ家傳ノ兵書全部ヲ學ゲテ本校教育參考館ヘ寄贈セラレタルモノニシテ、伊豫松山藩ノ軍學者向井氏、野澤氏等ノ傳ヘタル源家古法ニ屬スル兵學書ノ一大蒐集ナリ、大部分ハ寫本ニシテソノ内容ハ諸流兵學書ヲ初メ諸種ノ兵器、武技、水軍、軍禮、戰史、歴史、地理、天文、宗教等アラユル方面ニ互レル古書ヲ含ム。向井氏等ハコレヲノ藏書ヲ教材トシ塾ヲ開キ門人ヲ集メテ文武兩道ヲ教授セシモノナルカ如シ。



九四 加藤清正陣中旗印之回章

一軸

尾道市 淨土寺 藏

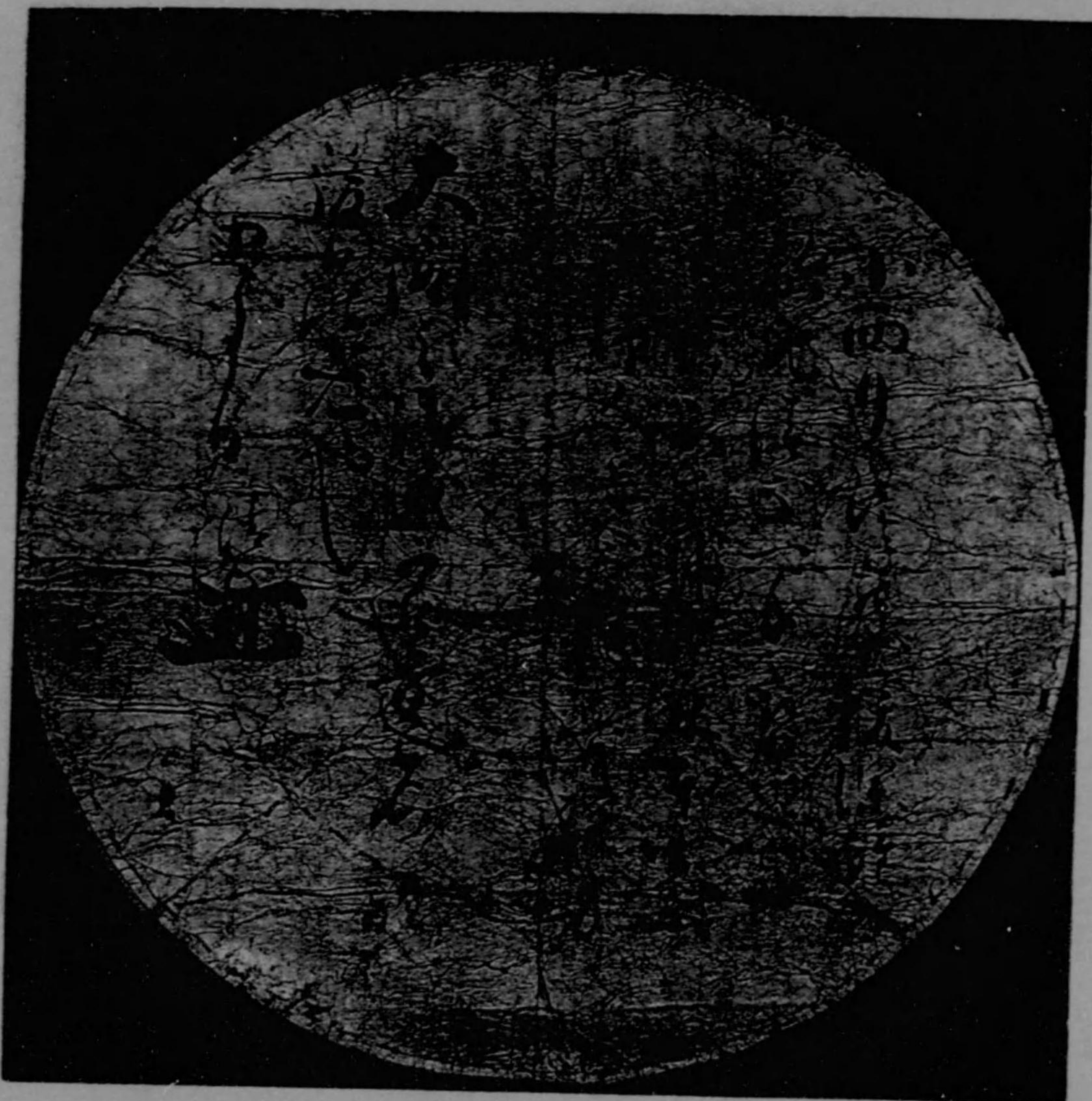
此旗印ハ清正ガ征韓當時、部下ヲ激勵スルタメニ自ラ次ノ文句ヲ認メ、回章トシテ陣中ヲ持廻ラシメタルモノナリ。文ニ曰ク、

小西行長被ニ出返ニ深人ニ敵地ニ清正一手之勢ヲ以兩王子ヲ不ニ生捕ニハ再本國ヘ不可歸人々令ニ粉骨碎身預ニ太閤ノ御威ニ可被ニ遺ニ名於後昆ニ者也

五月日

清正花押

清正征明ニ從事スルコト前後七年、攻城野戰到ル處勇名ヲ異域ニ揚ゲ、韓人永ク鬼加藤トシテ彼ヲ怖レタル、決シテ偶然ニ非ズ。武將トシテ此訓示ニ表ハレタルガ如キ意氣ト覺悟トアリタレバナリ。此回章、地ハ金箔ニシテソノ上ヘ墨書シタルモノ、今掛軸トシテ保存セラル。モト肥後ノ處士木村氏ガ所持セシヲ故アリテ淨土寺ヘ奉納シタルモノナリ。

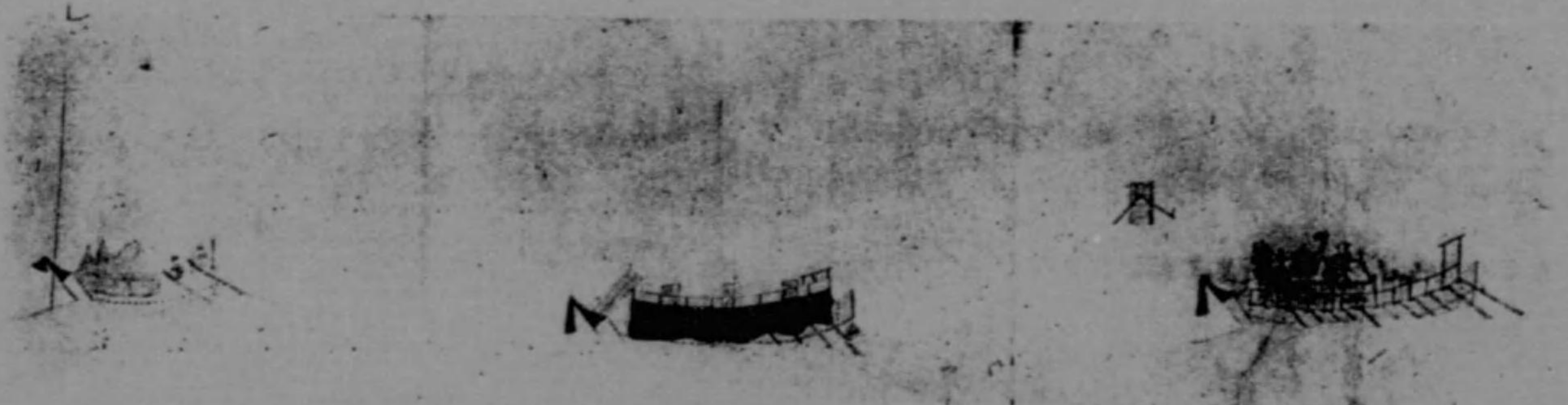
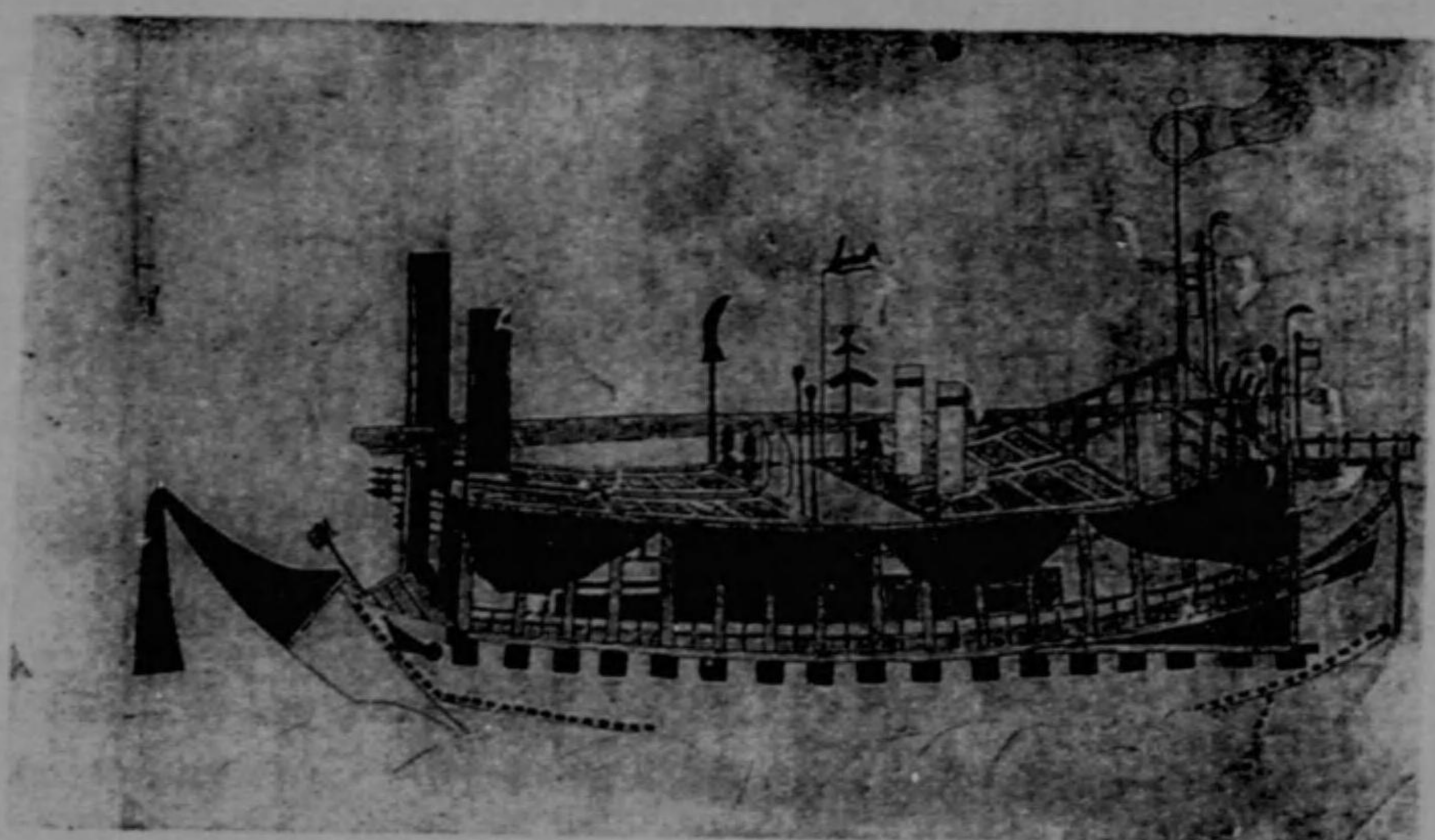
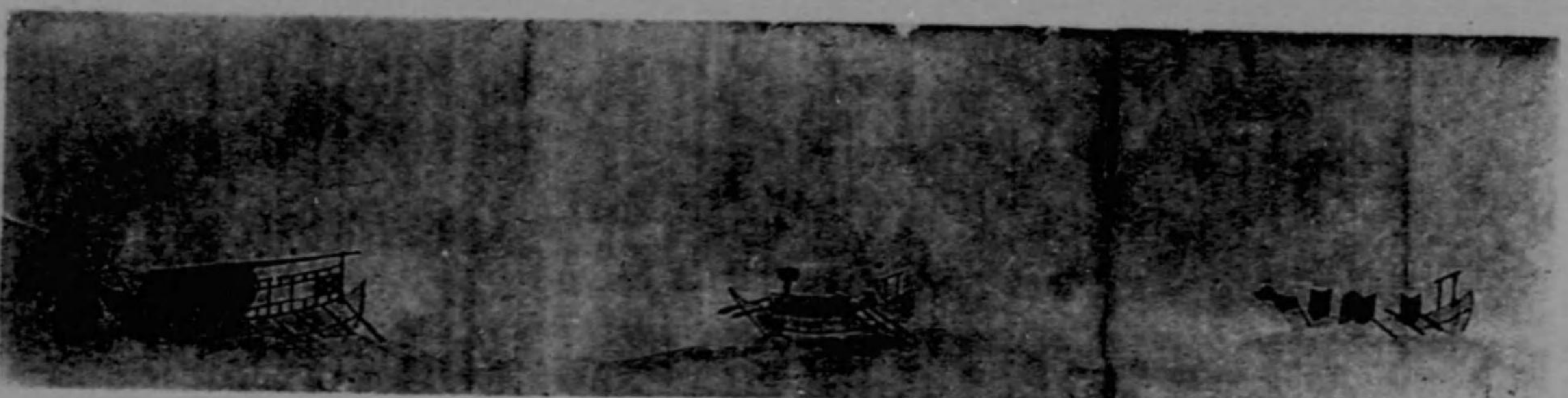




九五 軍船圖卷 一卷

尾之浦市外 加藤精造氏藏

征韓役當時ニ於ケル我軍使用ノ兵船ヲ圖寫シタリト稱スルモノニシテ、當ニ同役ニ於ケル我軍船ノ狀況ヲ窺知シ得ルノミナラズ、廣ク徳川時代以前ノ軍船ノ狀況ヲ知リ得ル好資料タリ。原本ニ於テハ中央ノ大船ヲ第一ニ置キ、他ハ上段ノ分ヨリ順次ニ之ヲ配列ス。思フニ此大船ヲ旗艦トシテ之ニ夫々ノ任務ヲ有スル諸船ヲ配シタル一艦隊ナルベシ。中ニ於テ二三大砲ヲ裝備シタルモノ敵船ヲ突破ル爲ノ衝角ヲ有スルモノ、又敵船ニ切込ム時ニ用フベキ船梯子ヲ備ヘタルモノ、日ノ丸ノ國旗ヲ想ハシムル帆ヲ張リタルモノ等極メテ珍トスルニ足ル。原圖ニハ何等ノ記述モナク筆者來歴等一切不明ナルモ吾人ハ之ニ據リテ艦船ノ形式其他ヨリ判定シテ戰國時代ヲ距ル遠カラザル時代ノ軍船ヲ想像スルコトヲ得ン。水軍史上稀觀ノ資料ト云フベシ。











九八

文祿役當時ノ朝鮮地圖

一葉

尾道市外 加藤精造氏藏









一〇〇 羅紗ノ陣羽織

一着  
尾道市外 加藤精造氏藏

一〇三 麻絁ノ陣羽織

一着  
同 氏藏

一〇二 鍔ノ小手當

一對  
同 氏藏

一〇三 野

袴  
一着  
同 氏藏



一〇四 朝鮮王寄贈ノ膳椀 一組

尾道市外 加藤精造氏藏

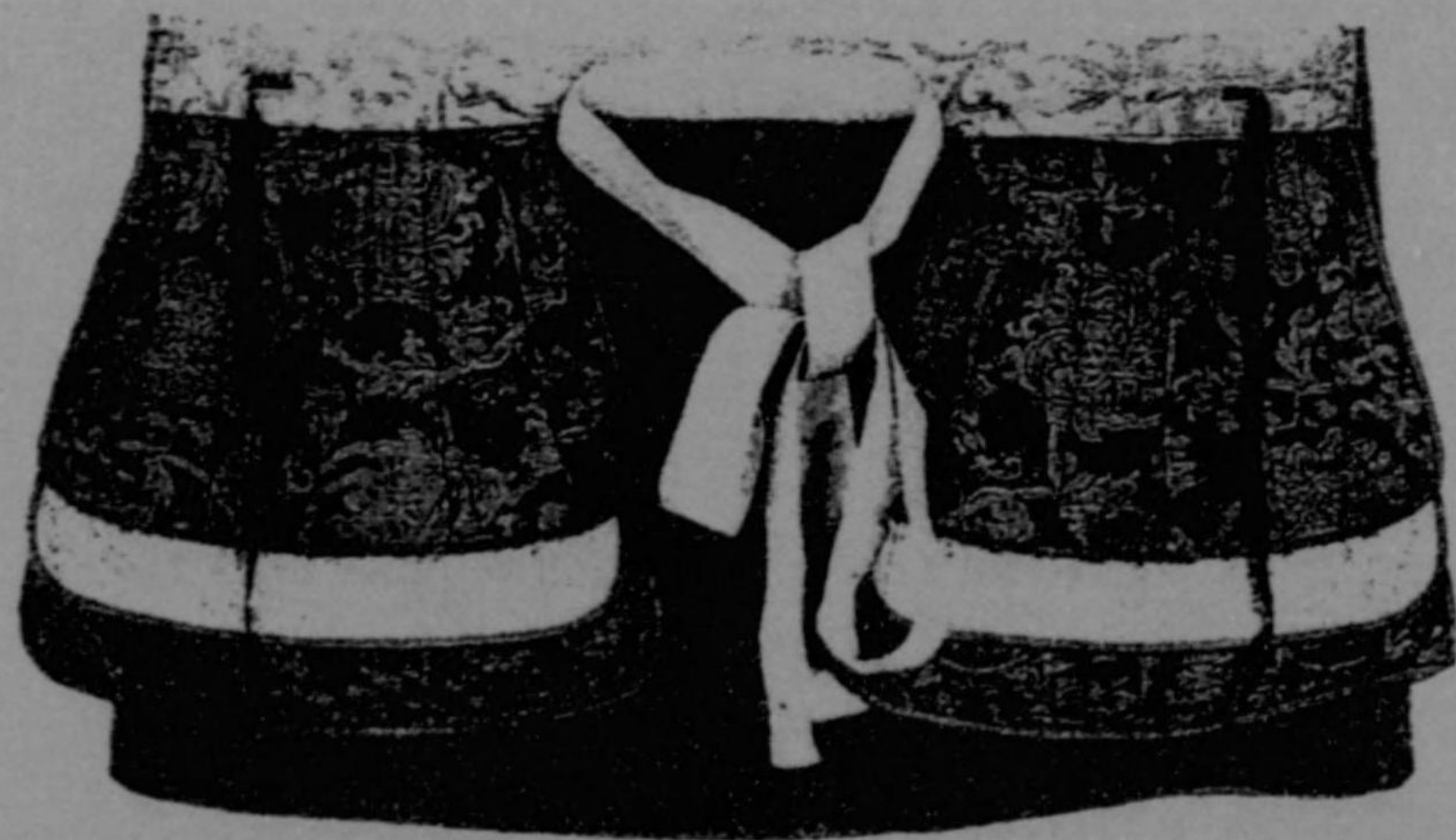
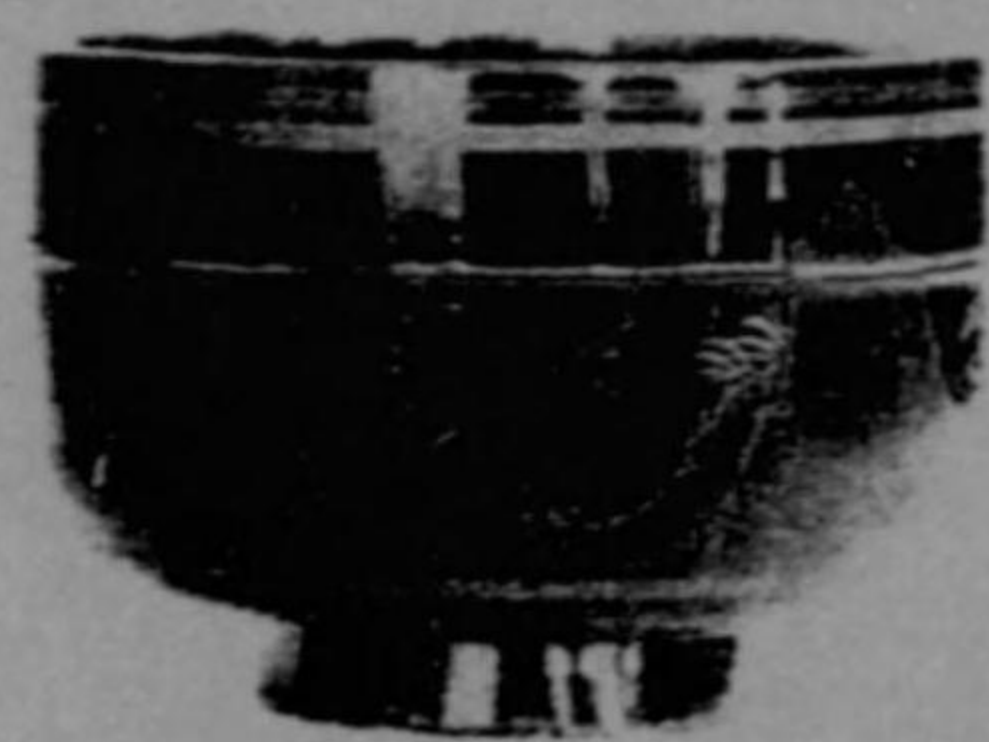
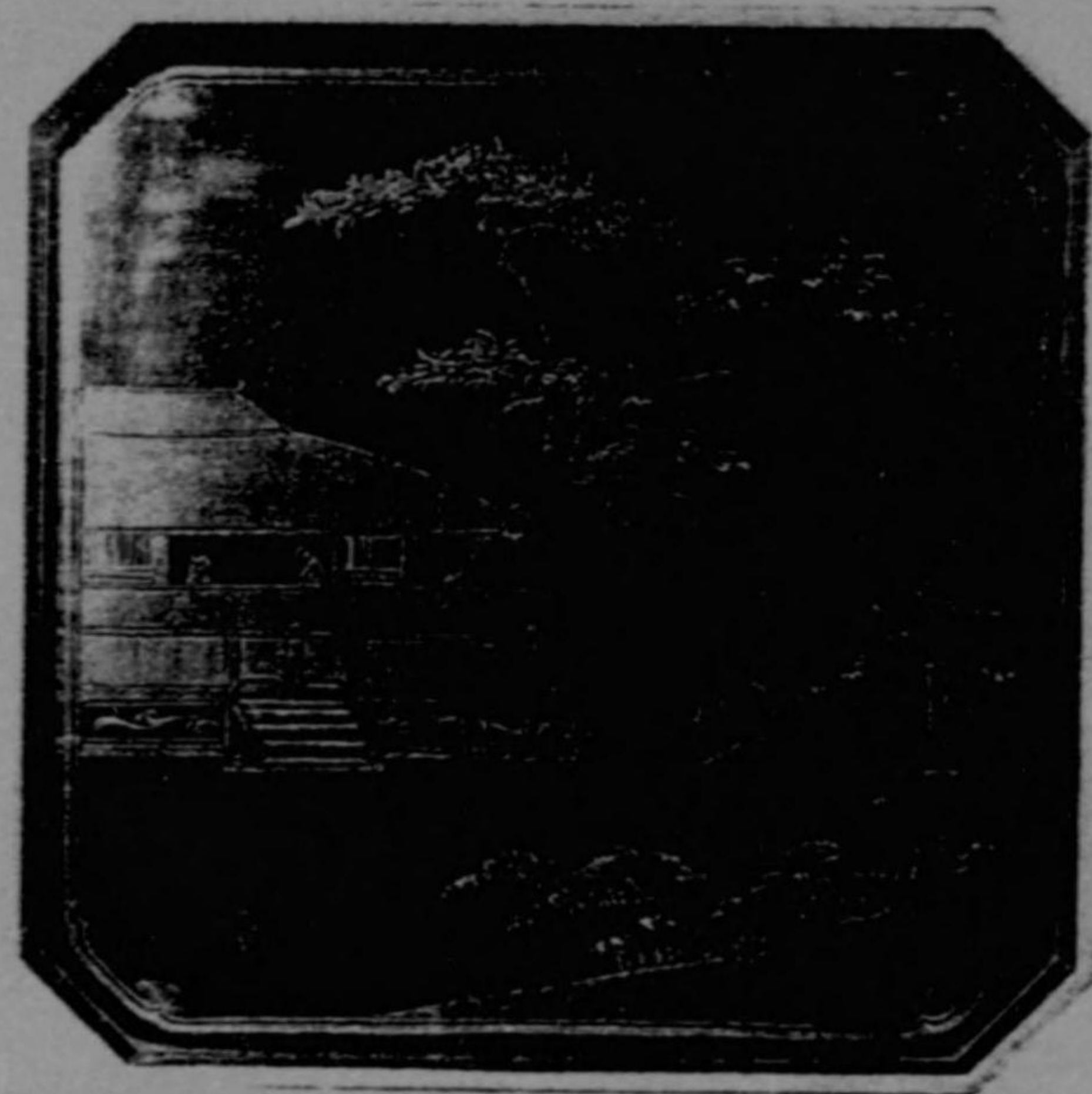
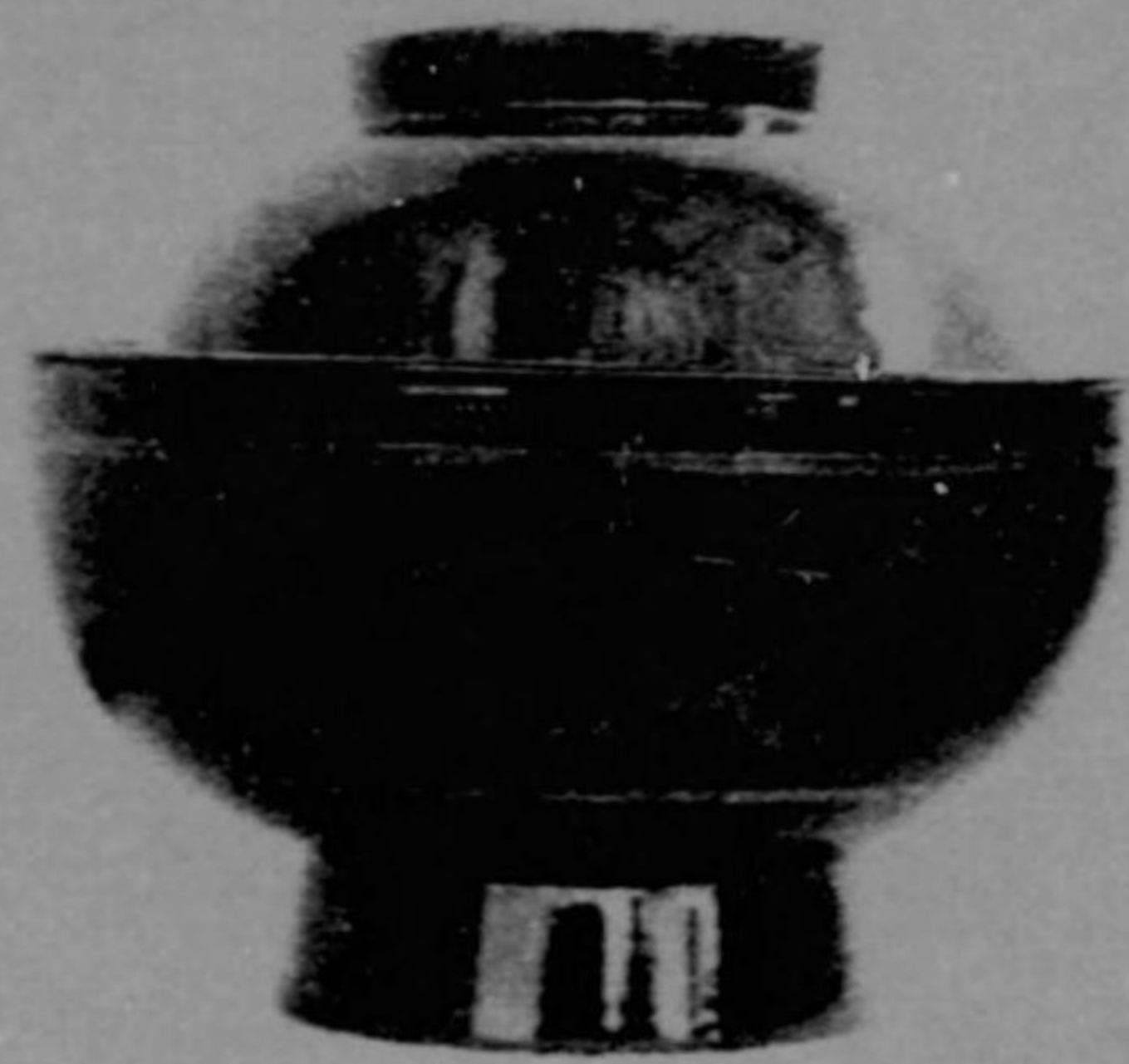
一〇五 由緒不明ノ朝鮮服

一着

同

氏藏







一〇六 臨海君書 一葉

尾道市外 加藤精造氏藏  
臨海君ハ源和君ト共ニ朝鮮役當時加藤清正ノ手ニヨリテ捕虜トナリタル朝鮮王子ニシ  
テ、此書ハ捕虜トシテ我邦ニアリシ間ニ揮毫シタルモノナリト思ハル。

一〇七 同 一軸

東京市 片岡斐太郎氏藏  
「贈別兵次」兵次自扶桑、稍通我國語。行番親又恭。臨別情難罄。臨君花押ハ臨  
海君書ナリトセラル、モ、末尾ニ詳記スルガ如ク、後半ハ徳失セシヲ以テ後ニ換シテ  
補填セラレタルモノナリ。

織女牽牛  
雙扇開年  
年一度過  
河來莫言  
天上稀相  
臨海君書

贈別兵次

兵次自扶桑  
稍通我國語  
行番親又恭  
臨別情難罄

予ハ心中信也  
句又及江上語  
情難罄矣  
以今臨別情  
爲之書之  
片岡斐  
一月相隨主目和  
憐紫以我色如  
新々如送海  
情多如海上  
分以張玉梅  
片岡斐

天正二年四月十日  
臨海君書  
尾道市外  
加藤精造氏藏



一〇八 最古傳來ノ鐵砲

一挺

尾道市 澁谷新右衛門氏藏

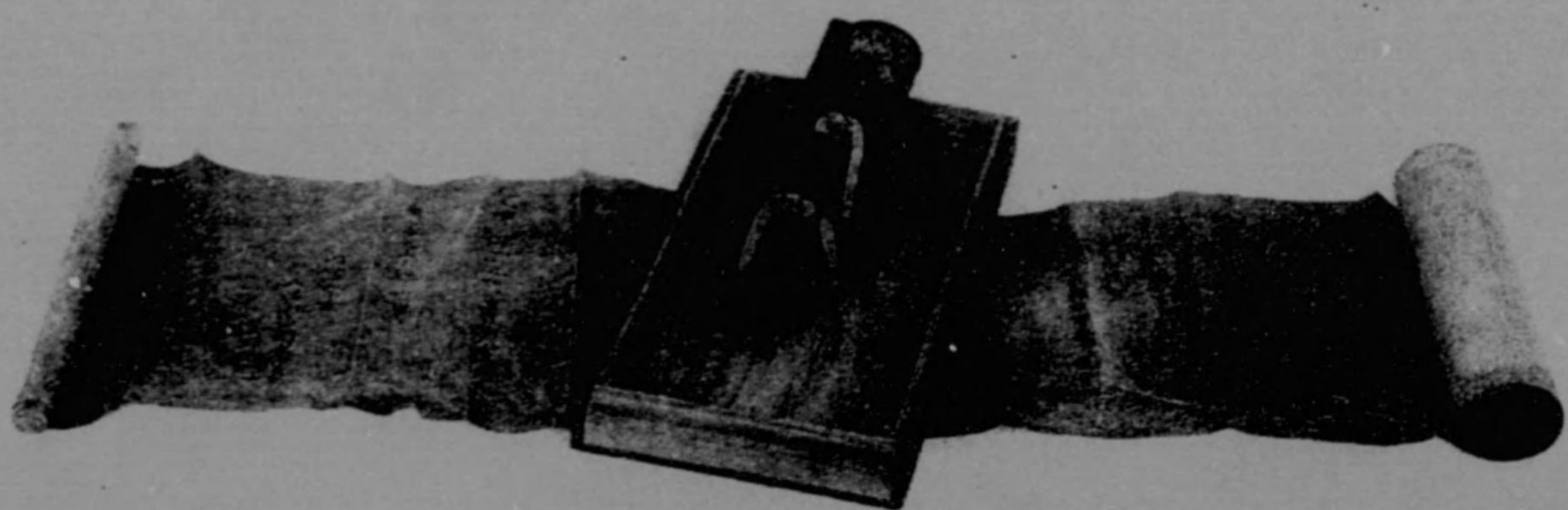
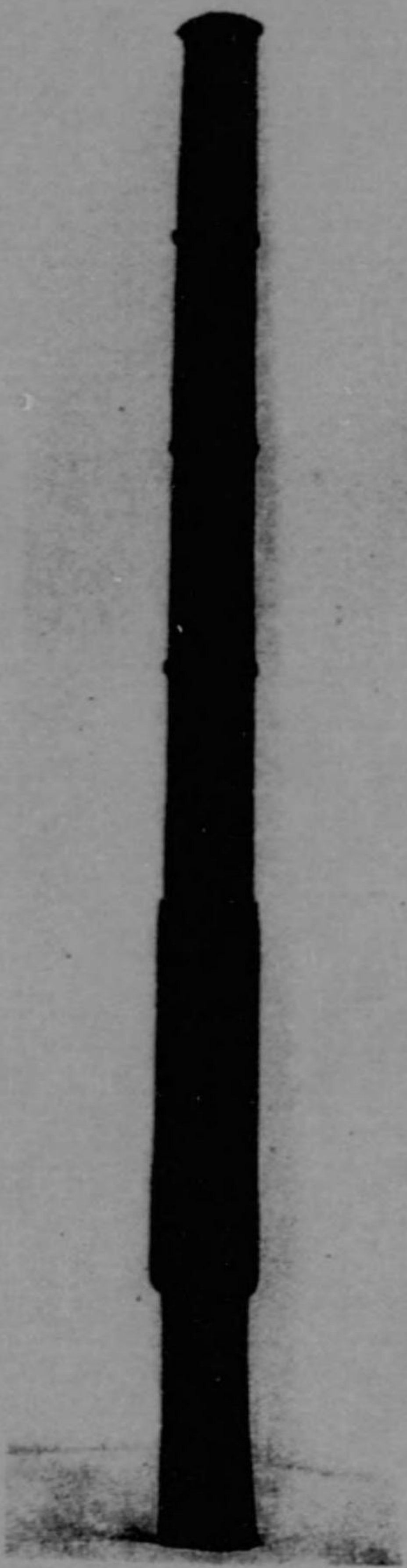
我邦ニ於ケル鐵砲傳來ノ嚆矢ハ普通天文十二年種子島ニ傳ハリタルモノナリトスルモ、コトニ掲出スルモノハ恐ラク夫ヨリモ以前即チ天文以前ニ尾道ノ貿易家澁谷氏ガ内海又ハ西海ノ海賊ヨリ入手シタルモノナルベシ。最近九州帝大長沼教授ニヨリテ發見セラレタルモノナリ。因ニ澁谷氏ハ秀吉征韓當時兵糧ヲ運送セシ商人ニシテ、今モ尙同家ニハ當時ノ受領證等ヲ存ス。

一〇九 元弘役當時使用ノ護摩器及其由來記

一具一巻

尾道市 松本清助氏藏

此護摩器ハ蒙古降伏新羅ノ護摩ヲ焚ク爲ニ用ヒラレタルモノニシテ、由來書ニ據レバ、永享二年之ヲ家寶トシテ武運長久ヲ祈ルベキ旨記ナレタリ。永享年中ニハ蒙古襲來ノ事ヲ記セル八幡恩童調ノ著アリ、又蒙古ニ長日不斷ノ祈禱ヲナシテ誠忠ヲ顯ハレタル賀茂ノ慧安ガ禪師號ヲ勅諭セラレタルモ永享ノ前ナル應永年間ノ事ナリ。コレラノ事柄ト略時ヲ同ジクシテ元弘役事後ノ一資料タルハ興深シト云フベシ。松木氏ハ伊豫ノ河野家ヨリ岐レタル一族ニシテ蒙古役ニモ出陣セリ。





昭和三年十月二十日印刷  
昭和三年十月三十日發行

(非賣品)

編輯者

海軍兵學校

不許複製

印刷者

小林彌一

印刷所

美術書院

大阪市住吉區天王寺町九三六



424

50

